ければかさねて遣しける

思寐の夢といひてもやみなましなかなか何にありと知りけむ

大和のかみに侍りける時かの國のすけ藤原清秀が女をむかへむと契りておほやけごとによりてあからさまに京にのぼりたりける程にこのむすめ眞延法師に迎へられてまかりにければ國に歸りてたづねてつかはしける　忠房朝臣

いつしかの音になき歸りこしかども野邊の淺茅は色付にけりせうそこ遣しける女の返事にまめやかにしもあらじなどいひて侍りければ

引き眉のかく二籠せまほしみくはこきたれてなくをみせばやある人のむすめあまたありけるを姉よりはじめていひ侍りけれどきかざりければ三にあたる女に遣しける　讀人しらず

關山のみねの杉むら過ぎゆけどあふみは猶ぞはるけかりける

朝忠朝臣久しう音もせで文おこせて侍りければ

思ひ出でておとづれしける山彦のこたへにこりぬ心なになり

いと忍びてまかりありきて

まどろまぬ物からうたてしかすがに現にもあらぬ心地のみする

かへし

うつつにもあらぬ心はゆめなれや見てもはかなき物を思へば

うづまさわたりに大輔が侍りけるに遣しける　小野道風朝臣

かぎりなく思ひ入る日のともにのみ西の山邊をながめやる哉

女五のみこに　忠房朝臣

君が名のたつに咎なき身なりせばおほよそ人になしてみましや
かへし　女五のみこ

絶えぬると見ればあひぬる白雲のいとおほよそに思はずもがな
みくしげ殿にはじめて逢ひて遣しける　敦忠朝臣

今日そへに暮れざらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり
道風忍びてまうできけるに親聞きつけてせいし

ければつかはしける　大輔

いとかくてやみぬるよりは稲妻の光のまにもきみを見てしが
大輔が許にまうできたりけるに侍らざりければ
歸りて又のあしたに遣しける　朝忠朝臣

いたづらに立ちかへりにし白波のなごりに袖のひる時もなし
かへし　大輔

何にかは袖のぬるらむ白波のなごりありけも見えぬこころを
好古朝臣に更にあはじと誓言をして又のあした
につかはしける　藏内侍

誓ひてもなほ思ふにはまけにけり誰がためをしき命ならねば
忍びてまかりけれどあはざりければ　道風

難波女にみつとはなしに蘆のねのよの短くて明くるわびしさ
物いはむとてまかりたりけれどさきだちてむね
もちが侍りければはや歸りねといひ出し侍りけ
れば

かへるべきかたもおぼえず涙川いづれかわたる淺瀬なるらむ
かへし　大輔

涙川いかなる瀬より歸りけむここなるみをもあやしかりしを

大輔がもとに遣しける　敦忠朝臣

池水のいひ出づる事の難ければみごもりながら年ぞへにける

後撰和歌集　卷第十三

戀歌五

題しらず　業平朝臣

伊勢の海に遊ぶ蜑ともなりにしが波かき分けてみるめ潜かむ

かへし　伊勢

おほろけの蜑やは潜く伊勢の海の波高き浦におふるみるめを

つれなく見え侍りける人に　讀人しらず

つらしとやいひはててまし白露の人に心はおかじとおもふを

題しらず

ながらへば人の心もみるべきに露のいのちぞかなしかりける

獨ぬる時は待たるる烏の音もまれにあふ夜はわびしかりけり　小町が姉

女の恨みおこせて侍りければ遣しける　深養父

空蟬のむなしきからになるまでも忘れむと思ふ我ならなくに

あだなる男をあひしりて心ざしはありと見えなから猶疑はしく覺えければ遣しける　讀人しらず

いつまでのはかなき人の言の葉か心のあきのかぜを待つらむ

題しらず

うたたねの夢ばかりなるあふ事を秋の夜すがら思ひつるかな

女の許にまかりたりけるに門をさしてあけざりければまかり歸りて朝に遣しける　兼輔朝臣

秋の夜の草のとざしの佗しきは明くれどあけぬ物にぞありける

かへし　讀人しらず

いふからにつらさぞ增る秋の夜の草のとざしにさはるべしやは

桂のみこにすみ初めけるあひだに彼のみこあひ思はぬけしきなりければ　さだかずのみこ

人しれず物思ふころの我が袖はあきの草葉におとらざりけり

贈太政大臣

忍びたる人につかはしける

しづはたに思ひ亂れて秋の夜の明くるもしらず歎きつるかな

消息かよはしけれどもまだあはざりける男をこなりィれかれあひにけりといひ騷ぐをあらがはざるを　讀人しらず

と恨みければ

蓮葉(はちすば)のうへはつれなき裏にこそ物あらがひはつくといふなれ

男のつらうなりゆく頃雨の降りければ遣しける

降りやめば跡だに見えぬ泡沫の消えてはかなき世を頼むかな

女の許にまかりてえあはで歸りてつかはしける

あはでのみあまたの夜をも歸るかな人めのしげき逢坂にきて

女に物いふ男二人ありけりひとりに返事すと聞

きて今一人が遣しける

聞く方ありけるものをなよ竹のよにへぬものと思ひけるかな

女の心かはりぬべきを聞きてつかはしける

ねになければ人笑へなり吳竹のよにへぬをだに勝ちぬと思はむ

文遣しける女の親の伊勢へまかりければ共にま

かりけるにつかはしける

伊勢の蜑と君しなりなば同じくば戀しき程にみるめからせよ

一條がもとにいとなむ戀しきといひにやりたり

ければ鬼のかたをかきてやるとて　一條

戀しくばかけをだに見て慰めよ我がうちとけてしのぶ顔なり

伊

かへし

影みればいとど心ぞまどはるる近からぬけのうときなりけり

人のむすめに忍びて通ひ侍りけるにつらげに見

え侍りければ消息ありける返事に　讀人しらず

人毎のうきをも知らずありかせし昔ながらの我が身ともがな

見なれたる女に物いはむとてまかりたりけれど

聲はしながら隱れければ遣しける

郭公なつきそめにしかひもなく聲をよそにも聞きわたるかな

人の許にはじめてまかりてつとめて遣しける

常よりもおきうかりつる曉は露さへかかるものにぞ有りける

忍びてまできける人の霜のいたくふりける夜まからでつとめて遣しける

置く霜のあかつきおきを思はずば君が夜殿に夜がれせましや

かへし

霜おかぬ春より後のながめにもいつかは君がよがれせざりし

心にもあらで久しく訪はざりける人の許に遣し

源英明朝臣

ける

伊勢の海の蜑のまてがた暇なみ長らへにける身をぞうらむる

えがたう侍りける女の家の前よりまかりけるを

見ていづこへいくぞといひ出して侍りければ　藤原爲世

あふ事のひた野へとてぞ我はゆく身を同じ名に思ひなしつつ

題しらず　讀人しらず

君があたり雲井に見つつ宮路出うち越えゆかむ道もしらなく

男の返事につかはしける　俊子

思ふてふ言の葉いかになつかしな後うき物とおもはずもがな

題しらず　兼茂朝臣女

思ふてふことこそうけれ吳竹のよにふる人のいはぬなければ

讀人しらず

思はむとわれをたのめし言の葉はわすれ草とぞ今はなるらし

男の病にわづらひて罷らで久しくありて遣しける

今迄も消えでありつる露の身はおくべき宿のあればなりけり

かへし

言の葉もみな霜枯になりゆけば露のやどりもあらじとぞ思ふ

恨みおこせて侍りける人の返事に

忘れなむといひし事にもあらなくに今はかぎりと物思ふかは

題しらず

現にはふせど寐られずおきかへり昨日の夢をいつかわすれむ

女につかはしける

ささら波まなく立つめる浦をこそよに淺しとも見つつ忘れめ

西四條の齋宮まだみこにものし給ひし時心ざし

ありて思ふ事はべりける間に齋宮に定り給ひにければそのあくるあしたに榊の枝につけてさし

敦忠朝臣

おかせ侍りける

伊勢の海の千尋の濱に拾ふとも今はなにてふかひか有るべき

朝賴朝臣の年頃せうそこ通し侍りける女の許より用なし今は思ひ忘れねとばかり申して久しうなりにければこと女にいひつきて消息もせずなりにければ

本院のくら

忘れねと言ひしに叶ふ君なれど訪はぬはつらき物にぞありける

讀人しらず

題しらず

春霞はかなく立ちてわかるとも風よりほかにたれか訪ふべき

伊勢

かへし

目に見えぬかぜに心をたぐへつつやらば霞のわかれこそせめ

土佐が許よりせうそこ侍りける返事につかはしける

貞元親王

深緣そめけむ松のえにしあらばうすき袖にもなみはよせてむ

土佐

かへし

松山のすゑこす波のえにしあらば君の袖にはあともとまらじ

女のもとより定なき心ありなど申したりければ　贈太政大臣

深く思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風ふきてちりぬる

男の心かはるけしきありければただなりける時

この男の心ざせりける扇にかきつけて侍りける　讀人しらず

人をのみうらむるよりは心からこれ忌まざりし罪とおもはむ

忍びたる女の許に消息つかはしたりければ

あしびきの山下しげくゆく水のながれてかくしとはば頼まむ

男の忘れ侍りにければ　伊勢

佗びはつる時さへものの悲しきはいづこをしのぶ心なるらむ

親のまもりける女をいなともせとも言ひはなて

と申しければ

いなせともいひ放たれず憂き物は身を心ともせぬ世なりけり

男のいかにぞえまうでこぬことといひて侍りけ

れば　讀人しらず

來ずやあらむ來やせむとのみ河岸のまつの心を思ひやらなむ

とまれと思ふ男の出でてまかりければ

しひてゆく駒の足をるはしをだになど我が宿に渡さざりけむ

物いひ侍りける人の久しう訪れざりけるかちう

じてまうできたりけるになどか久しうといへり

ければ

年をへて生けるかひなき我が身をば何かは人にありとしられむ

いと忍びてまできたりける男をせいしける人あ

りけりのしりければ歸りまかりて遣しける

あさりする時ぞ佗しき人知れずなにはの浦にすまふ我が身は

公頼朝臣今まかりける女のもとにのみまかりければ　寛湛法師母

ながめつつ人待つよひの呼子鳥いづ方へとか行きかへるらむ　讀人しらず

人ごとの頼みがたさは難波なる蘆のうら葉のうらみつべしな

忍びて通ひ侍りける人今歸りてなどたのめ置きておほやけの使に伊勢の國にまかりて歸りまうできて後久しうとはず侍りければ　少將内侍

人はかる心のくまはきたなくて清きなぎさをいかで過ぎけむ　兼輔朝臣

かへし

たがためにわれが命をながはまの浦に宿りをしつつかはこし　讀人しらず

女の許につかはしける

せきもあへず淵にぞ迷ふ涙川わたるてふ瀬を知るよしもがな

かへし

淵ながら人かよはさじなみだがは渡らば淺き瀬をもこそみれ（もこそはみめィ）

常にまうできて物（つつィ）などいふ人の今はなまうでこそ人もうたていふなりといひ出して侍りければ

きてかへる名をのみぞたつから衣したゆふひもの心とけねば　内侍平子

左大臣河原にいでありて侍りければ

たえぬともなに思ひけむ涙川ながれあふ瀬もありけるものを　左大臣

大輔につかはしける

いまははやみやまを出でて郭公けぢかき聲をわれにきかせよ

かへし

人はいさみやまがくれの郭公ならはぬさとは住みうかるべし

左大臣に遣しける　中務

有りしだに憂かりし物をあはずとて何(いづ)こにそふるつらさなるらむ

右近につかはしける　左大臣

思ひわび君がつらきに立ちよらば雨も人目ももらさざらなむ

高明朝臣に笛をおくるとて　讀人しらず

笛竹のもとの古ねは變るとも己がよよにはならずもあらなむ

こと女に物いふと聞きてもとのめの内侍(ないし)のふす

べ侍りければ　好古朝臣

めも見えず涙のあめのしぐるれば身の濡衣(ぬれぎぬ)はひるよしもなし

かへし　中將内侍

にくからぬ人のきせけむ濡衣はおもひにあへず今かわきなむ

題しらず　小野道風

おほかたは瀬とだにかけじ天の川ふかき心をふちとたのまむ

かへし　讀人しらず

淵とてもたのみやはする天の川としにひとたび渡るてふ瀬を

みくしげ殿の別當につかはしける　清蔭朝臣

身のならむことをもしらず漕ぐ船は波の心もつつまざりけり

事いできて後に京極御息所につかはしける　元良親王

侘びぬれば今はた同じ難波なるみをつくしてもあはむとぞ思ふ

忍びてみくしげ殿のべたうにあひかたらふと聞

きて父の左大臣のせいし侍りければ　敦忠朝臣

いかにしてかく思ふてふことをだに人傳ならで君にかたらむ

公頼朝臣のむすめに忍びてすみ侍りけるにわづ

らふ事ありて死ぬべしといへりければ遣しける　朝忠朝臣

諸共にいざといはずば死出の山こゆともこさむ物ならなくに

年をへてかたらふ人のつれなくのみ侍りければ

移ろひたる菊につけて遣しける　清蔭朝臣

かくばかり深きいろにも移ろふをなほ君きくの花といはなむ

人の許にまかりたりけるに門よりのみ歸しける

にからうじて簾のもとに呼びよせてかうてさへ

や心ゆかぬといひ出したりければ　讀人しらず

いさやまだ人の心もしらつゆのおくにもとにも袖のみぞひづ

人のもとにまかりけるを逢はでのみかへし侍り

ければ道よりいひつかはしける

よる汐のみちくる浦空も思ほえず逢ふ事なみにかへると思へば

人を思ひかけていひわたり侍りけるをまちどほ

にのみ侍りければ

數ならぬ身は山の端にあらねども多くの月をすぐしつるかな

久しういひ渡り侍りけるにつれなくのみ侍りけ

れば　業平朝臣

たのめつつ逢はで年ふるいつはりにこりぬ心を人は知らなむ

かへし　伊勢

夏蟲のしるしる惑ふおもひをば懲りぬ悲しとたれか見ざらむ

返事せぬ人に遣しける　讀人しらず

うちわびてよばはむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ

かへし

山彦の聲のまにまに訪ひゆかばむなしき空に行きやかへらむ

かくいひ交す程に三年ばかりになり侍りければ

あらたまの年の三年は空蟬のむなしき音をやなきてくらさむ

題しらず

流れいづる涙の川のゆくすゑはつひにあふみの海とたのまむ

雨のふる日人につかはしける

雨ふれどふらねど濡るる我が袖はかかる思ひに乾かぬやなぞ

かへし

露ばかりぬるらむ袖のかわかぬは君がおもひの程やすくなき

女の許にまかりたるに立ちながらかへしたれば

道よりつかはしける

常よりも惑ふまどふぞ歸りつるあぶみちもなき宿に行きつつ

雨にもさはらずまできてそら物語などしける男

の門よりわたるとて雨のいたく降ればなむまか

り過ぎぬるといひければ

濡れつつも來ると見えしは夏引の手引にたえぬ糸にやありけむ

人に忘られて侍りける時

數ならぬ身は浮草と成りななむつれなき人によるべ知られじ

思ひ忘れにける人の許にまかりて

ゆふやみは道もみえねど故郷はもとこし駒にまかせてぞくる

かへし

駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくると思ひけるかな

朝綱朝臣の女に文など遣しけるをこと女にいひ

つきて久しうなりて秋とぶらひて侍りければ

いづかたに言傳やりて雁がねのあふことまれに今はなるらむ

男のかれはてぬにことをとこをあひしりて侍り

けるにもとの男の東へまかりけるを聞きて遣し
ける

ありとだに聞くべき物を逢坂の關のあなたぞはるけかりける
かへし

關守のあらたまるてふ逢坂のゆふつけどりはなきつつぞゆく
又女のつかはしける

行きかへりきてもきかなむ逢坂の關にかはれる人もありやと
かへし

もる人のあるとは聞けどあふ坂のせきもとどめぬわが涙かな
かれにける男の思ひ出でてまできて物などいひて歸りて

葛城や久米路にわたす岩橋のなかなかにてもかへりぬるかな

かへし

中たえてくる人もなきかつらぎのくめぢの橋は今もあやふし
白ききぬども著たる女どものあまた月あかきに侍りけるを見てあしたに一人がもとにつかはしける　藤原有好

白雲のみなひとむらに見えしかど立ち出て君を思ひそめてき
女の許に遣しける　讀人しらず

外なれど心ばかりはかけたるをなどかおもひに乾かざるらむ
題しらず

我が戀の消ゆるまもなく苦しきは逢はぬ嘆きやもえ渡るらむ
かへし

消えずのみ燃ゆる思ひは遠けれど身も焦れぬる物にぞ有りける

又をとこ

上にのみおろかに燃ゆる蚊遣火のよにもそこには思ひ焦れじ

又かへし

かはとのみ渡るをみるに慰まで苦しきことぞいやまさりける

又をとこ

水増る心地のみしてわがために嬉しき瀬をば見せじとやする

後撰和歌集　巻第十四

戀歌六

人のもとにつかはしける　讀人しらず

逢ふ事をよどにありてふみづの森つらしと君を見つる頃かな

かへし

みづの森もるこのごろのながめにはうらみもあへず淀の川波（水ィ）

みづからまできて夜もすがら物いひ侍りけるに

程もなくあけ侍りければまかりかへりて

うきよとは思ふ物から天のとの明くるはつらき物にぞ有りける

女の許に遣しける

恨むれど戀ふれど君がよと共にしらず顔にてつれなかるらむ
　かへし
恨むとも戀ふともいかが雲井より遙けき人をそらに知るべき
　いひわづらひて止みにける人に久しう有りて又
遣しける
しづ機にへつるほどなり白糸のたえぬる身とは思はざらなむ
　かへし
へつるよりうすくなりにし曉機の糸は絶えでもかひやなからむ
　男のまできてすき事をのみしければ人やいかが
見るらむとて
くることは常ならずとも玉蔓たのみは絶えじと思ほゆるかな
　かへし

玉蔓頼めくる日の数はあれどたえだえにてはかひなかりけり
　男の久しう音づれざりければ
いにしへの心はなくや成りにけむ頼めしことのたえて年ふる
　かへし
いにしへも今も心のなければぞうきをもしらで年をのみふる
　男のただなりける折には常にまできけるが物い
ひて後は門よりわたりをしつつけれどまでこざりければ
絶えたりし昔だに見しうきはしを今はわたると音にのみ聞く
　いひ侘びて二年ばかり音もせずなりにける男の
五月ばかりにまできて年頃久しう有りつるなど
いひてまかりにけるに
忘られてとしふるさとの郭公なににひとこゑなきて行くらむ

題しらず

とふやとて杉なき宿にきにけれど戀しき事ぞしるべなりける

物いひわびて女のもとにいひ遣しける

露の命いつとも知らぬ世の中になどかつらしと思ひおかるる

女のほかに侍りけるをそこにと敎ふる人も侍らざりければ心づからとぶらひ侍りける返事に遣しける

狩人の尋ぬる鹿はいなみ野にあはでのみこそ有らまほしけれ

忍びたる女の許よりなどか音もせぬと申したりければ

小山田の水ならなくにかくばかり流れそめてはたえむ物かは

右大臣

男のまうでこでありありて雨のふる夜おほがさ

をこひに遣したりければ

月にだに待つ程多く過ぎぬれば雨もよにこじと思ほゆるかな

伊衡朝臣の女いまき

はじめて人に遣しける

讀人しらず

思ひつつまだいひそめぬわが戀をおなじ心にしらせてしがな

いひわづらひてやみにけるを又思ひ出でてとぶらひ侍りければ定めなき心かなといひて飛鳥川の心をいひつかはして侍りければ

朝賴朝臣

飛鳥川こころのうちに流るれば底のしがらみいつかよどまむ

思ひかけたる女の許に

讀人しらず

富士のねをよそにぞ聞きし今はわが思ひにもゆる煙なりけり

かへし

朝賴朝臣

驗なきおもひとぞきく富士の嶺もかごとばかりの煙なるらむ

いひかはしける男の親いといたうせいすと聞き
て女のいひつかはしける

いひさしてとどめらるなる池水の波いづかたに思ひよるらむ

同じ所に侍りける人の思ふ心侍りけれどいはで
忍びけるをいかなる折にかありけむあたりに書
きて落せりける

知られじな我がひとしれぬ心もて君をおもひの中にもゆとも（はイ）

心ざしをばあはれと思へど人めになむつつむと
いひて侍りければ

あふばかりなくてのみふるわが戀を人めにかくる事の佗しさ

題しらず

夏衣身にはなるともわがためにうすき心はかけずもあらなむ

いかにしてことかたらはむ郭公なけきの下（した）になけばかひなし
思ひつつ經にける年をしるべにてなれぬるものは心なりけり

文などつかはしける女のことをとこにつき侍り
けるに遣しける　源整

我ならぬ人すみの江の岸に出て難波のかたをうらみつるかな

整（ミヽのふ）がかれがたになり侍りにければとどめ置きた
る笛を遣すとて　讀人しらず

濁り行く水（家イ）には影の見えばこそあしまよふえを止めても見め

菅原のおほいまうち君の家に侍りける女に通ひ
侍りける男中たえて又とひて侍りければ

すがはらや伏見の里のあれしより通ひし人のあとも絶えにき

女の男を厭ひてさすがにいかがおぼえけむ言へ

りける

ちはやぶる神にもあらぬ我がなかの雲井遥になりもゆくかな

かへし

ちはやぶる神にも何かたとふらむおのれ雲井に人をなしつつ

敦慶親王

女三のみこに

うきしづみ淵瀬に騒ぐ鵜鳥はそこものどかに有らじとぞ思ふ

藤原守文

甲斐に人の物いふと聞きて

松山になみたかき音ぞきこゆなる我よりこゆる人はあらじを

男の許に雨ふる夜かさをやりて呼びけれど來ざりければ

讀人しらず

さしてこと思ひしものを三笠山かひなく雨のもりにけるかな

かへし

もるめのみ數多みゆれば三笠山しるしる如何さして行くべき

女の許よりいたくな思ひ佗びそと頼めおこせて侍りければ

なぐさむる言の葉にだにかからずばいまも消ぬべき露の命を

元慶親王のみそかにすみ侍りける頃今來むとたのめて來ずなりにければ

兵衛

人しれずまつにねられぬ有明の月にさへこそあざむかれけれ

忍びて住み侍りける人の許よりかかるけしき人に見すなといへりければ

元方

龍田川たちなば君が名ををしみいはせの森のいはじとぞ思ふ

宇多院に侍りける人にせうそこつかはしける返事も侍らざりければ

讀人しらず

うだの野はみみなしやまか呼子鳥よぶ聲にさへ答へざるらむ
　かへし　　宇多院の女五のみこ
みみなしの山ならずとも呼子鳥なにかはきかむ時ならぬ音を
　つれなく侍りける人に　　忠岑
戀ひ佗びて死ぬてふ事はまだなきに世の例(なぶし)にもなりぬべき哉
　立ちよりけるに女にげて入りければつかはしける　　讀人しらず
影みればおくへ入りぬ(けぃ)る君によりなどか涙のとへは出づらむ
　逢ひにける女の又あはざりければ
知らざりし時だにこえしあふ坂をなど今さらに我まどふらむ
　女の許にまかりそめてあしたに　　藤原蔭基
あかずして枕のうへにわかれにし夢路を又もたづねてしがな

男のとはずなりにければ　　讀人しらず
音もせずなりも行くかな鈴鹿山こゆてふ名のみ高く立てつつ(ちぃ)
　かへし
越えぬてふ名をな恨(うとぃ)みそ鈴鹿山いとどま近くならむと思ふを
　女に物いはむとてきたりけれどこと人に物いひければ歸りて
我が爲に且はつらしとみ山木のこりともこりぬかかる戀せじ
　かへし
あふごなき身とはしるしる戀すとて嘆きこりつむ人はよきかは
　人につかはしける　　戒仙法師
朝ごとに露はおけども人こふるわが言の葉はいろもかはらず
　來て物いひける人のおほかたむつまじかりけれ

ど近うはえあはずして　　讀人しらず

ま近くてつらきを見るはうけれども憂は物かは戀しきよりは

女の許につかはしける　　藤原さねただ

筑紫なるおもひそめがは渡りなば水やまさらむ淀むときなく

かへし　　讀人しらず

わたりてはあだになるてふ染川の心づくしに成りもこそすれ

男のもとより花盛にこむといひてこざりければ

花ざかり過ししし君はつらけれど言の葉をさへかくしやはせむ

をとこの久しうとはざりければ　　右近

とふ事をまつに月日はこゆるぎの磯にや出でて今はうらみむ

あひしりて侍りける人の許に久しうまからざり

ければ忘草なにをか種と思ひしはといふことを

いひ遣したりければ　　讀人しらず

忘草名をもゆゆしみかりにても生ふてふ宿は行きてだに見じ

かへし

憂きことのしげきやどには忘草植ゑてだに見しあきぞ佗しき

女ともろともに侍りて

數しらぬおもひは君にある物をおきどころなき心地こそすれ

かへし

おき所なき思とし聞きつればわれにいくらもあらじとぞ思ふ

元長親王に夏のさうぞくしておくるとて添へた　　南院式部卿のみこの女

りける

わがたちてきるこそうけれ夏衣おほかたとのみ見べき薄さを

久しうとはざりける人の思ひ出でて今宵までこ

む門ささであひまてと申してこざりければ　讀人しらず

八重葎さしてし門をいまさらに何にくやしくあけて待ちけむ

人をいひわづらひてこと人にあひ侍りて後いかがありけむはじめの人に思ひかへりて程へにければ文はやらずして扇に高砂のかた書きたるにつけて遣しける　源庶明朝臣

さを鹿のつまなきこひを高砂のをのへの小松ききもいれなむかへし　讀人しらず

さを鹿の聲高砂にきこえしは妻なきときの音にこそありけれ

思ふ人にえあひ侍らで忘られにければせきもあへず涙の川の瀬を早みかからむものと思ひやはせし

題しらず

瀬を早みたえず流るる水よりもたえせぬ物は戀にぞありける

こふれども逢ふよなき身は忘草夢路にさへやおひしげるらむ

世の中の憂はなべてもなかりけり賴むかぎりぞ恨みられける

賴めたる人に

夕されば思ぞしげきまつ人のこむやこじやのさだめなければ　源よしの朝臣

女につかはしける

厭はれて歸りこしぢの白山はいらぬに惑ふものにぞ有りける

題しらず　讀人しらず

人なみにあらぬ我が身は難波なる蘆のねのみぞ下にながるる

白雲のゆくべき山はさだまらずおもふかたにも風はよせなむ

世の中に猶ありあけのつきなくて闇に惑ふをとはぬつらしな

さだまらぬ心ありと女のいひたりければつかはし

しける　　贈太政大臣

飛鳥川せきてとどむるものならば淵瀬になると何かいはれむ

久しうまかり通はずなりにければ十月ばかりに

雪の少し降りたるあしたいひ侍りける　　右近

身をつめば哀とぞ思ふ初雪のふりぬることもたれにいはまし

源正明朝臣十月、ばかりに常夏を折りて送りて侍りければ　　讀人しらず

冬なれど君が垣ねに咲きたればむべとこなつに戀しかりけり

女の恨むる事ありて親の許にまかり渡りて侍りけるに雪の深く降りて侍りければあしたに女のむかへに車遣しける消息にくはへて遣しける　　兼輔朝臣

白雪のけさは積れるおもひかなあはでふる夜の程もへなくに

かへし　　讀人しらず

白雪のつもるおもひも頼まれず春よりのちはあらじと思へば

心ざし侍る女みやづかへし侍りければあふ事難く侍りけるを雪のふるにつかはしける

我がこひし君があたりを離れねばふる白雪もそらに消ゆらむ

かへし　　藤原ときふる

山がくれ消えせぬ雪の佗しきは君まつの葉にかかりてぞふる

物いひ侍りける女に年のはてのころほひ遣しける　　藤原ときふる

あらたまの年は今日あすこえぬべし逢坂山をわれやおくれむ

後撰和歌集　巻第十五

雑歌一

仁和の帝嵯峨の御時の例にて芹川に行幸し給ひける日　在原行平朝臣

嵯峨の山みゆきたえにし芹川のちよのふるみち跡はありけり

同じ日鷹飼にてかりぎぬに鶴のかたをぬひて書きつけたりける

翁さびひとなとがめそかり衣今日はかりとぞたづもなくなる

行幸の又の日なむ致仕の表奉りける　紀友則

まだつかさ賜らざりける時ことのついで

侍りて年はいくらばかりになりぬると問ひ侍りければ四十餘になむなりぬると申しければ　贈太政大臣

今迄になどかは花の咲かずしてよそとせあまり年きりはする　友則

かへし

はるばるの數は忘れずありながら花さかぬ木を何に植ゑけむ

外更にしばしばまかりありきて殿上おりて侍りける時兼輔朝臣の許に送り侍りける　平なかき

よとともに峰へ麓へおりのぼり行く雲の身は我にぞありける

まだ后になり給はざりける時かたはらの女御たちそねみ給ふけしきなりけるとき帝御ざうしに忍びて立ちより給へりけるに御對面はなくて奉り給ひける　嵯峨后

こと繁ししばしはたてれ宵のまにおくらむ露は出でて拂はむ
家に行平朝臣まうできたりけるに月の面白かりける夜酒などたうべてまかりたたむとしけるほどに　河原左大臣

照る月を正木のつなによりかけてあかず別るる人をつながむ
かへし　行平朝臣

限なきおもひの綱のなくばこそ正木のかつらよりもなやまめ
世の中を思ひうじて侍りける頃　業平朝臣

住みわびぬ今はかぎりと山里につま木こるべき宿もとめてむ
我をしりがほにないひそと女のいひ侍りける返事に　躬恒

あしびきの山におひたる白樫のしらじなひとを朽木なりとも

はちすのはひをとりて
蓮葉のはひにぞ人はおもふらむよにはこひぢの中におひつつ　讀人しらず

姿あやしと人の笑ひければ
伊勢の海のつりのうけなるさまなれど深き心は底にしづめり
おほきおほいまうち君の白河の家にまかりわたりて侍りけるに人のざうしにこもり侍りて　中務

白河の瀧のいと見まほしけれどみだりに人をよせじものをや
かへし　おほきおほいまうち君

白河の瀧のいとなみみだれつつよるをぞ人はまつといふなる
逢坂の關に庵室を造りて住み侍りけるに行きかふ人を見て　蟬丸

これやこのゆくもかへるも別れつつ知るもしらぬも逢坂の關

さだめたる男もなくて物思ひけるころ　小野小町

蜑のすむ浦こぐ船のかぢをなみ世をうみわたるわれぞ悲しき

あひしりて侍りける女心にもいれぬさまに侍り

ければこと人の心ざしあるにつき侍りけるをな

ほしもあらず物いはむと申し遣したりけれど返

事もせず侍りければ　讀人しらず

濱千鳥かひなかりけりつれもなき人のあたりはなき渡れども

法皇寺めぐりし給ひける道にてかへでの枝を折

りて　素性法師

この御幸千年かへても見てしがなかかる山ぶし時にあふべく

西院の后おほんぐしおろさせ給ひておこなはせ

給ひける時彼の院の中島の松をけづりて書きつ

けー侍りける

おとにきく松が浦島けふぞ見るむべも心あるあまの住みけり

齋院のみそぎの垣下に殿上の人々まかりて曉に

歸りてむまが許につかはしける　右衛門

われのみはたちもかへらぬ曉にわきてもおける袖のつゆかな

しほなきとしたたみあへてと侍りければ　忠岑

鹽といへばなくても辛き世の中にいかにあへたるたたみなるらむ

直垂こひに遣したるに裏なむなきそれは著じと

やいかがといひたれば　藤原元輔

住吉のきじともいはじ沖つ浪なほうちかけようらはなくとも

法皇はじめて御ぐしおろし給ひて山ぶみし給ふ

あひだ后をはじめ奉りて女御更衣なほひとつ院

にさぶらひ給ひける三年といふになむみかど歸
りおはしましたりける昔のごと同じ所にておほ
んぐしおろし給うけるついでに　七條のきさき

言の葉のたえせぬ露はおくらむや昔おぼゆるまとゐしたれば　伊勢

御かへし

海とのみ圍繞の中は成りぬめりそながらあらぬ影の見ゆれば

志賀の唐崎にてはらへしける人のしもづかへに
みるといふ侍りけり大伴黒主そこにまできてか
のみるに心をつけていひ戯ぶれけりはらへはて
て車より黒主に物かづけけり其裳の腰にかきつ
けてみるに送り侍りける　黒主

何せむにへたのみるめを思ひけむ沖つ玉藻をかづく身にして

月の面白かりけるを見て　躬恒

晝なれや見ぞ紛へつる月影を今日とやいはむ昨日とや言はむ

五節の舞姫にてもしめしとどめらるる事やある
と思ひ侍りけるをさもあらざりければ　藤原滋包女

くやしくぞ天つ乙女となりにける雲路たづぬる人もなき世に

太政大臣の左大將にて相撲のかへりあるじし侍
りける日中將にてまかりて事をはりてこれかれ
まかりあがれけるにやんごとなき人二三人ばか
りとどめてまらうどあるじ酒あまたたびの後醉
にのりて子どものうへなど申しけるついでに　兼輔朝臣

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

女友だちの許につくしよりさし櫛を心ざすとて　大江玉淵朝臣女

難波潟なににもあらずみをつくしふかき心のしるしばかりぞ

元長親王のすみ侍りける時てまさぐりに何いれて侍りける箱にか有りけむしたおびしてゆひて又こむ時にあけむとて物のかみにさし置きていで侍りにける後常明親王にとりかくされて月日久しく侍りてありし家にかへりてこの箱を元長親王に送るとて　中務

明けてだになにかはせむ水の江の浦島の子を思ひやりつつ

忠房朝臣津の守にて新司治方がまうけに屏風てうじて彼の國の名ある所々繪にかかせてさび江といふところに書けりける　忠岑

年をへて濁りだにせぬさび江には玉もかへりて今ぞすむべき

兼輔朝臣宰相中將より中納言になりて又の年の

り弓のかへりだちのあるじにまかりてこれかれ　兼輔朝臣

思をのぶるついでに

ふるさとの三笠の山はとほけれどこゑは昔のうとからぬかな

淡路のまつりごと人の任はてのぼりまうでき

ての頃兼輔朝臣の粟田の家にて　躬恒

ひき植ゑし人はむべこそ老いにけれ松のこ高くなりにける哉

人のむすめに源かねきがすみ侍りけるを女の母

聞き侍りていみじうせいし侍りければ忍びたる

方にて語らひける間に母しらずして俄にいきけ

ればかねきがにげてまかりければ遣しける　女の母

小山田のおどろかしにもこざりしをいとひたぶるににげし君哉

三條右大臣みまかりてあくる年の春大臣めしあ
りと聞きて齋宮のみこにつかはしける　むすめの女御
いかでかの年ぎりもせぬ種もがな荒れたる宿に植ゑてみるべく
かの女御左のおほいまうち君にあひにけりと聞
きて遣しける　齋宮のみこ
春毎に行きてのみ見む年ぎりもせずといふ種はおひぬとか聞く
庶明朝臣中納言になり侍りける時うへのきぬつ
かはすとて　右大臣
おもひきや君が衣をぬぎかへて濃きむらさきの色をきむとは
かへし　庶明朝臣
いにしへも契りてけりな打ちはぶき飛びたちぬべき天の羽衣
雅正がとのゐ物をとりたがへて大輔が許にもて

きたりければ　大輔
ふるさとの奈良の都のはじめよりなれにけりとも見ゆる衣か
かへし　雅正
ふりぬとて思ひも捨てじ唐衣よそへてあやなうらみもぞする
世の中の心にかなはぬなど申しければ行くさき
頼しき身にてかかる事あるまじと人申し侍りけ
れば　大江千里
流れてのよをも頼まず水の上の沫に消えぬるうき身と思へば
藤原さねきが藏人（まかりたりなむ）よりかうぶり賜りてあす殿上
おりむとしける夜酒（やイ）たうべけるついでに　兼輔朝臣
うば玉のこよひばかりぞあけ衣あけなば君をよそにこそ見め
法皇御ぐしおろし給ひての頃　七條后

人わたす事だになきを何しかもながらの橋と身のなりぬらむ　伊勢

御かへし

ふるる身は涙のなかに見ゆればや長柄の橋にあやまたるらむ

京極の御息所尼になりて戒うけむとて仁和寺に　あつみのみこ

わたりて侍りければ

獨のみながめて年をふる里の荒れたるさまをいかに見るらむ　朝綱朝臣

女のあだなりといひければ

まめなれどあだ名は立ちぬたはれ島よる白浪をぬれ衣にきて

あひかたらひける人の家の松の梢のもみぢたり　讀人しらず

ければ

年をへて頼むかひなしときはなる松のこずゑも色かはりゆく

男の女の文を隠しけるを見てもとの妻の書きつけ侍りける

へだてつるひとの心のうきはしを危きまでもふみ見つるかな　四條御息所女

小野好古朝臣西の國のうての使にまかりて二年

といふ年四位には必ずまかりなるべかりけるを

さもあらずなりにければかかる事にしもさされ

にける事の安からぬ由をうれへ送りて侍りける

文の返事の裏にかきつけて遣しける　源公忠朝臣

玉櫛笥二年あはぬ君が身をあけながらやはあらむとおもひし

かへし　小野好古朝臣

あけながら年ふる事は玉櫛笥みのいたづらになればなりけり

後撰和歌集　巻第十六

雑歌二

思ふ心ありて前太政大臣によせて侍りける　在原業平朝臣

頼まれぬ憂世の中をなげきつつ日陰におふる身をいかにせむ

やまひし侍りて近江の閑寺にこもりて侍りける

に前の道より閑院のご石山に詣うでけるをただ

今なむ行き過ぎぬると人のつげ侍りければおひ

てつかはしける　敏行朝臣

逢坂のゆふつけになく鳥の音を聞き咎めずぞ行き過ぎにける

前中宮宣旨贈太政大臣の家よりまかり出でてあ

るにかの家にことにふれて日ぐらしといふこと

なむ侍りける　宣旨

み山よりひびき聞ゆる日ぐらしの聲をこひしみ今もけぬべし

かへし　贈太政大臣

蜩(ひぐらし)のこゑをこひしみ消(け)ぬべくば深山(とほりゐ)ほとりにはやも來ねかし

河原に出でてはらへし侍りけるにおほいまうち

君もいであひ侍りければ　敦忠朝臣母

誓はれし賀茂の河原に駒とめてしばし水かへかげをだに見む

人の牛をかりて侍りけるに死に侍りければいひ

遣しける　閑院のご

わがのりしことをうしとや消えにけむ草葉にかかる露の命は

延喜の御時賀茂臨時祭の日御前にてさかづきと

りて

かくてのみやむべきものかちはやぶる賀茂の社の萬代をみむ　三條右大臣

同じ御時北野の行幸にみこし岡にて　枇杷左大臣

御輿岡いくその世々に年を經て今日の行幸を待ちてみつらむ

戒仙が深き山寺に籠り侍りけるにこと法師まう　讀人しらず

できて雨に降りこめられて侍りけるに

いづれをか雨ともわかむ山ぶしの落つる涙もふりにこそふれ

これかれ逢ひて夜もすがら物語してつとめて送　おきかぜ

りける

思ひにはきゆる物ぞと知りながら今朝しもおきて何にきつらむ

若う侍りける時は志賀に常に詣うでけるを年老いては參り侍らざりけるに參り侍りて　讀人しらず

めづらしや昔ながらの山の井はしづめる影ぞくちはてにける

宇治のあじろにしれる人の侍りければまかりて　大江興俊

宇治川の波にみなれし君ませば我もあじろによりぬべきかな

院のみかど内におはしましし時人々に扇てうぜさせ給ひける奉るとて　小貳のめのと

ふき出づるねどころ高くきこゆなり初秋風はいざ手ならさじ

かへし　大輔

心してまれにふきつる風なれば山おろしにはなさじとぞ思ふ

男のふみ多く書きてといひければ　讀人しらず

はかなくて絶えなむ蜘の糸ゆゑに何にか多くかかむとぞ思ふ

鞍馬の坂をよる越ゆとてよみ侍る　亭子院いまあことめしける人

昔よりくらまの山といひけるはわがごと人もよるや越えけむ

男につけてみちのくにへむすめを遣したりける
がこのをとこ心かはりたりと聞きて心うしと親
のいひ遣したりければ　　讀人しらず

雲井路の遙けき程のそらごとはいかなる風の吹きてつけけむ
かへし　　女の母

天雲のうきたることと聞きしかどなほぞ心はそらになりにし
たまさかに通へりける文をこひかへしければそ
の文にぐして遣しける　　もとよしのみこ

やればをしやらねば人に見えぬべし泣々もなほ返すまされり
延喜の御時御馬を遣して早くまゐるべき由おほ
せつかはしたりければ即ちまゐりておほせ言う
けたまはれる人につかはしける　　素性法師

望月のこまより遲く出でつればたどるたどるぞ山は越えつる
病して心細しとて大輔につかはしける　　藤原敦敏

萬代と契りしことのいたづらに人わらへにもなりぬべきかな
かへし　　大輔

かけていへばゆゆしきものを萬代と契りし事や叶はざるべき
あられの降るを袖にうけて消えけるを海のほと
りにて　　讀人しらず

散るとみて袖にうくれど溜らぬは荒れたる波の花にぞありける
ある所のわらは女五節見に南殿にさぶらひて沓
を失ひてけり　輔臣朝臣藏人にて沓をかして侍
りけるをかへすとて

立ち騷ぐ波まを分けてかづきてし沖のもくづをいつか忘れむ

かへし　　輔臣朝臣

かづきてし沖のもくづを忘れずば底のみるめを我にからせよ

人の裳をぬはせ侍るにぬひて遣すとて　　讀人しらず

かぎりなく思ふ心は筑波嶺のこのもやいかが有らむとすらむ

男のやまひしけるをとぶらはでありありてやみ

がたにとへりければ

思ひ出でてとふ言の葉を誰みまし身の白雲になりなましかば

みそか男したる女をあらくはいはでとへど物も

いはざりければ

忘れなむと思ふ心のつくからに言の葉さへやいへばゆゆしき

男のかくれて女を見たりければつかはしける

隠れゐてわがうきさまをみづの上の沫とも早く思ひ消えなむ

世の中をとかく思ひ煩ひける程に女友だちなる

人猶わがいはむことにつきねと語らひはべりけ

れば

ひとごころいさやしら波たかければ寄らむ渚ぞかねて悲しき

いたくこと好む由を時の人いふと聞きて　　高津内親王

直き木に曲れる枝もあるものを毛をふき疵をいふがわりなさ

帝に奉り給ひける　　嵯峨后

移ろはぬ心の深くありければここら散る花はるにあへるごと

これかれ女の許にまかりて物いひなどしけるに

女のあなさむの風やと申しければ　　讀人しらず

玉垂のあみめのまより吹く風の寒くばそへて入れむおもひを

男のいひけるを騒ぎければ歸りて朝に遣しける

白波のたち騒がれて立ちしかば身をうしほにぞ袖はぬれにし

かへし

とりもあへず立ち騒がれしあだ波にあやなく何に袖の濡れけむ

題しらず

たづたちとも頼まざらなむ身にちかき衣の關もありといふなり

友達の久しくあはざりけるにまかりてあひて詠

み侍りける

逢はぬまは戀しきみちも知りにしをなど嬉しきにまどふ心ぞ

題しらず

いかなりし節にか糸の亂れけむしひてくれども解けずみゆるは

人のめに通ひける見つけられ侍りて　賀朝法師

身なぐとも人にしられじ世の中に知られぬ山を知る山もがな

かへし

世の中にしられぬ山に身なぐともたにの心のいはでおもはむ　もとのをとこ

山の井の君に遣しける　讀人しらず

音にのみ聞きてはやまじ淺くともいざ汲み見てむ山の井の水

やまひしけるをからうじておこたれりと聞きて

しでの山たどるたどるも越えなくてうき世の中に何歸るらむ

題しらず

數ならぬ身を重荷にて吉野山たかきなげきをおもひこりぬる

かへし

吉野山こえむことこそ難からめこらむなげきの數はしりなむ

陽成院の帝時々とのゐにさぶらはせ給ひけるを

久しうめしなかりければ奉りける　武藏

數ならぬ身におくよひの白玉は光みえさすものにぞ有りける

まかり通ひける女の心とけずのみ見え侍りければ年月も經ぬるを今さらかかる事といひ遣したりければ　　讀人しらず

難波潟みぎはの蘆のおひかぜにうらみてぞふる人のこころを

女の許より恨みおこせて侍りける返事に

忘るとは恨みざらなむはしたかのとかへる山の椎はもみぢず

昔同じ所に宮づかへし侍りける女の男につきて人の國におちゐたりけるを聞きつけて心ありける人なればいひ遣しける

をちこちの人めまれなる山里にいへるせむとは思ひきやきみかへし

身をうしと人しれぬよを尋ねこし雲の八重だつ山にやはあらぬ

をとこなど侍らずして年頃山里に籠り侍りける女を昔あひしりて侍りける人道まかりけるついでに久しうきこえざりつるをここになりけりといひ入れて侍りければ　　土佐

朝なけに世の憂き事を忍びつつながめせしまに年はへにけり

山里に侍りけるに昔あひしれる人のいつよりここにはすむぞと問ひければ　　閑院

春やこし秋や行きけむおほつかな陰は朽木と世をすぐす身は

題しらず　　貫之

世の中はうき物なれや人ごとのとにもかくにもきこえ苦しき

讀人しらず

武藏野は袖ひづばかり分けしかど若むらさきは尋ねわびにき

暇にてこもり侍りける頃人のとはず侍りければ　壬生忠岑

大荒木の森の草とや成りにけむかりにだにきて訪ふ人のなき

ある所に宮づかへし侍りける女のあだ名たちけるがもとよりおのれがうへはそこになむくちのはにかけていはるなど恨み侍りければ　讀人しらず

あはれてふことこそ常の口のはにかかるや人を思ふなるらむ

題しらず　伊勢

吹く風の下の塵にもあらなくにさもたちやすきわが浮名かな

春日にまうでける道にさほ川のほとりに初瀬より歸る女車のあひて侍りけるにすだれのあきたるより僅に見入れければあひしりて侍りける

女の心ざし深く思ひかはしながら憚る事侍りてあひ離れて六七年ばかりに成りにける女に侍りければ彼の車にいひいれ侍りける　閑院左大臣

ふるさとの佐保の川水けふも猶かくてあふせは嬉しかりけり

枇杷左大臣よう侍りて楢の葉をもとめ侍りければ千兼があひしりて侍りける家にとりにつかはしければ　俊子

我が宿をいつならしてか楢の葉のならし顔には折りにおこする

かへし　枇杷左大臣

ならの葉の葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟なさるな

友達の許にまかりてさかづきあまたたびになりければ遁げてまかりけるを止めわづらひもて侍

りける笛を取りとどめて又の朝に遣すとて　　讀人しらず

かへりては音にやたつべきいたがはむ笛竹のつらき一よのかたみと思へば

かへし

ひとふしに恨みなばこそ笛竹の聲のうちにも思ふこころあり

もとより友達に侍りければ貫之にあひ語らひて

兼輔朝臣の家に名簿を傳へさせ侍りけるにその

名つきに加へて貫之におくりける　　躬恒

人につぐたよりだになし大荒木の森のしたなる草の身なれば

兼忠朝臣の母みまかりにければ兼忠をば故枇杷

左大臣の家にむすめをば后の宮にさぶらはせむ

とあひ定めて二人ながらまづ枇杷の家に渡し送

るとてくはへ侍りける　　兼忠朝臣の母の乳母

結び置きしかたみのこだになかりせば何に忍の草をつまましし

物思ひ侍りける頃やんごとなき高き所よりとは

せ給へりければ　　讀人しらず

うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬものは涙なりけり

世の中の心にかなはぬ事申しけるついでに　　貫之

惜しからでかなしき物は身なりけり憂世そむかむ方を知らねば

思ふこと侍りけるころ人に遣しける　　讀人しらず

思ひ出づるときぞ悲しき世の中は空ゆく雲のはてを知らねば

題しらず

哀ともうしともいはじ陽炎のあるかなきかに消ぬる世なれば

あはれてふことに慰む世の中をなどか悲しといひて過ぐらむ

播磨の國に高潟といふ所に面白き家もちて侍り

けるを京にて母がおもひにて久しう罷らで彼の
高潟に侍る人にいひつかはしける

物思ふと行きてもみねば高潟の蜑のとまやは朽ちやしぬらむ

延喜の御時ときの藏人のもとに奏しもせよとお
ほしくてつかはしける　躬恒

夢にだに嬉しとも見ばうつつにて佗しきよりは猶まさりなむ

後撰和歌集　卷第十七

雜歌三

いそのかみといふ寺に詣でて日の暮れにければ
夜あけてまかり歸らむとてとどまりてこの寺に
遍昭侍りと人の告げ侍りければ物いひ心みむと
ていひ侍りける　小町

岩の上にたびねをすればいとさむし苔の衣をわれにかさなむ

かへし　遍昭

世をそむく苔の衣はただ一重かさねばうとしいざふたりねむ

法皇かへりみ給ひけるを後々は時衰へありしや

うにもあらずなりにければ里にのみ侍りて奉ら
せける　せかるの君

逢ふ事の年ぎりしぬる歎きにはみの數ならぬ物にぞ有りける
女の許よりあだにきこゆることなどいひて侍り
ければ　左大臣

あだ人もなきにはあらず有りながら我が身にはまだ聞きも習はぬ
題しらず　讀人しらず

宮人とならまほしきを女郎花野邊よりきりの立ち出てぞくる
かしこまる事侍りてさとに侍りけるをしのびて
ざうしに參れりけるをおほいまうち君のなどか
音もせぬとうらみければ　大輔

我が身にもあらぬ我が身の悲しきは心も異になりやしにけむ

人のむすめに名たち侍りて　讀人しらず

世の中をしらずながらも津の國のなにはたちぬる物にぞ有りける
なき名たちける頃

よとともに我ぬれぎぬとなる物はわぶる涙のきするなりけり
前坊おはしまさずなりての頃五節の師のもとに
つかはしける　大輔

うけれども悲しきものをひたぶるに我をや人の思ひすつらむ
かへし　讀人しらず

悲しきもうきも知りにし一つ名を誰をわくとか思ひ捨つべき
大輔がざうしに敦忠朝臣のものへ遣しける文を
もてたがへたりければ遣しける　大輔

道しらぬものならなくにあしびきの山ふみ惑ふ人もありけり

かへし　　敦忠朝臣

しらがしの雪も消えぬる足引の山路をたれかふみまよふべき

いひちぎりて後こと人につきてと聞きて　　讀人しらず

いふことの違はぬ物にあらませば後憂きことも聞えざらまし

題しらず　　伊勢

面影をあひみしかずになすときは心のみこそしづめられけれ

かしら白かりける女を見て

ぬきとめぬ髪の筋もてあやしくもへにける年の數をしるかな

題しらず　　讀人しらず

なみ數にあらぬ身なれば住吉の岸にもよらずなりや果てなむ

つきもせずうき言の葉の多かるを早くあらしの風も吹かなむ

いと忍びて語らひける女の許につかはしける文

を心にもあらで落したりけるを見つけてつかはしける

島がくれありそに通ふあしたづのふみおく跡は波もけたなむ

昔同じ所に宮づかへしける人年ごろいかにぞなどとひおこせて侍りければ遣しける　　伊勢

身は早くなきもののごとなりにしを消えせぬ物は心なりけり

はらからの中にいかなる事かありけむ常ならぬさまに見え侍りければ　　讀人しらず

睦しきいもせの山のなかにさへ隔つる雲のはれずもあるかな

女のいとくらべ難く侍りけるを相はなれにけるがこと人にむかへられぬと聞きて男のつかはしける

我が爲におきにくかりしはし麁の人の手にありときくは誠か
　梔子ある所にこひに遣したるに色のいと悪かりければ
聲にたてていはねどしるし口なしの色は我がため薄きなりけり
　題しらず
瀧つ瀬の早からぬをぞ恨みつるみずとも音に聞かむと思へば
　人のもとに文遣しける男人に見せけりと聞きて
つかはしける
皆人にふみみせけりな水無瀬川そのわたりこそまづは淺けれ
　つくしの白河といふ所にすみ侍りけるにまへよ
り大貳藤原興範朝臣のまかり渡るついで水たべ
むとてうち寄りてこひ侍りければ水をもて出で

て詠み侍りける
年ふればわが黑髪もしら河のみづはくむまで老いにけるかな
　かしこに名高く事好む女になむ侍りける
しぞくに侍りける女の男に名たちてかかる事な
むある人にいひさわげといひ侍りければ　貫之
かざすとも立ちと立ちなむなき名をば事無し草のかひやなからむ
　題しらず
歸りくる道にぞけさは惑ふらむこれになずらふ花なきものを
　女の許に文遣しけるを返事もせずして後々は文
を見もせで取りなむ置くと人の告げければ　讀人しらず
大空にゆきかふとりの雲路をぞ人のふみ見ぬものといふなる
　紀のすけに侍りける男のまかり通はずなりにけ

れば彼の男の姉の許にうれへおこせて侍りけれ
ばいと心うきことかなと言ひつかはしたりける
返事に
紀の國のなぐさの濱は君なれやことのいふかひありと聞きつる
すみ侍りける女宮づかへし侍りけるを友達なり
ける女同じ車にて貫之が家にまうできたりけり
貫之が妻客人にあるじせむとてまかりおりて侍
りける程に彼の女を思ひかけて侍りければ忍び
て車にいひいれ侍りける　貫之
波にのみぬれつるものを吹く風のたよりうれしきあまの釣舟
男の物にまかりて二年ばかりありてまうできた
りけるを程へて後にことなしびにこと人に名だ

つと聞きしはまことなりといへりければ　讀人しらず
緣なるまつほど過ぎばいかでかは下葉ばかりも紅葉せざらむ
故女四のみこの後のわざせむとて菩提子のずず
をなむ右大臣もとめ侍ると聞きてこのずずを送
るとて加へ侍りける　眞延法師
思ひ出のけぶりやまさむなき人の佛になれるこのみ見ば君
かへし　右大臣
道なれるこのみ尋ねて心ざしあると見るにぞ音をば增しける
定めたる女も侍らずひとりぶしをのみすと女友
だちのもとよりたはぶれて侍りければ　讀人しらず
いづこにも身をば離れぬ影しあればふす床ごとに獨やはぬる
前栽の中にすろの木おひて侍ると聞きてゆきあ

きらのみこの許より一木こひに遣したればかへてつかはしける　　眞延法師

風霜に色もこころもかはらねばあるじに似たる植木なりけり　　行明親王

山深みあるじに似たる植木をば見えぬ色とぞいふべかりける　　業平朝臣

大井川うかべる所にて人々酒たうべけるついでに

大井川うかべる船のかがり火にをぐらの山も名のみなりけり　　讀人しらず

題しらず

飛鳥川わが身ひとつの淵瀬ゆゑなべての世をもうらみつる哉

思ふ事侍りける頃志賀にまうでて

世の中を厭ひがてらにこしかども憂身ながらの山にぞ有りける

父母侍りける人のむすめに忍びて通ひ侍りける

を聞きつけてかうじせられ侍りけるを月日へて

隱れ渡りけれど雨降りてえまかり出で侍らで籠

りゐ侍りけるを父母聞きつけていかがはせむず

るとてゆるす山いひて侍りければ

下にのみはひわたりつる蘆の根の嬉しき雨にあらはるるかな

人の家にまかりたりけるに遣水に瀧いと面白か

りければ歸りてつかはしける

瀧つ瀬にたれしら玉をみだりけむ拾ふとせしに袖ぞひぢにき　　源昇朝臣

法皇吉野の瀧御覽じける御ともにて

いつのまに降り積るらむみ吉野の山のかひより崩れ落つる雪　　法皇御製

宮の瀧むべも名におひて聞えけり落つる白沫の玉とひびけば

山ぶみしはじめける時　　僧正遍昭

今さらに我は歸らじ瀧見つつよべど聞かずと問はばこたへよ

題しらず　　讀人しらず

つせのうづまき毎にとめくれどなほ尋ねくるよのうきめ哉

はじめて頭おろし特りける時物にかきつけ侍りける　　遍昭

乳女はかかれとてしもうば玉の我が黑髪をなでずやありけむ

みちのくにの守にまかり下れりけるにたけくまの松の枯れて侍りけるを見て小松を植ゑつかせ侍りて任はてて後又同じ國にまかりなりて前の任に植ゑし松を見て　　藤原元善朝臣

植ゑし時契りやしけむたけくまの松をふたたびあひ見つる哉

ふしみといふ所にて其の心をこれかれよみける　讀人しらず

すがはらや伏見のくれに見渡せば霞にまがふをはつせのやま

題しらず

言の葉もなくてすぎぬる年月にこの春だにもはなは咲かなむ

身のうれへ侍りける時津の國にまかりて住みはじめ侍りけるに　　業平朝臣

難波津をけふこそみつの浦ごとにこれやこのよをうみ渡る船

時にあはずして身を恨みてこもり侍りける時　　文屋康秀

白雲のきやどるみねの小松原えだしげけれや日のひかり見ぬ

心にもあらぬ事をいふ頃男の扇にかきつけ侍りける　　土佐

身にさむくあらぬものから佗しきは人の心のあらしなりけり

ながらへば人の心もみるべきに露のいのちぞかなしかりける

人の許より久しう心地わづらひてほとほと死ぬべくなむ有りつるといひて侍りければ　閑院大君

諸共にいざとはいはでしでのやまいかでか獨こえむとはせし

月夜にかれこれして　上野岑雄

おしなべて峰もたひらに成りななむ山のはなくば月も隠れじ

後撰和歌集　卷第十八

雜歌四

蛙を聞きて　讀人しらず

我が宿にあひやどりして鳴く蛙よるになればや物はかなしき

人々あまたしりて侍りける女のもとに友達のもとよりこの頃は思ひ定めたるなめり頼しき事なりとたはぶれおこせて侍りければ

玉江こぐ蘆刈りをぶねさし分けて誰をたれとか我はさだめむ

男のはじめいかに思へる樣にか有りけむ女のけしきも解けぬを見てあやしく思はぬ樣なる事と

いひ侍りければ

陸奥のをぶちの駒も野飼ふには荒れこそまされなつく物かは

少將にて内にさぶらひける時あひしりたりける女藏人のざうしにつぼやなぐひおいかけを宿し置きて遠き所にまかり侍りけりこの女の許より此のおいかけをおこせてあはれなる事などいひて侍りける返事に

源善朝臣

いづくとて尋ねきつらむ玉かづらわれは昔のわれならなくに

たよりにつきて人の國のかたに侍りて京に久しうまかりのぼらざりける時に友だちに遣しける　讀人しらず

朝ごとにみし都路の絶えぬればことあやまりにとふ人もなし

遠き國に侍りける人を京に上りたりと聞きてあ

ひまつにまうできながら訪はざりければ

いつしかとまつちのやまの櫻花まちてもよそにきくが悲しさ

題しらず　伊勢

いせ渡る川し袖より流るればとふにとはれぬ身は浮きぬめり

北邊左大臣

人めだに見えぬ山路にたつ雲をたれすみがまの煙といふらむ

をとこの人にもあまた問へわれやあだなる心あるといへりければ　伊勢

あすかがは淵瀬にかはる心とはみなかみしもの人もいふめり

人のむこの今まうでこむといひてまかりにけるが文おこする人ありと聞きて久しうまうでこざりければあとうがたりの心をとりてかくなむ申

しけるといひつかはしける　女の母

今こむといひしばかりを命にてまつに消ぬべしさくさめのとじかへし　むこ

數ならぬ身のみ物うく思ほえて待たるるまでもなりにける哉

常にまうでくとてうるさがりて隱れければ遣し

ける　讀人しらず

ありときく音羽の山のほととぎす何かくるらむなく聲はして

物にこもりたるにしりたる人のつほねならべて

正月おこなひていづる曉にいときたなげなるし

たうづを落したりけるを取りて遣すとて

あしのうらのいときたなくも見ゆる哉波は寄せてもりの洗はざりけり

題しらず

人心たとへて見ればしらつゆの消ゆるまもなほ久しかりけり

世の中といひつる物は陽炎のあるかなきかの程にぞ有りける

友達に侍りける女年久しく賴みて侍りける男に

とはれず侍りければもろともに歎きて

かくばかりわかれのやすき世の中に常と賴める我ぞはかなき　伊勢

つねになき名立ち侍りければ

塵にたつ我が名きよめむもしきの人の心をまくらともがな

あだ名たちていひ騷がれける頃ほのかに聞きて

あはれいかにとぞととひ侍りければ　小町がむまご

憂き事を忍ぶるあめのしたにしてわれ濡衣はほせどかわかず

隣なりける琴をかりて返す序に　讀人しらず

あふ事のかたみの聲の高ければわがなくねとも人はきかなむ

題しらず

涙のみしる身のうさもかたるべくなげく心をまくらともがな　伊勢

物思ひける頃

あひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへぬるるがほなる

ある所にて簾のまへにかれこれ物語し侍りける

を聞きてうちより女の聲にてあやしく物のあは

れしりがほなる翁かなといふを聞きて　貫之

哀てふ事にしるしはなけれども言はではえこそあらぬ物なれ

女友だちの常にいひかはしけるを久しう音づれ

ざりければ十月ばかりにあだ人の思ふといひし

言の葉はといふ古ごとをいひ遣したりければ竹

の葉にかきつけてつかはしける　讀人しらず

移ろはぬ名に流れたる河竹のいづれのよにかあきを知るべき　贈太政大臣

題しらず

深き思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風ふきてちりぬる　伊勢

かへし

心なき身は草木にもあらなくにあきくる風にうたがはるらむ

題しらず

身のうさを知ればはしたになりぬべみ思へば胸の焦れのみする　讀人しらず

雲路をもしらぬわれさへ諸聲にけふはかりとぞなき歸りぬる

まだきからおもひこき色にそめむとや若紫のねをたづぬらむ　伊勢

見えもせぬ深き心をかたりては人にかちぬとおもふものかは

伊勢が亭子院にまゐりてさぶらひけるに御とき
のおろしたまはせたりければ

伊勢の海に年へて住みし蜑なれどかかるみるめは潜かざりしを　兼輔朝臣

粟田の家にて人に遣しける

あしびきの山のやどりのかひもなし峯の白雲たちしよらねば　左大臣

左大臣の家にてかれこれ題をさぐりて歌よみけ
るに露といふ文字をえ侍りて　藤原忠國

われならぬ草葉もものはおもひけり袖よりほかにおける白露

人のもとに遣しける　伊勢

人心あらしのかぜのさむければこのめもみえず枝ぞしをるる

こと人をあひかたらふと聞きてつかはしける　讀人しらず

うきながら人を忘れむことかたみ我が心こそかはらざりけれ

ある法師の源等朝臣の家にまかりてずずのすが
りをおとしおけるを朝におくるとて

うたたねの床にとまれる白玉は君がおきつる露にやあるらむ

かへし

かひもなき草の枕におく露のなにに消えなで落ちとまるらむ

題しらず

思ひやる方もしられずくるしきは心まどひの常にやあるらむ

昔を思ひ出でてむら子の内侍につかはしける　左大臣

鈴虫におとらぬ音こそなかれけれ昔のあきをおもひやりつつ

ひとり侍りけるころ人の許よりいかにぞととぶ
らひて侍りければ朝顔の花につけて遣しける　讀人しらず

ゆふぐれの淋しきものは朝顔の花をたのめる宿にぞありける

左大臣のかかせ侍りけるさうしのおくに書きつけ侍りける　貫之

柞山みねのあらしの風をいたみふる言の葉をかきぞあつむる

題しらず　小町があね

世の中を厭ひてあまの住むかたもうきめのみこそ見え渡りけれ

昔あひ知りて侍りける人のうちに侍ひけるがもとに遣しける　伊勢

山川のおとにのみきく百敷をみをはやながら見るよしもがな

人に忘られたりと聞く女のもとに遣しける　讀人しらず

世の中はいかにやいかに風の音をきくにも今はものや悲しき

かへし　伊勢

世の中はいさともいさや風の音は秋にあきそふ心地こそすれ

題しらず　讀人しらず

譬へくる露と等しき身にしあれば我が思ひにも消えむとやする

つらかりける男のはらからのもとに遣しける

ささがにの空にすがける糸よりも心細しや絶えぬとおもへば

かへし

風ふけば絶えぬと見ゆる蜘の糸も又かきつかでやむとやはきく

伏見といふ處にて

名に立ててふしみの里といふ事は紅葉を床にしけばなりけり　均子内親王

題しらず

我もおもふ人も忘るなありそ海のうら吹く風のやむ時もなく

あしびきの山下とよみなく鳥もわがごとたえず物思ふらめや　物は思はじ　山田法師

神無月のついたち頃妻のみそか男したりけるを
見つけいひてなどしてつとめて　讀人しらず

今はとてあき果てられし身なれども霧たつ人をえやは忘るる

十月ばかり昔面白かりし所なればとて北山のほ
とりにこれかれ遊び侍りけるついでに　兼輔朝臣

思ひ出てきつるもしるくもみぢ葉の色は昔にかはらざりけり

おなじ心を　坂上是則

峰高み行きても見べきもみぢ葉を我がるながらも挿しつる哉

しはすばかりにあづまよりまうできける男の許
より京にあひ知りて侍りける女の許に正月つい
たちまで音づれず侍りければ　讀人しらず

待つ人はきぬと聞けどもあらたまの年のみ越ゆるあふ坂の關

後撰和歌集　卷第十九

離別歌

みちのくにへまかりける人に火うちを遣すとて
書きつけける　貫之

をりをりにうちてたく火の煙あらば心さすがを忍べとぞ思ふ

あひ知りて侍りける人の東の方へまかりけるに
櫻の花のかたに幣をさして遣しける　讀人しらず

あだ人の手向にをれる櫻花あふさかまでは散らずもあらなむ

遠くまかりける人に餞し侍りける時にて　橘直鵜

思ひやるこころばかりはさはらじを何へだつらむみねの白雲

下野にまかりける女に鏡にそへてつかはしける　讀人しらず

ふたご山ともに越えねどます鏡そこなる影をたぐへてぞやる

信濃へまかりける人にたきもの遣すとて　するが

信濃なるあさまの山も燃ゆなればふじの煙のかひやなからむ

遠き所へまかりける友達に火うちにそへて遣しける　讀人しらず

このたびも我を忘れぬ物ならばうちみむたびに思ひ出でなむ

京に侍りける女子をいかなる事か侍りけむ心うしとて留め置きて因幡國へまかりければ　むすめ

うちすてて君しいなばの露の身は消えぬばかりぞありと頼むな

伊勢へまかりける人とくいなむと心もとながると聞きて旅の調度などとらする物からたたう紙

にかきてとらする名をば馬といひけるに

をしと思ふ心はなくてこのたびは行く馬に鞭をおほせつる哉

かへし

君が手をかれゆく秋のすゑにしも野飼にはなつ馬ぞかなしき

同じ家に久しう侍りける女の美濃の國に親侍りけるとぶらひにまかりけるに　藤原清正

今はとて立ちかへりゆくふるさとの不破の關屋に都わすれな

遠き所にまかりける人に旅の具つかはしける鏡の箱のうらに書きつけて遣しける　大窪則善

身をわくることの難さにます鏡かげばかりをぞ君にそへつる

このたびのいでたちなむ物うく覺ゆるといひければ　讀人しらず

初雁のわれもそらなる程なれば君もものうき旅にやあるらむ
あひしりて侍りける女の人の國にまかりけるに
つかはしける　公忠朝臣

いとせめて戀しきたびの唐ころも程なくかへす人もあらなむ
かへし　女

唐衣たつ日をよそにきく人はかへすばかりのほども戀ひじを
三月ばかりに越の國へまかりける人に酒たうべ
けるついでに　讀人しらず

戀しくばことづてもせむ歸るさの雁がねはまづ我が宿になけ
善祐法師伊豆の國に流され侍りけるに　伊勢

別れてはいつあひ見むと思ふらむかぎりある世の命ともなし
題しらず　讀人しらず

そむかれぬ松の千年の程よりもともどもとだに慕はれぞせし
かへし

ともどもと慕ふ涙のそふ水はいかなるいろに見えて行くらむ
亭子院のみかどおりゐ給うける年の秋弘徽殿の
かべに書きつけける　伊勢

別るれどあひもをしまぬ百敷を見ざらむことやなにか悲しき
帝御覽じて

身一つにあらぬばかりをおしなべて行き廻りてもなどか見ざらむ
みちのくにへまかりける人に扇調じて歌繪に書
かせ侍りける　讀人しらず

別れゆく道のくもゐになりゆけばとまる心もそらにこそなれ
宗于の朝臣のむすめみちのくにへ下りけるに

いかでなほ笠取山に身をなして露けきたびに添はむとぞ思ふ
かへし
笠とりの山とたのみし君をおきて涙のあめにぬれつつぞ行く
をとこの伊勢の國へまかりけるに
きみが行くかたにありてふ涙川まづは袖にぞながるべらなる
旅にまかりける人に裝束つかはすとて添へて遣
しける
袖ぬれてわかれはすとも唐衣ゆくとな言ひそきたりとを見む
かへし
わかれぢは心もゆかずからころもきれば涙ぞさきにたちける
旅にまかりける人に扇つかはすとて
そへてやる扇の風し心あらばわがおもふ人の手をなはなれそ

友則がむすめのみちのくへまかりけるにつかはしける　滋鞍が女
君をのみしのぶの里へ行くものをさひづの山の遙けきやなぞ
つくしへまかるとていさきよいこの命婦におくりはべりける　小野好古朝臣
年をへてあひみる人のわかれぢは惜しきものこそ命なりけれ
出羽よりのぼりけるにこれかれむまのはなむけしけるにかはらけとりて　源濟
行くさきを知らぬ涙の悲しきは唯めのまへに落つるなりけり
平高遠がいやしき名とりて人の國へまかりけるに忘るなといへりければ高遠が妻のいへる
忘るなといふにながるる涙川うき名をすすぐ瀬ともならなむ

あひしりて侍りける人のあからさまに越の國へまかりけるに幣(ぬさ)こころざすとて　讀人しらず

我をのみ思ひつるがのこしならばかへるの山は惑(まど)はざらまし

君をのみいつはたと思ひこしなれば往來(ゆきき)の道は遙けからじを

秋旅にまかりける人に幣をもみぢの枝につけて　つかはしける

秋ふかく旅ゆく人のたむけにはもみぢにまさる幣(ぬさ)はなかりき

西四條の齋宮の九月晦日くだり侍りけるともなる人にぬさ遣すとて　大輔

紅葉(もみぢは)を幣とちらしてたむけつつ秋とともにや行かむとすらむ

物へまかりける人に遣しける　伊勢

待ちわびて戀しくならばたづぬべく跡なき水の上(波ィ)ならで行け　贈太政大臣

題しらず

來むといひて別るるだにもある物をしられぬ今朝のまして侘しき　伊勢

かへし

さらばよと別れしときにいはませば我も涙におぼほれなまし　讀人しらず

春霞はかなく立ちてわかるとも風よりほかにたれか訪ふべき

かへし　伊勢

めに見えぬかぜに心をたぐへつつやらば霞のわかれ(へだてィ)こそせめ

甲斐へまかりける人につかはしける

きみが代はつるの郡にあえてきね定(さだめ)なき世のうたがひもなく

船にて物へまかりける人に遣しける

おくれずぞ心にのりてこがるべき波にもとめよ船みえずとも
　かへし　　讀人しらず

船なくば天の川までもとめてむ漕ぎつつ汐のなかにきえずば
　船にて物へまかりける人　　伊勢

かねてより涙ぞ袖をうちぬらす浮べる船にのらむとおもへば
　かへし

おさへつつ我は袖にぞせきとむる船こす汐になさじと思へば
　遠き所にまかるとて女の許につかはしける　　貫之

忘れじとことに結びて別るれば逢ひみむまでは思ひみだるな

羈旅歌

ある人いやしき名とりて遠江國へまかるとて泊

瀬川を渡るとてよみ侍りける　　讀人しらず

泊瀬川わたる瀬さへや濁るらむ世にすみ難き我が身と思へば

たはれ島をみて

名にしおはばあだにぞ思ふたはれ島波の濡衣(ぬれぎぬ)いく世きぬらむ

東(あづま)の方へまかりけるに過ぎぬるかた戀しく覺えける程に川を渡りけるに波の立ちけるを見て　　業平朝臣

いとどしく過ぎ行くかたのこひしきに羨しくもかへる波かな

白山へまうでけるに道中よりたよりの人につけて遣しける　　讀人しらず

みやこまで音にふりくる白山はゆきつきがたき雲井(ところ)なりけり

中原宗興が美濃國へまかり下り侍りける道に女の家に宿りていひつきてさりがたく覺え侍りけ

れば二三日侍りてやむことなき事によりてまかり立ちければきぬを包みてそれが上にかきて送り侍りける　中原宗興

山里の草葉の露はしげからむ（もイ）みのしろころも縫はずともきよ

土佐よりまかりのぼりける船のうちにて見侍りけるに山の端ならで月の波の中より出づるやうに見えければ昔安倍仲麿がもろこしにてふりさけみればといへる事をおもひやりて　貫之

みやこにて山の端にみし月なれど海より出でて海にこそいれ

法皇宮の瀧といふ所御覽じける御供にて　菅原右大臣

みづひきの白糸はへて織るはたを旅のころもにたちや重ねむ

道まかりける序にひぐらしの山をまかり侍りて

日ぐらしの山路を暗み小夜ふけて木の末ごとに紅葉てらせる

初瀬へ詣づとて山のべといふわたりにてよみ侍りける　伊勢

くさまくら旅となりなば山のべに白雲ならぬわれぞやどらむ

宇治殿といふ所を

水もせにうきたるときは柵（しがらみ）のうちのとのとも見えぬもみぢ葉

海のほとりにてこれかれ逍遙し侍りけるついで　小町

に

花さきて實ならぬものはわたつみのかざしにさせる沖つ白波

東（あづま）なる人の許へまかりける道に相摸の足柄の關にて女の京にまかり上りけるにあひて　眞靜法師

足柄の關のやまぢを行く人はしるも知らぬもうとからぬかな

法皇遠き所に山ぶみし給ひて京に歸り給ふに旅のやどりし給うて御供にさぶらふ道俗に歌よませ給ひけるに　僧正聖寶

人ごとにけふけふとのみ戀ひらるる都近くもなりにけるかな

土佐より任はててのぼり侍りけるに船の中にて月を見て　貫之

照る月の流るる見れば天の川いづるみなとは海にぞありける

題しらず　亭子院御製

くさまくら紅葉むしろにかへたらば心をくだく物ならましや

京に思ふ人侍りて遠き所よりかへりまうで來ける道にとどまりて九月ばかりに思ふ人ありて歸ればいつしかのつま待つよひの秋ぞかなしき　讀人しらず

草枕ゆふ手ばかりはなになれや露もなみだもおきかへりつつ

宮の瀧といふ所に法皇おはしましたりけるにおほせごとありて　素性法師

秋山にまどふ心をみやたきの瀧のしらあわに消ちやはててむ

後撰和歌集　巻第二十

慶賀歌

女八のみこ元良のみこのために四十の賀し侍りけるに菊の花をかざしに折りて　藤原伊衡朝臣

萬代のしもにもかれぬ白菊をうしろやすくもかざしつるかな

典侍あきらけいこ父の宰相のために賀し侍りけるに立朝法師の裳唐衣ぬひて遣しければ　典侍あきらけいこ

雲わくるあまの羽衣うちきては君がちとせにあはざらめやは

題しらず　太政大臣

今年より若菜にそへて老の世に嬉しきことをつまむばかりぞ

章明親王かうぶりしける日あそびし侍りけるに　貫之

右大臣かれこれ歌よませ侍りけるに

琴の音も竹もちとせのこゑするは人のおもひも通ふなりけり　讀人しらず

賀のやうなる事し侍りけるところにて

百年と祝ふをわれは聞きながら思ふが爲はあかずぞありける

左大臣の家のをのこ子をんな子かうぶりし裳著　貫之

侍りけるに

大原やをしほのやまの小松原はや木だかかれ千世のかげみむ

人のかうぶりする所にて藤の花をかざして　讀人しらず

うちよする波の花こそ咲きにけれ千世まつ風や春になるらむ

女の許につかはしける

君がため松の千年も盡きぬべしこれよりまさむ神のよもがな

年星おこなふとて女檀越のもとよりずずをかりて侍りければ加へてつかはしける　惟濟法師

百年にやとせそとせそへていのりける玉のしるしを君みざらめや

左大臣の家にけふそく心ざしおくるとてくはへける　僧都仁敎

けふそくをおさへてまさへ萬世にはなのさかりを心しづかに

今上帥のみこと聞えし時太政大臣の家にわたりおはしまして歸らせたまふ御おくりものに御本奉るとて　太政大臣

君がため祝ふ心のふかければひじりの御代のあとならへとぞ

御かへし　今上御製

教へおくことたがはずば行末の道とほくともあとはまどはじ

今上梅壺におはしましし時たき木こらせて奉り給ひける　御製

山人のこれるたき木は君がためおほくの年をつまむとぞ思ふ

御かへし　清正

年の數つまむとすなる重荷にはいとど小附をこりもそへなむ

東宮の御前にくれ竹うゑさせたまひけるに　命婦清子

君がためうつして植うる呉竹にちよもこもれる心地こそすれ

院の殿上にて宮の御かたより碁盤いださせ給ひけるごいしのふたに　西四條のみこ

斧の柄のくちむもしらず君が代のつきむ限はうちこころみよ

なみたてる松の緑の枝わかずをりつつ千代をたれとかは見む　右大臣

十二月ばかりにかうぶりする所にて　貫之

祝ふ事ありとなるべし今日なれど年のこなたに春もきにけり

哀傷歌

敦敏が身まかりにけるをまだ聞かであづまより馬を送りて侍りければ　左大臣

まだしらぬ人もありけり東路に我も行きてぞ住むべかりける

兄のぶくにて一條にまかりて　太政大臣

春の夜の夢のうちにもおもひきや君なき宿をゆきて見むとは

かへし

宿みればねてもさめてもこひしくて夢現ともわかれざりけり

先帝おはしまさで世の中を思ひ嘆きて遣しける　三條右大臣

はかなくて世にふるよりは山階の宮の草木とならましものを　兼輔朝臣

かへし

山階の宮のくさきと君ならばわれはしづくに濡るばかりなり

時望朝臣みまかりて後はてのころ近くなりて人のもとよりいかに思ふらむといひおこせたりければ　時望朝臣妻

別れにしほどをはてともおもほえず戀しきことの限なければ

女四のみこの文の侍りけるに書きつけて内侍のかみにおくり侍りける　右大臣

種もなき花だにちらぬ宿もあるになどか形見のこだになからむ

かへし　内侍のかみ

結びおきし種ならねども見るからにいとど忍の草をつむかな　伊勢

女四のみこの事とぶらひ侍るとて

ここら世をきくがなかにも悲しきは人の涙もつきやしぬらむ

かへし　讀人しらず

聞くひとも哀てふなるわかれにはいとど涙ぞつきせざりける

先帝おはしまさでの又の年の正月一日に送り侍りける　三條右大臣

いたづらに今日や暮れなむ新しきはるのはじめは昔ながらに

かへし　兼輔朝臣

なく涙ふりにしとしの衣手はあたらしきにもかはらざりけり

かさねて遣しける　三條右大臣

人の世のおもひにかなふ物ならば我が身は君に後れましやは

女のみまかりて後すみ侍りける所の壁に彼の侍りける時書きつけて侍りける手を見て　兼輔朝臣

寐ぬゆめに昔のかべを見てしよりうつつに物ぞ悲しかりける

あひしりて侍りける女のみまかりにけるを戀ひ侍りけるあひだに夜ふけてをしの鳴きければ　閑院左大臣

ゆふぐれは音になく鶯のひとりして妻ごひすなる聲の悲しき

七月ばかりに左大臣の母みまかりにける時におもひに侍りけるあひだ后の宮より萩の花を折りて給へりければ　太政大臣

女郎花かれにし野邊にすむ人はまづさく花をまたでともみず

なくなりにける人の家にまかりてかへりてのあしたにかしこなる人に遣しける　伊勢

なき人のかげだに見えぬやり水のそこに涙をながしてぞこし

大和に侍りける母みまかりて後かの國へまかるとて　　京極御息所

ひとりゆく事こそうけれ故郷のならのならびて見し人もなみ

法皇の御ぶくなりける時にび色のさいでに書きて人におくり侍りける　　右大臣

墨染のこきもうすきも見るときは重ねて物ぞかなしかりける

女四のみこのかくれ侍りにける時　　玄上朝臣女

きのふまで千世と契りし君をわがしでの山路に尋ぬべきかな

先坊うせ給ひての春大輔につかはしける　　大輔

あらたまのとし越えくらしつねもなき初鶯のねにぞなかるる

かへし　　玄上朝臣女

音にたててなかぬ日はなし鶯のむかしの春をおもひやりつつ

同じ年の秋　　玄上朝臣女

もろともにおきゐし秋の露ばかりかからむ物と思ひかけきや

清正が枇杷大臣のいみにこもりて侍りけるにつかはしける　　藤原守文

世の中のかなしきことをきくのうへにおく白露ぞ涙(命ィ)なりける

かへし　　清正

きくにだに露けかるらむ人のよをめにみし袖を思ひやらなむ

兼輔朝臣なくなりて後土佐の國よりまかりのぼりて彼の粟田の家にて　　貫之

植ゑおきし二葉の松はありながら君がちとせのなきぞ悲しき

そのついでにかしこなる人

君まさで年はへぬれど故郷につきせぬものはなみだなりけり

人のとぶらひにまうできたりけるに早くなくなりにきといひ侍りければ楓の紅葉にかきつけ侍りける　戒仙法師

過ぎにける人を秋しもとふからに袖はもみぢの色にこそなれ

なくなりて侍りける人のいみにこもりて侍りけるに雨のふる日人のとひて侍りければ　讀人しらず

袖かわく時なかりける我が身にはふるを雨とも思はざりけり

人のいみはててもとの家にかへりけるに日

故郷にきみはいづらと人とはばいづれのそらの霞といはまし

敦忠朝臣みまかりて又の年かの朝臣の小野なる家みむとてこれかれまかりて物語し侍りけるつ

いでによみ侍りける　清正

君がいにし方やいづれぞ白雲のぬしなき宿と見るぞかなしき

親のわざしに寺にまうできたりけるを聞きつけて諸共にまうでましものをと人のいひければ　讀人しらず

わび人のたもとに君がうつりせば藤の花とぞいろは見えまし

かへし　伊勢

よそにをる袖だにひぢし藤衣なみだに花も見えずぞあらまし

題しらず

程もなく誰も後れぬ世なれどもとまるは行くを悲しとぞ見る

人をなくなして限なく戀ひて思ひいりて寐たる夜の夢にみえければ思ひける人にかくなむと言ひ遣したりければ　玄上朝臣女

時のまもなぐさめつらむ覺めぬまは夢にだに見ぬ我ぞ悲しき
かへし　大輔
悲しさの慰むべくもあらざりつ夢のうちにもゆめと見ゆれば
在原としはるがみまかりにけるを聞きて　伊勢
かけてだに我が身の上と思ひきやこむとし春の花を見じとは
一つがひ侍りける鶴の一つがなくなりにければ
とまれるがいたくなき侍りければ雨のふり侍り
けるに
なく聲にそへて涙はのぼられねどくものうへより雨とふるらむ
妻のみまかりての年のしはすのつごもりの日ふ
るごといひ侍りけるに　兼輔朝臣
なき人の共にしかへる年ならば暮れゆく今日は嬉しからまし

かへし　貫之
戀ふるまに年のくれなばなき人の別やいとどとほくなりなむ

後撰和歌集終

古今和歌集索引

（上句の頭五言及び下句の頭七言を採り歴史的假名遣により五十音順に排列す）

上句五言

ア

あかざりし　一八〇ノ一
あかずして（月の）　一九九ノ四
あかずして（別るる袖）　七五ノ二
あかずして（別るる涙）　七四ノ二
あかつきの　一三五ノ八
あかでこそ　一二七ノ三
あかなくに　一六〇ノ一
あきかぜに（あふ）　一四四ノ八
あきかぜに（あへず）　五一ノ三
あきかぜに（かきなす）　一〇五ノ三
あきかぜに（聲を）　三七ノ二
あきかぜに（初雁がれ）　三六ノ六
あきかぜに（綻びぬ）　一九二ノ一
あきかぜに（山の）　一三六ノ八
あきかぜの（吹きあげ）　四八ノ三
あきかぜの（吹きうら）　一四四ノ九
あきかぜの（吹きと）　一四四ノ七
あきかぜの（吹きにし日）　三二ノ一
あきかぜの（吹きにし日）　四五ノ三
あきかぜの（身に）　一〇〇ノ四
あきかぜは　一三九ノ三
あききぬと　三二ノ一
あきぎりの（ともに）　七二ノ五
あきぎりの（はるる）　一〇四ノ三
あきぎりの（はれて）　一九一ノ六
あきぎりは　四七ノ二
あきくれど（色）　六六ノ二
あきくれど（月）　八九ノ二
あきくれば　一九一ノ二
あきちかう　八五ノ二
あきといへば　一四五ノ一
あきならで（あふ）　四〇ノ二
あきならで（おく）　一三五ノ四
あきなれば　一〇四ノ五
あきのきく　四九ノ三
あきのたの（いれ）　一四二ノ三
あきのたの（ほにこそ）　九九ノ五
あきのたの（ほの上）　九九ノ六
あきのつき　五一ノ六
あきのつゆ　四六ノ一
あきののに（おく）　三九ノ二
あきののに（笹）　二二ノ四
あきののに（つま）　一九四ノ一
あきののに（なまめき）　一九一ノ四
あきののに（人）　三六ノ一
あきののに（みだれて）　一〇四ノ六
あきののに（道）　三五ノ七
あきののに（やどり）　三九ノ五

あきののの(草)　四二ノ三
あきののの(尾花)　九五ノ三
あきのやま　五三ノ二
あきのよの(明くる)　三五ノ三
あきのよの(月)　三五ノ一
あきのよの(露)　四五ノ五
あきのよは　三五ノ五
あきのよも　二四ノ一
あきはぎに　三七ノ六
あきはきぬ(今)　八四ノ一
あきはきぬ(紅葉)　五一ノ四
あきはぎの(下葉)　三八ノ四
あきはぎの(花さき)　三八ノ二
あきはぎの(花なば)　七四ノ三
あきはぎの(ふるえ)　三八ノ三
あきはぎも　三五ノ四
あきはぎを　三八ノ一
あきをおきて　五〇ノ一
あけたてば　九九ノ一
あけぬとて(今は)　二四ノ四
あけぬとて(歸る)　二四ノ五
あさぢふの　九五ノ二
あさつゆの　一四九ノ一
あさつゆを　八四ノ七
あさなあさな　九六ノ七
あさなけに　六九ノ三
あさぼらけ　六〇ノ一
あさみこそ　一〇ノ三
あさみどり　五ノ五
あしがきの　八八ノ六
あしがもの　九八ノ三
あしたづの(たてる)　一六五ノ三
あしたづの(獨)　一八二ノ一
あしびきの(山下)　九四ノ九
あしびきの(山たち)　八三ノ五
あしびきの(山の)　一七二ノ一
あしびきの(山邊)　一四九ノ三
あしびきの(山郭公)　二七ノ六
あしびきの(山郭公)　九五ノ五
あしべより　一四四ノ五
あすかがは(淵に)　一七九ノ五
あすかがは(淵は)　二三ノ七
あすしらぬ　一四八ノ二
あだなりと　二一ノ二
あたらしき　一九九ノ一
あぢきなし　八七ノ六
あづさゆみ(磯邊)　一六三ノ四
あづさゆみ(おして)　四六ノ六
あづさゆみ(春たちし)　三三ノ一
あづさゆみ(春の)　二二ノ一
あづさゆみ(ひき野)　二四八ノ八
あづさゆみ(ひけば)　一〇八ノ七
あづまぢの　一〇六ノ六
あなうめに　八三ノ一
あなこひし　一三四ノ一
あはずして　二一ノ六
あはぬよの　二一ノ三
あはれてふ(事こそ)　一七〇ノ三
あはれてふ(事だに)　九五ノ八
あはれてふ(言の葉)　一七〇ノ四
あはれてふ(事を)　二五ノ二
あはれとも　一四二ノ五
あひにあひて　一三五ノ三

あひみすば　一三一ノ二
あひみぬも　一四三ノ一
あひみれば　一三五ノ七
あひみまく　一九三ノ二
あふからも　八三ノ四
あぶくまに　二〇三ノ二
あふことの(今は)　一九五ノ七
あふことの(なぎさ)　一二三ノ二
あふことの(もはら)　一四三ノ五
あふことは(雲井)　九三ノ五
あふことは(玉)　一一九ノ六
あふことを　一四五ノ三
あふさかの(あらし)　一七九ノ三
あふさかの(關し)　六九ノ一
あふさかの(關に)　九八ノ七
あふさかの(ゆふつけ鳥に)　一三一ノ一
あふさかの(ゆふつけ鳥も)　九八ノ六
あふまでの(形見とて)　一三一ノ一
あふまでの(形見も)　一三一ノ五
あふみのや　二〇三ノ一
あふみより　一九九ノ三
あまぐもの　一三八ノ五
あまつかぜ　一五七ノ二
あまのがは(淺瀬)　三三ノ五
あまのがは(雲)　一五九ノ三
あまのがは(紅葉)　三三ノ三
あまのかる　一四二ノ七
あまのすむ　三八ノ五
あまのはら(ふみ)　一二四ノ七
あまのはら(ふりさけ)　七六ノ一
あまびこの　一七三ノ四
あめにより　一六五ノ二
あめふれど　四六ノ三
あめふれば　四六ノ五
あやなくて　一二三ノ五
あらたまの　六一ノ二
あらをだを　一四四ノ三
ありあけの　一二三ノ一
ありそうみの　一四四ノ四
ありとみて　八五ノ五
ありぬやと　一九二ノ六
ありはてぬ　一七四ノ一
あれにけり　一七八ノ五
あわゆきの　九九ノ八
あをやぎの　五ノ四
あをやぎを　二〇一ノ二

イ

いかならむ　一七一ノ八
いくばくの　一九一ノ一
いくよしも　一六九ノ二
いけにすむ　一二九ノ五
いさけふは　一七ノ六
いざここに　一七八ノ二
いざさくら　一四ノ三
いささめに　八七ノ五
いしまゆく　一三三ノ二
いせのあまの　一三三ノ三
いせのうみに　九六ノ三
いせのうみの　九六ノ四
いそのかみ(ふりにし)　一九二ノ三
いそのかみ(ふるから)　一六〇ノ二
いそのかみ(ふるき)　二六ノ七

いそのかみ(ふるの)　一三一ノ三
いたづらに(過ぐる)　六四ノ一
いたづらに(行きて)　一二一ノ二
いづくにか　一七ノ三
いつしかと　一九一ノ二
いつとても　九九ノ四
いつのまに　二六ノ三
いつはとは　三四ノ一
いつはりと　一三六ノ七
いつはりの(なき世)　一三六ノ六
いつはりの(涙)　一〇三ノ五
いつまでか　一八ノ一
いでてゆかむ　一九五ノ二
いでひとは　一三六ノ五
いでわれを　九六ノ二
いとせめて　一〇〇ノ三
いとによる　七九ノ四
いとはやも　三六ノ八
いとはるる　一九五ノ四
いにしへに(ありき)　六四ノ三
いにしへに(猶)　一三九ノ五
いにしへの(賤の)　一六〇ノ四
いにしへの(野中)　一六〇ノ三
いぬがみの　二〇六ノ三
いのちだに　一七三ノ一
いのちとて　八七ノ二
いのちにも　一〇八ノ六
いのちやは　一〇九ノ五
いまいくか　八三ノ三
いまこそあれ　一六〇ノ五
いまこむと(いひし)　一三六ノ四
いまこむと(いひて)　一三六ノ八
いまさらに(とふべき)　一六六ノ五
いまさらに(なに)　一七三ノ五
いまさらに(山へ)　一六六ノ五
いましはと　一七五ノ一
いまぞしる　一三七ノ三
いまはこじと　一三七ノ三
いまはとて(返す)　一三〇ノ二
いまはとて(君が)　一四一ノ六
いまはとて(我が身)　一三八ノ三
いまはとて(別るる)　一三ノ二
いまははや　一〇九ノ三
いまもかも　三三ノ二
いまよりは(植ゑて)　四三ノ二
いまよりは(つきて)　五七ノ五
いろかはる　四九ノ五
いろなしと　一五六ノ二
いろみえで　一四一ノ三
いろもかも　一五一ノ二
いろもなき　一二八ノ七
いろよりも　六ノ四

ウ

うきぐさの　九八ノ八
うきことを　五七ノ三
うきながら　一四五ノ四
うきめのみ　一三五ノ二
うきめをば　二〇五ノ三
うきよには　一七三ノ五
うぐひすの(笠に)　六ノ八
うぐひすの(こぞの)　一九五ノ五
うぐひすの(谷より)　三ノ六
うぐひすの(なく)　一九ノ二
うたたねに　一〇〇ノ二
うちつけに(こし)　八六ノ一
うちつけに(寂し)　一五〇ノ二
うちわたす　一八九ノ七
うちわびて　九八ノ九
うつせみの(からは)　八六ノ五
うつせみの(世にも)　一三ノ五
うつせみの(世の)　一三七ノ二
うつせみは　一四六ノ三
うつつには　一二七ノ三
うばたまの(夢に)　八六ノ六
うばたまの(我が)　八八ノ五
うめがえに　二ノ一
うめがかを　八ノ五
うめのかの　六〇ノ五
うめのはな(咲きて)　一九八ノ三
うめのはな(それとも)　六〇ノ三
うめのはな(立ちよる)　六ノ七
うめのはな(にほふ)　七ノ三
うめのはな(見にこそ)　一九〇ノ六
うらちかく　五九ノ一
うらみても　一四三ノ七
うれしきを　一五五ノ三
うゑしうゑば　四七ノ四
うゑしとき　四八ノ二
うゑていにし　一三七ノ五

エ

えぞしらぬ　七〇ノ一
えだよりも　一五ノ二

オ

おいぬとて　一六三ノ一
おいらくの　一六一ノ四
おきつなみ　一六四ノ六
おきのゐて　二〇五ノ一
おきべにも　九八ノ二
おきもせず　一一〇ノ一
おくやまに　三七ノ五
おくやまの(いはがき)　五〇ノ四
おくやまの(すがの)　九九ノ九
おしてるや　一六一ノ三
おそくいづる　一六八ノ四
おちたぎつ　一六七ノ三
おとにのみ　九二ノ一
おとはやま(おとに)　一六ノ五
おとはやま(今朝)　七一ノ三
おとはやま(こだかく)　四五ノ二
おなじえを　一六一ノ一
おほあらきの　三三ノ五
おほかたの　一五八ノ六
おほかたは(月をも)　一二九ノ二
おほかたは(我が名も)　五七ノ三
おほぞらの　三一ノ四
おほぞらは　一六六ノ一
おほぬさと　一三五ノ四
おほぬさの　一五七ノ一
おほはらや　一二九ノ六
おもひいでて　三七ノ四
おもひいづる(常磐の山)　九五ノ一
おもひいづる(常磐の山)　一七三ノ二

おもひけむ　一九五ノ一
おもひせく　一六八ノ一
おもひつつ　一〇〇ノ一
おもひやる(越の)　一七八ノ一
おもひやる(さかひ)　九七ノ六
おもふてふ(言の葉)　一三三ノ一
おもふてふ(人の心)　一九四ノ五
おもふどち(春の山邊)　三一ノ七
おもふどち(ひとり)　一一七ノ一
おもふどち(まとゐ)　一五五ノ二
おもふとも(かれなむ)　一四一ノ五
おもふとも(戀ふとも)　九六ノ一
おもふには　九五ノ九
おもふより　一二八ノ三
おもへども(思はず)　一九四ノ六
おもへども(なほ)　一九三ノ五
おもへども(人目)　一一七ノ五
おもへども(身を)　六八ノ五
おろかなる　一〇一ノ二

カ

かがみやま　一六一ノ八
かがりびに　九七ノ一二
かがりびの　七五ノ四
かきくらし(ことは)　一〇三ノ四
かきくらし(降る)　一一六ノ一
かきくらす　一一七ノ四
かぎりなき(おもひ)　一五五ノ四
かぎりなき(君)　六七ノ三
かぎりなき(くもゐ)　七五ノ三
かぎりなく　一二四ノ六
かくこひむ　六三ノ五
かくしつつ(とにも)　一六三ノ五
かくしつつ(世をや)　一四ノ五
かくばかり(逢ふ日)　八四ノ二
かくばかり(惜しと)　三四ノ二
かくれぬの　一四ノ三
かけりても　二〇四ノ三
かげろふの　二九ノ二
かずかずに(思ひ)　一三五ノ三
かずかずに(われ)　一五三ノ一
かすがのに　六五ノ二
かすがのの(飛火)　四ノ四
かすがのの(雪)　九三ノ一
かすがのの(若菜)　四ノ八
かすがのは　四ノ三
かすみたち　三ノ一
かすみたつ　八ノ八
かぜのうへに　一七九ノ四
かぜふけど　一六七ノ四
かぜふけば(おきつ白波)　一八〇ノ三
かぜふけば(おつる紅葉)　五四ノ二
かぜふけば(波うつ岸)　一一九ノ四
かぜふけば(みれに)　一〇七ノ五
かぞふれば　一六一ノ二
かたいとを　九四ノ一
かたちこそ　一五八ノ二
かたみこそ　三三ノ二
かちにあたる　八八ノ二
かづけども　八三ノ二

かつこえて　七二ノ四
かつみれど　一九九ノ一
かれてより　一二二ノ三
かのかたに　八八ノ三
かはかぜの　三一ノ二
かはのせに　一〇二ノ三
かはづなく　三三ノ六
かひがれを(さやに)　二〇三ノ五
かひがれを(れこし)　六八ノ二
かへるやま(ありとは)　七一ノ一
かへるやま(何ぞは)　二〇〇ノ三
かみがきの　一四八ノ四
かみなづき(時雨に)　一八一ノ三
かみなづき(時雨降り)　四四ノ五
かみなづき(しぐれも)　五二ノ四
かみなびの(みむろ)　五三ノ三
かみなびの(山)　六三ノ三
かめのをの　七八ノ一
からころも(きつつ)　六九ノ二
からころも(たつ日)　一三九ノ二
からころも(ひも)　九六ノ九
かりくらし　八〇ノ三
かりごもの　九四ノ三
かりそめの　一五四ノ四
かりてほす　一六八ノ三
かりのくろ　一六九ノ三
かればてむ　一一三ノ六
かれるたに　五五ノ一

キ

きえぬつる　七九ノ三
きたへゆく　七九ノ一
きにもあらず　一七二ノ七
きのふこそ　三二ノ四
きのふといひ　六一ノ四
きみがうゑし　一五二ノ一
きみがおもひ　一七七ノ一
きみがさす　二九〇ノ四
きみがため　四ノ七
きみがなも　二六ノ四
きみがゆく　七三ノ一
きみがよに　一八八ノ二
きみがよは　二〇一ノ六
きみこずば　一二三ノ六
きみこふる(涙し)　一〇三ノ一
きみこふる(涙の)　一〇二ノ五
きみしのぶ　三五ノ六
きみといへば　一三二ノ四
きみならで　七ノ二
きみにより　一九ノ八
きみまさで　一五一ノ三
きみやこし　一一五ノ五
きみやこむ　一一三ノ三
きみをおきて　二〇三ノ一
きみをおもひ　一六四ノ五
きみなのみ(思ひこしぢ)　一七七ノ四
きみなのみ(おもひれ)　一〇八ノ五
きよたきの　一六六ノ六
きりぎりす　三五ノ二
きりたちて　四四ノ四

ク

くさふかき　一四九ノ五
くさもきも　四四ノ二
くべきほど　八二ノ二
くもはれぬ　一九六ノ一
くももなく　一三四ノ六
くもりびの　一三八ノ六
くもゐにも　七〇ノ二
くるとあくと　八ノ四
くるるかと　二八ノ三
くれなゐに　一九五ノ三
くれなゐの(色に)　一一七ノ七
くれなゐの(初花)　三八ノ一
くれなゐの(ふり)　一〇七ノ二

ケ

けさきなき　二六ノ四
けさはしも　一二五ノ三
けぬがうへに　六〇ノ二
けふこずば　一ノ六
けふのみと　二四ノ三
けふびとを　二〇六ノ一
けふよりは　三三ノ三
けふわかれ　六八ノ一
けむりたち　八七ノ四

コ

こえぬまは　一〇五ノ五
こきちらす　一六六ノ三
こころあてに　四九ノ四
こころから　八二ノ一
こころこそ　一四一ノ二
こころざし　二ノ三
こころをぞ　一三三ノ五
こしときと　二〇五ノ一
こぞのなつ　二八ノ五
こづたへば　一九ノ六
ことしより　九ノ三
ことならば(思はず)　一九四ノ四
ことならば(君)　七四ノ一
ことならば(言の葉)　一五二ノ二
ことならば(咲かず)　一五ノ三
ことにいでて　一〇八ノ四
こぬひとを　一三七ノ六
このかはに　五八ノ二
このさとに　一三ノ四
このたびは　八一ノ二
このまより　三三ノ四
こひこひて(あふ)　三三ノ四
こひこひて(稀に)　一一三ノ四
こひしきが　一九二ノ五
こひしきに(命を)　九六ノ一
こひしきに(わびて)　一〇三ノ九
こひしくば(したに)　一一六ノ七
こひしくば(見て)　五一ノ二
こひしとは　一一四ノ四
こひしなば　一〇七ノ七
こひしれと　九七ノ八
こひすれば　九七ノ一〇
こひせじと　九五ノ七
こひわびて　一〇一ノ三
こふれども　一三六ノ三
こまなめて　二〇ノ二
こむよにも　九七ノ二
こめやとは　一三七ノ一
こよひこむ　三三ノ一
こよろぎの　二〇三ノ二
こりずまに　一一三ノ一
こゑたえず　二三ノ五
こゑはして　二七ノ五
こゑをだに　一三三ノ二

サ

さかさまに　一六二ノ五
さかしらに　一九五ノ六
さきそめし(時)　一六八ノ二
さきそめし(宿)　五〇ノ二
さきだたぬ　一四八ノ一
さくはなは　一八ノ六
さくらいろに　二ノ三
さくらちる　一四ノ一
さくらばな(咲きに)　一ノ二
さくらばな(散らば)　一三ノ六
さくらばな(散りかひ)　六三ノ二
さくらばな(散りぬる)　一六ノ六
さくらばな(とく)　一五ノ四
さくらばな(春)　一ノ四
ささのくま　二〇一ノ一
ささのはに(おく霜)　一〇二ノ一
ささのはに(おく初霜)　一八ノ二
ささのはに(降りつむ)　一六〇ノ八
さつきこば　二六ノ一
さつきまつ(花橘)　二五ノ三
さつきまつ(山郭公)　一〇四ノ二
さつきやま　四三ノ一
さとはあれて　一三五ノ二
さとびとの　四七ノ三
さほやまの(柞の色)　五〇ノ三
さほやまの(柞のもみぢ)　二七ノ九
さみだれに　二八ノ六
さみだれの　一三三ノ二
さむしろに　三四ノ四
さよなかと　一二六ノ三
さよふけて(天のと)　八七ノ三
さよふけて(なかば)　

シ

しかりとて　一六九ノ四
しきしまの　一二四ノ三
しきたへの　一〇六ノ七
しぐれつつ　一四四ノ六
したにのみ　一一八ノ六
したのおびの　七五ノ七
したはれて　七二ノ三
しでのやま　一三九ノ五
しぬるいのち　一〇二ノ六
しののめの(ほがら)　一二四ノ三
しののめの(別)　一二四ノ六
しのぶれど　一一三ノ三
しのぶれば　九七ノ一
しはつやま　二〇〇ノ二
しひてゆく　七五ノ五
しほのやま　六二ノ三
しもとゆふ　一九九ノ二
しものたて　五一ノ八
しもやたび　二〇〇ノ四

しらかはの　一八ノ五
しらくもに　三四ノ三
しらくもの（こなた）　七〇ノ三
しらくもの（絶えず）　一七一ノ一
しらくもの（やへに）　七〇ノ四
しらたまと　一〇七ノ三
しらつゆの　四五ノ四
しらつゆも　四六ノ二
しらつゆを　八四ノ六
しらなみに　五三ノ四
しらなみの　九一ノ四
しらゆきの（ところ）　五八ノ五
しらゆきの（ともに）　一九八ノ二
しらゆきの（降りしく）　六六ノ三
しらゆきの（ふりて）　五九ノ三
しりにけむ　一七一ノ二
しるしなき　二〇ノ一
しるしらぬ　九二ノ五
しるといへば　一三〇ノ一

ス

すがろなく　六七ノ二
すまのあまの（鹽焼衣）　一三五ノ五
すまのあまの（鹽やく煙）　一三六ノ二
すみぞめの　一四九ノ二
すみのえの（きし）　一〇一ノ四
すみのえの（まつ程）　一三七ノ八
すみのえの（松を）　六五ノ五
すみよしと　一六五ノ一
するがなる　九四ノ七

セ

せみのこゑ　一三七ノ一
せみのはの（ひとへに）　一九四ノ二
せみのはの（夜の衣は）　一五八ノ三
せをせけば　一四七ノ五

ソ

そこひなき　一四三ノ六
そでひぢて　九七ノ二
そへにとて　一四三ノ四
そまびとは　一四三ノ八
それをだに　一四三ノ四

タ

たえずゆく　一三七ノ六
たがあきに　四〇ノ三
たがさとに　一三六ノ四
たがために　一六六ノ五
たがための　四七ノ一
たがみそぎ　一八一ノ一
たきつせに　一〇六ノ四
たきつせの（中にも）　九四ノ二
たきつせの（早き）　一一七ノ六
たちかへり　九二ノ二
たちとまり　五四ノ三
たちぬはぬ　一六七ノ一
たちわかれ　六七ノ一
たつたがは（にしき）　五七ノ一
たつたがは（もみぢ葉）　五一ノ一
たつたがは（紅葉亂れて）　五〇ノ五
たつたひめ　五三ノ一
たなばたに　三三ノ八

たにかぜに　三ノ四
たれしあれば　九六ノ六
たのめこし　一三〇ノ一
たのめつつ　一〇九ノ四
たまかづら（今は）　一三五ノ九
たまかづら（はふ木）　一三六ノ三
たまくしげ　一二五ノ二
たまだれの　一五八ノ一
たまぼこの　一三〇ノ三
たむけには　八一ノ三
たもとより　八二ノ四
たよりにも　九三ノ三
たちちれの　六七ノ四
たれこめて　一五ノ一
たれしかも　一一ノ一
たれみよと　一五二ノ四
たれをかも　一六五ノ六

チ

ちぎりけむ　三二ノ六
ちぢのいろに　三六ノ四
ちどりなく　六六ノ一
ちのなみだ　一四六ノ二
ちばやぶる（宇治の）　一六三ノ二
ちばやぶる（神南備）　四五ノ一
ちばやぶる（神の）　四六ノ四
ちばやぶる（神や）　六三ノ一
ちばやぶる（神代）　五二ノ二
ちばやぶる（賀茂の社の）　四四ノ五
ちばやぶる（賀茂の社の）　二〇四ノ一
ちられども　四六ノ六
ちりぬとも　九ノ二
ちりぬれば（戀ふれど）　三ノ一
ちりぬれば（後は）　八四ノ四
ちりなだに　三〇ノ二
ちるとみて　九ノ一
ちるはなの　一九ノ四
ちるはなを　二〇ノ三

ツ

つきかげに　一〇七ノ六
つきぐさに　四二ノ七
つきみれば　一四六ノ一
つきやあらぬ　一四三ノ五
つきよには（こぬ人）　一三三ノ一
つきよには（それと）　七ノ四
つきよよし　一三三ノ五
つくばれの（このもかのも）　二〇三ノ三
つくばれの（このもと）　一七四ノ二
つくばれの（嶺）　二〇三ノ四
つつめども　一〇一ノ一
つのくにの（なには思はず）　二四ノ二
つのくにの（難波の蘆）　一〇八ノ一
つひにゆく　一五四ノ三
つまこふる　四〇ノ四
つゆながら　四八ノ一
つゆならぬ　一〇六ノ一
つゆをなど　一五四ノ二
つるかめも　六四ノ四
つれづれの　一一〇ノ三
つれなきを　一四三ノ二
つれもなき（人を戀ふ）　九七ノ三
つれもなき（人をや）　九四ノ四

つれもなく　一三九ノ四

テ

てもふれで　一〇八ノ二

ト

ときしもあれ　一四八ノ三
ときすぎて　一四〇ノ一
ときはなる　五ノ二
としごとに(逢ふ)　三ノ七
としごとに(もみぢ葉)　五五ノ四
としのうちに　一ノ一
としをへて(消えぬ)　一〇六ノ八
としをへて(住みこし)　一三六ノ一
としをへて(花)　八ノ三
とどむべき　二四ノ一
とどめあへず　一六一ノ七
とぶとりの　九八ノ五
とりとむる　一六一ノ六

ナ

ながしとも　一四ノ二
ながれいづる　八九ノ五
ながれては　一四五ノ五
なきこふる　一一七ノ二
なきとむる　二三ノ二
なきひとの　一五二ノ三
なきわたる　三八ノ五
なくなみだ　一四六ノ一
なげきころ　一九七ノ一
なげきをば　一九七ノ二
なつぐさの　八九ノ一
なつとあきと　三〇ノ三
なつなれば　九五ノ六
なつのよの　二八ノ二
なつのよは　三〇ノ一
なつびきの　二三五ノ一
なつむしの　九九ノ二
なつむしを　一〇七ノ四
なつやまに(懸しき)　二八ノ四
なつやまに(鳴く)　二七ノ一
なとりがは　一二六ノ五
なにかその　一九六ノ四
なにしおはば　七八ノ二
なにはがた(うらむ)　一七六ノ四
なにはがた(生ふる)　一六四ノ七
なにはがた(汐)　一六四ノ四
なにはなる　一九六ノ二
なにびとか　四一ノ三
なにめでて　三九ノ三
なにをして　一九七ノ八
なみだがは(何)　九六ノ五
なみだがは(枕)　九七ノ九
なみのおとの　八八ノ一
なみのはな　八八ノ四
なよたけの　一八〇ノ二

ヌ

ぬきみだる　一六六ノ四
ぬししらぬ　四二ノ一
ぬしなくて　一六七ノ二
ぬしやたれ　一五七ノ三
ぬるがうちに　一四七ノ四
ぬれつつぞ　二四ノ二
ぬれてほす　四八ノ四

ネ

ねぎごとを　一九六ノ六
ねてもみゆ　一四七ノ二
ねになきて　一〇三ノ六
ねぬるよの　二五ノ四

ノ

のこりなく　一三ノ三
のちまきの　八九ノ六
のとならば　一七六ノ二
のべちかく　四ノ二

ハ

はかなくて　一〇三ノ四
はぎがはな　三九ノ一
はぎのつゆ　三八ノ六
はちすばの　二九ノ五
はつかりの(鳴きこそ)　一四二ノ四
はつかりの(はつかに)　九三ノ四
はつせがは　一九〇ノ二
はながたみ　一三五ノ一
はなごとに　八九ノ三
はなすすき(ほに)　一二六ノ八
はなすすき(われ)　一二四ノ一
はなちらす　一四ノ二
はなちれる　三三ノ三
はなとみて　一九一ノ七
はなにあかで　四一ノ二
はなのいろは(移り)　二〇ノ四
はなのいろは(霞)　一七ノ二
はなのいろは(唯)　八七ノ一
はなのいろは(雪)　六〇ノ四
はなのかを　三ノ五
はなのきに　一六ノ三
はなのきも　八六ノ二
はなのごと　一七ノ三
はなのちる　一八ノ三
はなのなか　一九ノ五
はなみつつ　九〇ノ一
はなみれば　四九ノ一
はなよりも　一九ノ一
はやきせに　一五一ノ一
はるがすみ(色)　九八ノ一
はるがすみ(霞みて)　一三五ノ七
はるがすみ(たつ)　一八ノ七
はるがすみ(立てる)　三六ノ九
はるがすみ(棚引く野邊)　六ノ二
はるがすみ(たなびく山の)　一ノ三
はるがすみ(たなびく山の)　一九三ノ四
はるがすみ(なかし)　一三ノ一
はるがすみ(なに)　八九ノ四
はるかぜは　一四ノ五
はるきぬと　一六ノ二
はるくれば(雁)　三ノ三
はるくれば(宿)　六ノ一
はるごとに(流るる)　六四ノ二
はるごとに(花)　八ノ二
はるさめに　一八ノ二
はるさめの　三三ノ三
はるされば　一六ノ五

はるたてど　四ノ一
はるたてば(消ゆる)　九八ノ三
はるたてば(花)　二ノ二
はるのいろの　一七ノ四
はるのきる　五ノ一
はるののに　二ノ二
はるのの　一九三ノ六
はるのひの　二ノ四
はるのよの　七ノ五
はるやとき　三ノ二

ヒ

ひかりなき　一七四ノ三
ひぐらしの(なき)　三六ノ三
ひぐらしの(なく)　三六ノ四
ひさかたの(あまつ空)　一三四ノ四
ひさかたの(天の河原)　三ノ二
ひさかたの(雲)　四七ノ五
ひさかたの(月)　三四ノ六
ひさかたの(なかに)　一七四ノ四
ひさかたの(光)　一六ノ一
ひさしくも　一三七ノ七
ひとこふる　一九七ノ三
ひとしれず(思ふ)　一八二ノ二
ひとしれず(思へば)　九五ノ一
ひとしれず(絶え)　一四三ノ三
ひとしれぬ(思のみ)　一〇八ノ三
ひとしれぬ(思や)　九五ノ二
ひとしれぬ(思を)　九八ノ四
ひとしれぬ(我が)　一二三ノ二
ひとときに　八一ノ一
ひとにあはむ　一九三ノ三
ひとのみも　九六ノ二
ひとのみる　四〇ノ六
ひとはいさ(心)　八ノ一
ひとはいさ(我)　一二三ノ六
ひとふるす　一七九ノ一
ひとめみし　一四ノ四
ひとめもる　九九ノ七
ひとめゆゑ　八四ノ三
ひともとと　四九ノ二
ひとやりの　七二ノ二
ひとりして　一〇五ノ一
ひとりねる　三三ノ八
ひとりのみ(眺むる)　四〇ノ七
ひとりのみ(ながめ)　一三六ノ六
ひとをおもふ(心木の葉)　一三八ノ四
ひとをおもふ(心は雁に)　一〇五ノ二
ひとをおもふ(心は我に)　九七ノ五
ひのひかり　一三六ノ三

フ

ふかくさの　一四七ノ一
ふきまよふ　一三八ノ二
ふくかぜと　二ノ四
ふくかぜに　一八ノ四
ふくかぜを　一九ノ三
ふくからに　四四ノ一
ふしておもひ　六四ノ四
ふじのれの　一九三ノ一
ふたつなき　一五九ノ二
ふぢごろも　一四八ノ五
ふみわけて　五一ノ五
ふゆがはの　一〇六ノ三
ふゆがれの　一四〇ノ二
ふゆごもり　五九ノ六
ふゆながら(空)　五九ノ五
ふゆながら(春)　一九二ノ二
ふゆのいけに　一二八ノ一
ふりはへて　八五ノ三
ふるさとと　一七ノ一
ふるさとに　一三ノ二
ふるさとは(見し)　一七九ノ六
ふるさとは(吉野)　五八ノ二
ふるゆきは　五八ノ一

ホ

ほととぎす(今朝)　一五〇ノ三
ほととぎす(聲)　二九ノ一
ほととぎす(ながなく)　二七ノ三
ほととぎす(鳴く聲)　二七ノ二
ほととぎす(鳴くや)　九ノ一
ほととぎす(初聲)　二六ノ六
ほととぎす(人)　二九ノ二
ほととぎす(峰)　八六ノ四
ほととぎす(夢)　一二五ノ一
ほととぎす(我)　二九ノ四
ほにもいでぬ　五四ノ五
ほのぼのと　七三ノ三
ほりえこぐ　二九ノ三

マ

まがれふく　八ノ四
まきもくの　一九ノ三
まくらより(あと)　一〇五ノ四
まくらより(また)　一八ノ五
まこもかる　五六ノ五
まつひとに　一三〇ノ四
まつひとも　一三ノ二
まてといはば　一九六ノ三
まてといふに　二〇二ノ六
まめなれど　一〇六ノ二

ミ

みさぶらひ　一〇六ノ二
みずもあらず　九二ノ四
みちしらば(尋ねも)　五六ノ一
みちしらば(つみにも)　二〇七ノ二
みちのくに　一二三ノ四
みちのくの(淺香)　三三ノ一
みちのくの(あだちの)　二〇〇ノ七
みちのくの(しのぶ)　二八ノ二
みちのくは　二〇二ノ三
みづぐきの　二〇〇ノ一
みつしほの　二八ノ四
みづのあわの　一四〇ノ三
みづのうへに　一六六ノ一
みづのおもに(生ふる)　一七七ノ一
みづのおもに(しづく)　一四九ノ四
みてもまた　一三四ノ五
みどりなる　四二ノ五
みなせがは　四〇ノ四
みなひとは　一五〇ノ一
みれたかき　六六ノ四
みのののくに　二〇一ノ五
みはすてつ　一九八ノ一

みまさかや　二〇一ノ四
みみなしの　一九二ノ七
みやぎのの　二三ノ七
みやこいでて　七七ノ二
みやこびと　一七〇ノ一
みやこまで　一六六ノ二
みやまには(霰)　二〇〇ノ六
みやまには(松)　四ノ五
みやまより　五五ノ三
みよしのの(大川)　二四ノ五
みよしのの(山のあなた)　一七一ノ六
みよしのの(山の白雪)　五八ノ六
みよしのの(山の白雪)　五九ノ二
みよしのの(山邊)　一ノ三
みよしのの(吉野)　八三ノ六
みるひとも(なき)　三ノ五
みるひとも(なくて)　五二ノ五
みるめなき　二一ノ五
みわのやま　一六八ノ一
みをうしと　一四二ノ六
みをすてて　一七七ノ二

ム

むかしべや　二九ノ三
むしのごと　一〇四ノ四
むすぶての　七五ノ六
むつごとも　一九一ノ三
むばたまの　一六ノ二
むらさきの(色)　一五六ノ一
むらさきの(一本)　一五五ノ五
むらどりの　一九ノ七

メ

めづらしき(聲)　五五ノ二
めづらしき(人)　一五四ノ一

モ

もがみがは　四二ノ六
ものごとに　五ノ六
もみぢせぬ　一九五ノ八
もみぢばの(散りて)　一三六ノ五
もみぢばの(流れざり)　七一ノ四
もみぢばの(流れて)　五二ノ一
もみぢばは　五五ノ二
もみぢばを　一五四ノ一
ももくさの　四二ノ六
ももちどり　五ノ六
もろこしの　一九五ノ八
もろこしも　一三六ノ五
もろともに　七一ノ四

ヤ

やどちかく　六ノ五
やどりして　二ノ三
やどりせし(花)　六ノ一
やどりせし(人)　四一ノ七
やまかくす　七九ノ二
やまかぜに　七三ノ四
やまがつの　三一ノ三
やまがはに　五四ノ一
やまがはの　一八二ノ三
やまざくら(霞)　九三ノ二
やまざくら(わが見に)　九ノ五
やまざとは(秋)　五七ノ四
やまざとは(冬)　五七ノ二
やまざとは(物の)　一七〇ノ八
やましなの(音羽の滝)　二〇六ノ四
やましなの(音羽の山)　一八八ノ三
やましろの　一三五ノ六
やまたかみ(雲井)　六五ノ三
やまたかみ(したゆく)　九四ノ二
やまたかみ(常に)　八六ノ三
やまたかみ(人)　九ノ四
やまたかみ(見つつ)　一六ノ四
やまだもる　五四ノ四
やまのゐの　一三六ノ一
やまぶきの　一九〇ノ七
やまぶきは　三ノ四
やよやまて　二七ノ八

ユ

ゆきかへり　一三九ノ一
ゆきとのみ　一六ノ三
ゆきのうちに　一ノ四
ゆきふりて(年)　六一ノ三
ゆきふりて(人)　五九ノ四
ゆきふれば(水)　六〇ノ六
ゆきふれば(冬)　五八ノ四
ゆくとしの　六一ノ五
ゆくみづに　七五ノ四
ゆふぐれの　七三ノ二
ゆふぐれは(いとど)　九六ノ三
ゆふぐれは(雲)　九四ノ二
ゆふされば(衣手)　七ノ四
ゆふされば(人)　一四四ノ一
ゆふされば(螢)　一〇一ノ七
ゆふづくよ(おぼつかなき)　八〇ノ二
ゆふづくよ(さすや)　九四ノ八
ゆふづくよ(なぐら)　五五ノ五
ゆめぢには　一一七ノ四
ゆめぢにも　一〇三ノ三
ゆめとこそ　一四七ノ三
ゆめにだに(逢ふ)　一三六ノ四
ゆめにだに(見ゆ)　一三ノ一
ゆめのうちに　九七ノ七

ヨ

よしのがは(岩きり)　九四ノ一〇
よしのがは(岩波)　九一ノ三
よしのがは(岸)　三ノ五
よしのがは(水)　一一六ノ六
よしのがは(よしや)　一四〇ノ五
よそながら　一九六ノ五
よそにして　九八ノ一一
よそにのみ(あはれ)　七ノ一
よそにのみ(聞かまし)　一三四ノ二
よそにのみ(戀ひや)　七一ノ二
よそにみて　二一ノ五
よどがはの　二七ノ七
よとともに　一〇三ノ二
よにふれば(うさこそ)　一七一ノ七
よにふれば(ことの葉)　一七二ノ六
よのうきめ　一七二ノ三
よのなかに(いづら)　一七〇ノ七
よのなかに(ふりぬる)　一六〇ノ六
よのなかの(憂きたび)　一九七ノ六

よのなかの(うきも)　一七〇ノ五
よのなかの(うけくに)　一七二ノ二
よのなかの(人)　一四一ノ一
よのなかは(いかに)　一九七ノ七
よのなかは(いづれ)　一七九ノ二
よのなかは(かくこそ)　九二ノ三
よのなかは(なにか)　一六九ノ一
よのなかは(昔)　一七一ノ四
よのなかは(夢)　一七〇ノ六
よのなかを　一七一ノ五
よひのまに　一九七ノ四
よひのまも　一〇一ノ六
よひよひに(ぬぎて)　一〇六ノ五
よひよひに(枕)　九六ノ一〇
よやくらき　一七ノ一〇
よるべなみ　一二ノ一
よろづよを　六五ノ一
よをいとひ　一九八ノ五
よをさむみ(置くは)　八一ノ一
よをさむみ(衣)　三七ノ一
よをすてて　一七三ノ四

ワ

わがいほは(都)　一七八ノ四
わがいほは(三輪)　一七八ノ三
わがうへに　一五五ノ一
わがかどに　三六ノ七
わがかどの　二〇〇ノ八
わがきつる　五二ノ三
わがきみは　六三ノ一
わがこころ　一五八ノ五
わがごとく(物や)　一〇四ノ一
わがごとく(われを)　一三四ノ三
わがこひに　一〇六ノ二
わがこひは(しらぬ)　一〇七ノ一
わがこひは(人)　九五ノ一〇
わがこひは(み山)　一〇一ノ五
わがこひは(むなしき)　九四ノ六
わがこひは(行方)　一〇九ノ一
わがこひを　一一九ノ一
わがせこが(くべき)　二〇七ノ一
わがせこが(衣の裾)　三一ノ三
わがせこが(衣はる雨)　五ノ三
わがせこを　二〇二ノ四
わがそでに　一三五ノ一〇
わがその　九五ノ四
わがために　三三ノ六
わがまたぬ　六一ノ一
わがみから　一七三ノ一
わがみても　一六三ノ三
わがやどに　三三ノ一
わがやどの(池)　二五ノ一
わがやどの(菊)　一〇三ノ二
わがやどの(花ふみ)　八五ノ四
わがやどの(花見)　二ノ四
わがやどは(道)　一三六ノ七
わがやどは(雪)　五八ノ三
わがよはひ　六二ノ四
わかるれど　七五ノ一
わかれては　六八ノ四
わかれてふ　七〇ノ五
わかれなば　七三ノ三
わきもこに　二〇六ノ二

わくらはに　一七三ノ三
わすらるる(時)　九六ノ八
わすらるる(身)　一四五ノ二
わすられむ　八一ノ二
わすれぐさ(枯れもや)　一四二ノ一
わすれぐさ(たれ)　一三六ノ二
わすれぐさ(なにを)　一四二ノ二
わすれては　一七五ノ二
わすれなむ　一二七ノ五
わすれなむと　一二七ノ四
わたつみと　一二九ノ四
わたつみの(沖)　一六四ノ一
わたつみの(かざし)　一六四ノ二
わたつみの(濱)　六二ノ二
わたつみの(我が身)　一四四ノ二
わたのはら(八十島)　七七ノ一
わたのはら(よせくる)　一六四ノ三
わびしらに　九八ノ四
わびぬれば(しひて)　一〇三ノ七
わびぬれば(身)　一七〇ノ二
わびはつる　一四三ノ六
わびびとの(住む)　一七八ノ六
わびびとの(わきて)　五一ノ九
わりなくも　一〇三ノ八
われのみぞ　一〇九ノ二
われのみや(あはれ)　四二ノ四
われのみや(世)　一四一ノ四
われはけさ　八四ノ五
われをおもふ　一九四ノ八
われをきみ　一七六ノ三
われをのみ　一九四ノ七

ヲ

をぐらやま　八五ノ一
をぐろざき　二〇二ノ五
をしとおもふ　二〇ノ五
をしむから　六八ノ三
をしむらむ　七四ノ四
をしめども　二三ノ四
をちこちの　五ノ七
をふのうらに　二〇三ノ七
をみなへし(秋)　四〇ノ一
をみなへし(うしと)　三九ノ四
をみなへし(うしろ)　四一ノ一
をみなへし(多かる)　三九ノ六
をみなへし(ふき)　四〇ノ五
をりつれば　六ノ三
をりてみば　三八ノ七
をりとらば　一三ノ二

下句七言

ア

あかずちりぬる　一四一ノ五
あかずとやなく　二八ノ三
あかずもきみを　二六ノ三
あかずわかるる　六九ノ一
あかつきばかり　二二ノ一
あかでもひとに　七五ノ六
あかぬいろかは　七ノ一

あかぬこころに　六四ノ四
あきぎりにのみ　四〇ノ六
あきくるかりは　八九ノ四
あきくるよひは　三三ノ八
あきにはあへず　四六ノ四
あきのこのはの(散れば)　五一ノ七
あきのこのはの(ぬさ)　五三ノ一
あきのこのはを　四五ノ四
あきのしぐれと　七四ノ四
あきのつゆさへ　九九ノ三
あきのゆふべは　九九ノ四
あきのわかれは　七一ノ四
あきはいろいろの　四二ノ五
あきはかぎりと(思ひ)　五五ノ三
あきはかぎりと(見む)　五五ノ二
あきはふかくも　四七ノ三
あきよりさきの　一三九ノ四
あさきせにこそ　一二七ノ八
あしたづのれに　一三七ノ八
あしたのとこぞ　一〇三ノ四
あしたのはらは　四四ノ四
あすさへふらば　四ノ六
あだなるものと　八四ノ五
あだにはならぬ　八九ノ六
あとはかもなく　五九ノ四
あないひしらず　一九七ノ五
あなうのはなの　一七一ノ五
あなかしがまし　一九一ノ四
あなたおもてぞ　一五九ノ四
あはずばなにを　九四ノ一
あはでこしよぞ　一二ノ四
あはですぐせる　一〇九ノ二
あはれあなうと　一六一ノ六
あはれとはおもふ　一六三ノ二
あはれとやいはむ　一七〇ノ七
あひくるみなば　八七ノ六
あひみぬさきに　七五ノ一
あひみむことは　一八ノ二
あふことなきに　一二ノ三
あふごなきこそ　一九七ノ三
あふにしかへば　一〇九ノ五
あふひとからの　一二四ノ二
あふをかぎりと　一〇九ノ一
あまぎるゆきの　六〇ノ三
あまつそらなる　九四ノ二
あまつほしとぞ　四七ノ五
あまとぞわれは　一六四ノ七
あまのかはらに(おひぬ)　四〇ノ二
あまのかはらに(たたぬ)　三三ノ一
あまのかはらに(われば)　八〇ノ三
あまのかはらを　一九一ノ二
あまのかるもに　一六九ノ二
あまのすむてふ　一四四ノ二
あまのとわたる　三七ノ二
あまのながせる　五三ノ四
あまのなはたぎ　一七三ノ二
あめとふるとも　五四ノ三
あめもなみだも　一二四ノ五
あめもふらなむ　一三七ノ四
あやなくあだの　三九ノ六
あやなくけふや　九二ノ四
あやめもしらぬ　九一ノ一
あらたまれども　五ノ六

ありあけのつきを　一三三ノ四
ありしよりけに　一二七ノ四
ありてよのなか　一三ノ三
ありとはきけど　八六ノ四
ありとやここに　六ノ三
ありなばひとに　一四ノ三
あるをみるだに　一四八ノ三
あれたるやどに　四一ノ一
あれどもきみを　九四ノ七
あわをかたまの　八三ノ六

イ

いかがさきちる　八八ノ二
いかがつらしと　八四ノ二
いかにせむとか　一二六ノ五
いかにせよとか　八八ノ六
いかにちれとか　一六ノ三
いかにれしよか　九六ノ一〇
いかにふけばか　一三七ノ六
いきうしといひて　七三ノ二
いくそばくわが　八九ノ五
いくよかへしと　一六三ノ四
いけのそこにも　四九ノ二
いざこころみむ　九六ノ一三
いさとこたへよ　二〇六ノ三
いざやどかりて　一三ノ二
いそのなみわけ　一五八ノ一
いたくなわびそ　九ノ四
いたらぬさとも　一五九ノ一
いつかちとせを　四八ノ四
いつかはゆきの　一七七ノ四
いづこなしのぶ　一四三ノ六
いづこをみつの　一七六ノ四
いつしかとのみ　三三ノ三
いつしかとの　九四ノ八
いつともわかぬ　八ノ四
いつのひとまに　九五ノ六
いつまでわがみ　一六ノ三
いづらはあきの　一九一ノ三
いづれのひとか　一九一ノ五
いづれみやこの　七九ノ二
いづれをうめと　六〇ノ六
いづれをさきに　一五一ノ一
いづれをみちと　七五ノ五
いでやこころは　一九四ノ七
いとかくかたき　一三六ノ二
いとどふかくさ　一七六ノ一
いとはれてのみ　一三四ノ六
いなおほせどり　五四ノ四
いなにはあらず　二〇三ノ七
いなばそよぎて　三一ノ四
いなばのそよと　一〇五ノ一
いなばのつゆに　五四ノ五
いなやおもはじ　一九四ノ六
いはでこころに　九八ノ七
いはればこそあれ　九五ノ一
いはのかげみち　一七一ノ七
いはほふこころは　六五ノ二
いはほとなりて　六二ノ一
いはほにもさく　五八ノ五
いまいくかありて　四ノ四
いまぞなくなる　三六ノ九
いまぞのやまを　八四ノ七
いまはおもひぞ　一四〇ノ一

いまはかぎりの(色と) 四六ノ六
いまはかぎりの(かどで) 一五四ノ四
いまはわがみを 一九六ノ二
いまひとしほの 五ノ二
いまもなかなむ 二五ノ三
いもしるらめや 九四ノ三
いもとわがぬる 三〇ノ二
いやとほざかる 一四四ノ五
いやはかなにも 一二五ノ四
いよいよみまく 一六二ノ一
いりにしひとの 五九ノ二
いるがごとくも 二三ノ一
いろこそみえれ 七ノ五
いろさへにこそ 五〇ノ二
いろどるきぎも 三六ノ八
いろにはいでじ 一九ノ一
いろにはいでじと 九五ノ九
いろにやこひむ 九五ノ三
いろはかはらず 一七ノ一
いろもかはらぬ 一二三ノ一
いろをもかをも 七ノ二

ウ

うきことあれや 一七ノ一
うきことしげく 一七四ノ一
うきたるこひも 一〇六ノ四
うきておもひの 九六ノ七
うきふしごとに 一七二ノ六
うきふししげき 一七二ノ五
うきめをみつの 一七六ノ三
うきよのなかに 二九ノ四
うきよのなかは 一七二ノ一
うきよのなかを 一四九ノ一
うぐひすさそふ 三ノ五
うぐひすだにも 三ノ二
うくひずとのみ 八二ノ一
うすくやひとの 三七ノ一
うたたあるさまの 一九ノ七
うたてにほひの 九ノ一
うちいづるなみや 三ノ四
うつしごころは 一二六ノ五
うつせみのよぞ 一四七ノ二

うつつあるものと 一四七ノ三
うつつにだにも 八六ノ六
うつつにひとめ 一二七ノ四
うつぶしそめの 一九八ノ五
うつりがこくも 一五八ノ三
うつりもゆくか 一三八ノ二
うつろはむとは 一二八ノ七
うつろはむとや 一三ノ一
うつろひやすき 一四一ノ一
うつろひゆくを 三三ノ七
うつろふあきに 四八ノ二
うつろふいろに 一七ノ三
うつろふからに 五〇ノ一
うつろふことも 一四一ノ二
うつろふはなに 一九ノ二
うらこぐふねの 二〇三ノ三
うらさびしくも 一五一ノ三
うらみてのみぞ 一二三ノ二
うらみてもなほ 一四四ノ九
うらみむとのみ 一二八ノ五
うらめづらしき 三一ノ三

うるはけむきみが 二二ノ四
うるはけむひとの 一五一ノ二

エ

えだもたわわに 三八ノ七

オ

おいすばけふに 一六三ノ一
おいせぬあきの 四八ノ一
おいにけらしな 一六七ノ三
おきてしゆけば 六九ノ二
おきてわかれし 一二五ノ一
おきひむときや 八九ノ五
おきふしよるは 一〇八ノ二
おきまどはせる 四九ノ四
おきゐてものを 一八〇ノ二
おくしらつゆの 八六ノ一
おくとはなげき 九四ノ四
おくれむとおもふ 一九五ノ八
おけるくさばも 八五ノ二
おちてもみづの 一五ノ二

おつとはみれど 一六八ノ一
おつるもみぢの 五一ノ六
おとにききつつ 九三ノ五
おとにぞひとを 一三ノ二
おとにはたてじ 九四ノ一〇
おとにもひとの 一三五ノ九
おとにやあきを 四四ノ三
おなじこころに 九八ノ一一
おなじひとにや 一三九ノ三
おのがきぬぎぬ 一一四ノ三
おのがすむもの 六九ノ二
おのがものから 一二五ノ一
おほかるのべに 八九ノ五
おぼつかなくも 一〇八ノ二
おもかげにのみ 四九ノ四
おもはぬかたに 一八〇ノ二
おもはぬなかぞ 八六ノ一
おもはぬひとを 九四ノ四
おもはむひとに 一九五ノ八
おもひいづるぞ 八五ノ二
おもひくらしの 一五ノ二

おもひしこころ 一六八ノ一
おもひしらずも(解くる) 五一ノ六
おもひしらずも(まどふ) 九三ノ五
おもひそめてむ 一三ノ二
おもひたちぬる 九四ノ一〇
おもひたはれむ 一三五ノ九
おもひつきせぬ 四四ノ三
おもひのいろの 九八ノ一一
おもひのみこそ 一三九ノ三
おもひはかけじ 一一四ノ三
おもひはなれぬ 四〇ノ四
おもひみだれて 一三〇ノ二
おもひやれども 四一ノ二
おもふてふこと 五ノ七
おもふなかをば 二〇五ノ一
おもふはやまの 一三六ノ二
おもふひとこそ 一三六ノ五
おもへどえこそ 九七ノ四
七〇ノ四
一五ノ三
一三六ノ八

カ

かがみにみゆる 一四三ノ七

かがみのかげに 八八ノ五
かからぬやまの 一九三ノ五
かかれるえだに 二ノ二
かきほにさける 二四ノ一
かくこそはみめ 一三ノ二
かくてもへぬる 一四二ノ六
かくるとすれど 一一九ノ五
かけておもはぬ 一〇六ノ五
かけてれにのみ 一五二ノ三
かけてのみやは 一三九ノ二
かげばかりのみ 一三六ノ一
かげみしみづぞ 五七ノ三
かさへなつかし 三三ノ三
かしらのゆきと 二ノ四
かずさへみゆる 三四ノ三
かずはたらでぞ 九六ノ一
かぜぞたよりの 九一ノ四
かぜのおとにぞ 三ノ一
かぜのまにまに 一三八ノ四
かぜはこころに 一六ノ四
かぜふくごとに(浮き沈む) 八三ノ二
かぜふくごとに(物思ひ) 一〇六ノ一
かぜよりほかに 三六ノ四
かぜなまつごと 一三ノ七
かたへすずしき 三〇ノ三
かつみながらに 六八ノ四
かつみるひとに 三二ノ一
かなしきものと 三三ノ五
かれてうつろふ 四四ノ五
かれてぞみゆる 一〇二ノ一
かはかぜさむし 七ノ二
かはとみながら 一二七ノ五
かへすがへすぞ(露は) 八七ノ一
かへすがへすぞ(人は) 九六ノ九
かへすはなの 七四ノ一
かへるがへるも 一六二ノ三
かへるさまには 七二ノ三
かへるみちにし 三ノ四
かみだにけたぬ 一九三ノ一
かみのみまへに 一〇〇ノ三
かみはうけずも 九五ノ七
かみよのことも 一五七ノ一
かよへるそでの 一〇三ノ三
からくもわれは 一六一ノ三
からくれなゐに(うつろひ) 一〇七ノ三
からくれなゐに(水くくる) 五二ノ二
からくれなゐの 二七四
からはほのほと 二〇四ノ三
かりにだにやは 一七六ノ二
かりにのみこそ 一三五ノ二
かりのなみだや 四五ノ五
かれなであまの 一二ノ五
かれにしひとは 六一ノ一
かれゆくきみに 一三ノ二
かなたづれてぞ 七ノ四
かなだにほへ 六〇ノ四
かなだにぬすめ 一七ノ二

キ

きえあへぬゆきの 二ノ三
きえかへりてぞ 一〇三ノ二
きえずはありとも 一二ノ六
きえてものおもふ 一〇三ノ四
きえぬものから 一六四ノ一
きぎのこのはの 五二ノ三
きこゆるそらに 三四ノ四
きしにおふてふ 二〇七ノ二
きしのひめまつ 一六三ノ三
きてもとまらぬ 七ノ一
きのふけふとは 一五四ノ三
きのふのふちぞ 一六九ノ一
きみがかたみと 七五ノ二
きみがこころに 一三五ノ一〇
きみがこころは 九八ノ一三
きみがこぬよは 一三五ノ八
きみがちとせの(ありかず) 六二ノ二
きみがちとせの(かざし) 六四ノ二
きみがみかげに 二〇三ノ三
きみがみかげの 一四九ノ四
きみがみよなれば 六二ノ三
きみがやちよに 六二ノ五
きみがゆきを 一三一ノ一
きみがよまでの 一四六ノ二
きみがわかれを 七一ノ三
きみにこひつつ 九五ノ五
きみにわかれし 一五〇ノ三
きみわたりなば 三三ノ二
きみなばまして 七四ノ三
きみなばやらじ 二〇三ノ二
きりたちわたり 三三ノ四

ク

くさのはつかに 九五ノ一
くさのまくらに 八〇ノ一
くさはみながら 一五五ノ五
くさむらごとに 三五ノ五
くちしところぞ 一七九ノ六
くものあなたは 五九ノ五
くものあはたつ 二〇五ノ三
くものいづこに 三〇ノ一
くものうへまで 一八二ノ一
くものふるまひ 二〇七ノ一
くもるときなく 六六ノ四
くもゐにのみも 二〇五ノ二
くらせるよひは 九七ノ七
くらぶのやまも 三五ノ一
くるあきごとに 四一ノ三
くるしきものと 九八ノ一〇
くるしとのみや 九六ノ四
くれなばなげの 一七ノ六
くれなゐふかき 五三ノ一

ケ

けさなくこゑの 三六ノ五
けさはつかりの 一三七ノ五
けさふくかぜに 三六ノ七
けぬとかいはむ 九九ノ九
けふこそさくら 一二ノ一
けふはひとこそ 一四八ノ二
けふはまちみて 一四ノ四

コ

こがくれたりと 一八八ノ二
こけのたもとよ 一五〇ノ一
ここぞとまりと 一六六ノ一
ここらのとしを 六五ノ四

ごころのひとに 一九七ノ七
こころありとや 二七ノ六
こころしあきの 二八ノ四
こころぞともに 九〇ノ一
こころづからや 一六ノ二
こころづくしの 三三ノ四
こころにしみて 七〇ノ五
こころのあきに 一四四ノ六
こころのうらぞ 二四ノ六
こころのゆきて 六五ノ三
こころばかりは 六七ノ四
こころはきえぬ 一九八ノ二
こころはきみが 二一ノ一
こころばせなば 八七ノ五
こころはなに 一五八ノ二
こころひとつを(定め) 九六ノ三
こころひとつを(たれに) 四〇ノ一
こころぼそくも 七九ノ四
こころよわくも 四三ノ二
こころをいづち 一〇三ノ八
こころをきみに 六八ノ五

こころをぬさと 七〇ノ三
こころをひとに 九三ノ三
こじまのさきの 三二ノ二
こしをにほひぞ 八五ノ三
こずゑはるかに 二六ノ五
こぞとやいはむ 一ノ一
こたへするまで 九七ノ三
こたへぬやまは 九八ノ九
こてふにたり 二三ノ五
ことしげくとも 二五ノ一
ことしのみちる 二〇ノ一
ことしはいたく 一六ノ二
ことしばかりは 一四七ノ一
ことぞともなく 二四ノ一
ことなしぶとも 一九ノ七
ことのはさへに 二八ノ三
こぬひとたのむ 二五ノ六
このしたつゆは 二〇三ノ六
このはにふれる 一七ノ二
このひともとは 一八ノ四
こひしかるべき 八三ノ一

こひしきことに 一二九ノ五
こひしきときの 九ノ二
こひのみだれの 九五ノ八
こひわたるまに 一四五ノ三
こひをしこひば 九六ノ六
こほれるなみだ 一ノ四
こまのあしをれ 一三〇ノ四
こまもすさめず 一六一ノ一
こむといふなる 六三ノ二
こりぬこころを 一〇九ノ四
これなむそれと 八二ノ四
ころもにかかり 一三七ノ二
ころものそでの 一四九ノ三
ころもへずして 二四ノ三
ころうちそふる 六五ノ五
ころきくときぞ 三七ノ五
ころするかたに 三五ノ七
ころのうちにや 五五ノ五
ころのかぎりは 二七ノ七
ころばかりこそ 二六ノ七
ころふりたてて 二八ノ四

サ

さかゆくときも 一六〇ノ五
さきてとくちる 一七四ノ三
さくとみしまに 一三ノ五
さけるさかざる 一七ノ四
さすがにめには 一三八ノ五
さそふみづあらば 一七〇ノ二
さてもやうきと 一三四ノ三
さとをばかれず 一七五ノ一
さほのやまべを 四七ノ一
さやぐしもよを 一九五ノ六
さらばなべてや 一五七ノ三
さりとてひとに 九七ノ一〇

シ

しかのなくれに 三七ノ四
しかもつれなく 一六一ノ七
しぐれのあめの 一九〇ノ五
しぐれのあめを 五七ノ一
しげきのべとも 一五二ノ一
しげきわがこひ 一〇八ノ一
しげさまされど 一〇一ノ五
したにかよひて(戀し) 一〇八ノ四
したにかよひて(戀は) 一二七ノ七
したになながれて 一〇六ノ三
したばのこらず 四六ノ二
したゆふひもの 一六ノ一
しづこころなく 一八八ノ二
しでのたをさを 九一ノ一
しにはやすくぞ 九六ノ一一
しぬとぞただに 一三四ノ四
しのびにそでは 一〇三ノ五
しまがくれゆく 七七ノ三
しまこぎかくる 二〇〇ノ二
しみはつくとも 一一八ノ二
しらずやひとを 九八ノ三
しらやまのなは 七九ノ三
しりてまどふは 一九六ノ四
しるもしらぬも 二〇三ノ四
しろくさけるは 一八九ノ八

ス

すぎがてにのみ 三ノ一
すきものとのみ 一九八ノ三
すぐるよはひや 一六一ノ五
すすきおしなみ 五七ノ五
すみけむひとの 一七八ノ五
すむひとさへや 五九ノ三
すむわれさへぞ 五三ノ二
すめばすみぬる 一七一ノ一
すゑさへよりこ 二〇〇ノ七
すゑつむはなの 九五ノ二
すゑのまつやま(こす) 五九ノ一
すゑのまつやま(波) 二〇三ノ一

セ

せきのこなたに 九二ノ一
せにかはりゆく 一七九ノ五
せむかたなみぞ 一九二ノ四

ソ

そこともいはぬ 三二ノ七
そこのかげさへ 三三ノ五
そでかとのみぞ 四九ノ一
そでのみぬれて 一〇ノ二
そではかわかじ 七五ノ三
そでふりはへて 四ノ八
それかあらぬか 三八ノ五
そをだにのちの 三七ノ三

タ

たえてつれなき 一〇七ノ五
たえてみだれむ 一八ノ六
たえぬこころの 三六ノ三
たがそでふれし 六ノ四
たがたまづさを 三六ノ六
たがぬぎかけし 四二ノ一
たがまことをか 三六ノ七
たぎつこころを 九四ノ九
たきのおとには 一六ノ六
たきのしらたま 六三ノ三
ただいつはりに 一九六ノ五
ただここにしも 三六ノ四
ただなのるべき 一九〇ノ一
たたまくをしき 一五ノ二
たたるにわれは 一九ノ三
ただわびびとの 一四八ノ四
たちいでてきみが 一八二ノ二
たちかくすらむ 一九四ノ五
たちかくれつつ 二〇〇ノ四
たちさかゆべき 六〇ノ二
たちなばみゆき 六八ノ三
たちなむのちは 六二ノ二
たちわかれなば 一〇四ノ三
たちぬのそらも 二四ノ三
たつことやすき 一九九ノ三
たづぞなくなる 五三ノ三
たつたがはにぞ 八一ノ一
たつたのやまに 一九ノ五
たつたのやまの 一三八ノ一
たづぬるひとも 一六四ノ五
たづれくればぞ 一五二ノ四
たつのとはやく 一三六ノ四
たてれをれども 一九〇ノ一
たなばたつめの 一五五ノ二
たなびくやまの 一九ノ三
たのむかげなく 一四八ノ四
たのめしことぞ 一八二ノ二
たはぶれにくき 二ノ一
たびゆくひとを 一九四ノ五
たまにもぬける 二〇〇ノ四
たまのゆくへを 六〇ノ二
たまのをばかり 六八ノ三
たみののしまに 六二ノ二
たもとのみこそ 一〇四ノ三
たもとゆたかに 二四ノ三
たれかことごと 一九九ノ三
たれかはばるを 五三ノ三
たれかまさると 八一ノ一
たれかわらびと 一九ノ五
たれにおほせて 一三八ノ一
たれによそへて 一六四ノ五
たれをまつむし 一五二ノ四
たなりてもこむ 一九二ノ五
たてれをれども 三三ノ三
たなばたつめの 一八ノ七
たなびくやまの 五一ノ九
たのむかげなく 一〇九ノ三
たのめしことぞ 一九二ノ六
たはぶれにくき 六七ノ二
たびゆくひとを 五ノ五
たまにもぬける 八六ノ五
たまのゆくへを 一〇二ノ六
たまのをばかり 一六四ノ四
たみののしまに 一〇七ノ二
たもとのみこそ 一五五ノ三
たもとゆたかに 六〇ノ五
たれかことごと 一八ノ六
たれかはばるを 二七ノ六
たれかまさると 八七ノ四
たれかわらびと 一九ノ六
たれにおほせて 二七ノ一
たれによそへて 三六ノ二
たれをまつむし 一〇ノ三
たなりてもこむ

チ

ちぐさにものを 一〇四ノ六
ちとせのかげに 六五ノ一
ちとせのさかも 六三ノ一
ちとせのためし 六四ノ三
ちとせをかねて 一九九ノ一
ちよもとなげく 一六二ノ二
ちらぬかげさへ 四四ノ二
ちりかかるをや 八ノ三
ちりかふはなに 二ノ二
ちりなむのちぞ 二ノ四
ちりならぬなの 一二〇ノ一
ちりのまがひに 一三ノ四
ちるといふことは 九ノ三
ちるはなごとに(たぐふ) 一四ノ一
ちるはなごとに(ぬきて) 二〇ノ五
ちるまをだにも 一四ノ五
ちるををしまぬ 一六ノ五

ツ

つきふきかへせ 八七ノ三
つづりさせてふ 一九二ノ一
つれなきものと 一〇七ノ七
つれよりことに 一〇五ノ四
つひにはいかが 一九八ノ一
つひにもみぢぬ 六一ノ三
つひによるせは 一三六ノ一
つひにわがみを 一四〇ノ四
つまもこもれり 四ノ三
つもればひとの 一五八ノ六
つらきひとより 一三九ノ五
つらづゑのみぞ 一九七ノ一
つらぬきかくる 三九ノ二
つれなきひとの 一四二ノ二
つれなきひとも 一〇七ノ六
つれなきひとを(待つ) 一三六ノ七
つれなきひとを(昔と) 九七ノ二

テ

てごとになりて 一〇ノ四
てるひのくれし 一四九ノ五
てるひのひかり 八七ノ三

ト

ときしもわかぬ 一九二ノ一
ときぞともなく 一〇七ノ七
としにひとたび 一〇五ノ四
としにまれなる 一九八ノ一
としのおもほむ 六一ノ三
としのをながく 一三六ノ一
としふるひとぞ 一四〇ノ四
としへぬるみは 四ノ三
とどめおきてば 一五八ノ六
となりのかたに 一三九ノ五
とはにあひみむ 一九七ノ一
とびたつきじの 三九ノ二
とぶらひきませ 一四二ノ二
とめむとめじは 一〇七ノ六
とりよりさきに 一三六ノ七
とわたるふれの 九七ノ二

ナ

ながかきよりぞ 一九二ノ二
ながきおもひは 三五ノ二
ながくやひとを 一二ノ六
なかぞらにのみ 九三ノ四
なかぬかぎりは 三ノ三
ながらのはしと 一六〇ノ六
ながるるみづに 二〇六ノ一
ながるるみづの 一四八ノ一
ながれてこひむ 九四ノ二
ながれてしたに 九七ノ二
ながれてとだに 一四五ノ四
ながれてなほも 一四〇ノ三
ながれてはやき 六ノ四
ながれてふかき 一三七ノ七
ながれてよよに 一八ノ五
ながれもあへぬ 四ノ一
なきこそわたれ(秋のうけ) 一六八ノ三
なきこそわたれ(秋のよな) 三七ノ三
なきつるはなを 一八ノ五
なきてわたると 二九ノ六
なきとこにれむ 一五三ノ二
なきなぞとだに 一四三ノ三
なきなどりては 一二ノ四
なくなるこゑの 八二ノ二
なくなるこゑは 四ノ二
なくれそらなる 一〇四ノ二
なくひとこゑに 二八ノ二
なくゆふかげの 四二ノ四
なくゆふぐれは 三七ノ一
なげかむためと 一四四ノ一
なげきくはるる 一七八ノ六
なけどもいまだ 二ノ一
なしとこたへて 六ノ四
なぞいろにいでて 四〇ノ三
なぞよのなかの 一九四ノ四
なぞわがこひの 一九四ノ一
などいひしらぬ 一四ノ五
などかこころに 一四ノ五
などかなみだの 九九ノ五
などかほにいでて 九九ノ七
などかわがみの 一七三ノ五
などほととぎす 二八ノ一
などわがこひの 九四ノ二
なにおふみやの 一八ノ三
なにかはつゆを 二九ノ五
なにかわかれの 七二ノ一
なにこそきみを 一六四ノ六
なにしかひとを 一〇六ノ六
なににふかめて 一三五ノ七
なにはかくれぬ 一六五ノ二
なにやまひめの 一六七ノ一
なにをうしとか(人の) 一四二ノ三
なにをうしとか(夜ただ) 二八ノ六
なにをさくらに 一三ノ二
なびくあさぢの 二八ノ三
なべてくさばの 一四四ノ七
なほうきときは 一七二ノ四
なほうとまれぬ 二七ノ三
なみだせきあへず 二九ノ三
なみだにうかぶ 一三ノ一
なみだのかはに(うき) 九七ノ二
なみだのかはに(植ゑ) 九八ノ一
なみだのたまの 一四八ノ五

なみだのみこそ 一〇四ノ四
なみぢはあとも 八八ノ三
なみとともにや 三ノ二
なみにおもはば 二四ノ五
なみのさわぎに 一七ノ二
なみのはなにぞ 四四ノ二
なみのをすげて 一六六ノ二
なみもてゆへる 一六四ノ二
ならのみやこも 一七九ノ一
なりみてしがな 一九三ノ四
なりもならずも 二〇三ノ七
なるるをひとは 一三四ノ五
なればよりなむ 一九四ノ二
なをむつましみ 三九ノ五

ニ

にしきたちきる 五二ノ四
にしこそあきの 四五ノ二
にはもまがきも 四三ノ一
にほひもあへず 八六ノ三

ヌ

ぬぎかへがてら 一二七ノ二
ぬさとたむけて 五六ノ一
ぬしさだまらぬ 二六ノ六
ぬしなきやどは 一五〇ノ二
ぬるよのかずぞ 三三ノ七
ぬれぎぬきせて 七四ノ四
ぬれてののちは 四二ノ七
ぬれてをゆかむ 三九ノ一
ぬれにしそでと 一〇三ノ六

ネ

ねずりのころも 一六ノ七
ねてあかすらむ 三四ノ二
ねてのあさけの 二〇〇ノ一
ねにあらはれて 一二九ノ四
ねになきぬべき 九五ノ四
ねぬなはたてじ 一九四ノ三
ねをこそなかめ 一四二ノ七

ノ

のがひがてらに 一九五ノ四
のなるくさきぞ 一五六ノ一
のにもやまにも(立ち) 一二九ノ八
のにもやまにも(惑ふ) 一七一ノ三
のはなければや 八五ノ四
のべのみどりぞ 五ノ三

ハ

はかなきものは 一五四ノ一
はかなきよなも 一四七ノ四
はかなくひとの 一〇五ノ三
はぎのしたばも 三七ノ一
はしにわがみは 一七二ノ七
はてはなげきの 一九六ノ六
はてはものうく 二三ノ二
はなかあらぬか 四八ノ三
はなこそちらめ 四七ノ四
はなしちらずば 一八ノ一
はなぞむかしの 八ノ一

はなたちばなに 二六ノ四
はなとみるまで 五九ノ六
はななきさとに 六ノ二
はななきさとも 三ノ一
はなにもはにも 八四ノ六
はなのさかりに 三ノ六
はなのすがたぞ 一九ノ六
はなのちりなむ 三ノ三
はなのまぎれに 七三ノ四
はなみてくらす 六四ノ一
はなよりさきと 四九ノ三
はなをしみれば 一〇ノ一
はなをばひとり 一四一ノ六
ははそのもみぢ 四七ノ二
はひまつはれよ 二ノ五
はやくいひてし 一四〇ノ五
はやくぞひとを 九一ノ三
はらはばそでや 二九ノ四
はるくることを 三ノ六
はるたつけふの 一ノ二
はるにおくれて 二五ノ二
はるにしられぬ 五八ノ四
はるのこころは 一〇ノ二
はるのしらべや 八ノ一
はるのみやまの 一七四ノ二
はるのものとて 一一〇ノ一
はるはいくかも 二四ノ二
はるはすぐとも 八ノ五
はるばるきぬる 七八ノ一
はるよりのちは 一七七ノ三
はれぬおもひに 七一ノ五
はれぬくもゐに 一七〇ノ一

ヒ

ひかりとどめず 七二ノ四
ひかりのまにも 九九ノ二
ひかりみればや 一〇五ノ五
ひかりをのみぞ 一一三ノ一
ひかりをはなと 九二ノ二
ひさしきほどに 一〇三ノ三
ひとしくまれば 一七ノ五
ひとしらめや 一九三ノ二
ひとだのめなる 七七ノ一
ひとつおもひに 二〇三ノ六
ひとづてにのみ 一二七ノ五
ひとにくからぬ 一四五ノ一
ひとにこころを 一五ノ四
ひとにしられぬ(戀) 一四二ノ一
ひとにしられぬ(花) 一四二ノ四
ひとにつきなみ 一三一ノ五
ひとにはつげよ 一三九ノ三
ひとにもがもや 一四一ノ四
ひとのあきには 一四一ノ三
ひとのこころぞ 二六ノ八
ひとのこころに(あかれ) 一四四ノ三
ひとのこころに(霜は)
ひとのこころの(あき)
ひとのこころの(あれて)
ひとのこころの(そらに)
ひとのこころの(花と)
ひとのこころの(花にぞ)
ひとのこころも
ひとのこころを(見てこそ)

ひとのこころを(見てこそ) 一九六ノ一
ひとのことのは 二六ノ六
ひとのこひしき 一四三ノ五
ひとのしるべく(わが戀ひ) 二八ノ三
ひとのしるべく(わが戀ひ) 二〇六ノ四
ひとのためさへ 一七三ノ一
ひとのとがむる 六ノ七
ひとはくれども 三一ノ三
ひとはよそにぞ 二三四ノ四
ひとひもきみを 九四ノ五
ひとひもみゆき 五八ノ二
ひとめつつみの 一一七ノ六
ひとめもくさも 五七ノ二
ひとめをもると 一一七ノ三
ひともかよはぬ 一四五ノ二
ひともみるがに 二〇〇ノ五
ひとやこひしき 九八ノ六
ひとよもゆめに 一七八ノ一
ひとりあるひとの 三八ノ四
ひとわすれぐさ 一六五ノ一
ひとをあくには 一九五ノ三
ひとをこころに 一七六ノ三
ひとをしのぶの 一〇〇ノ四
ひとをぞたのむ 一三〇ノ三
ひとをとふとも 一〇一ノ一
ひとをみぬめの 一〇六ノ七
ひとをみるめは 九一ノ二
ひろはおもひに 八二ノ三
ひろはばそでに

フ

ふかきこころに 一五六ノ二
ふかきこころを(知る) 九八ノ八
ふかきこころを(人は) 九八ノ五
ふかきたにこそ 一九七ノ六
ふかくさのやま 一四六ノ三
ふかくもひとの 二三ノ六
ふきくるかぜは 一八ノ八
ふきなちらしそ 五一ノ二
ふじのやまこそ 九八ノ四
ふしみのさとの 一七八ノ二
ふたたびとだに 二三ノ五
ふたたびにほふ 四九ノ五
ふたみのうらば 八〇ノ二
ふみわけてとふ 五八ノ三
ふゆもこほらぬ 一〇三ノ二
ふりかくしたる 五一ノ五
ふりにしこのみ 八六ノ二
ふりにしさとに 一五六ノ三
ふるさとさへぞ 二七ノ二
ふるさとさむく 五八ノ六
ふるさとにしも 二九ノ三
ふるさとびとの 一三ノ六
ふるひとなれば 二九ノ二

ヘ

へにけむあきを 八五ノ一

ホ

ほかなるものは 一七七ノ二
ほかになくれを 二九ノ一
ほかのちりなむ 一二ノ五
ほにいづるあきは 四二ノ二

ほにいでてまれく　四三ノ三
ほにでてひとに　一三四ノ一
ほにはいでずも　二〇六ノ二

マ

まがきのしまの　二〇二ノ四
まきのいたども　一三三ノ三
まくらのみこそ　九五ノ一〇
まさきのかづら　二〇〇ノ六
まさしやむくい　一九五ノ一
まだしきほどの　二六ノ一
またるろことの　一三七ノ三
まぢかけれども　九五ノ二
まちしさくらも　一五ノ一
まづしるものは　一七〇ノ五
まつとしきかば　六七ノ一
まづなげかれぬ　一六九ノ四
まつはくるしき　一三七ノ七
まつひとのかに　六ノ五
まつむしのねぞ　三五ノ六
まつもむかしの　一六三ノ六
まどひまされる　一〇一ノ六
まどふこころぞ　一〇七ノ一
まどふゆめぢに　九七ノ六
まどほにあれや　一三五ノ五
まなくちるとも　一〇六ノ二
まなくときなく　一九九ノ二
まなくもちるか　一六六ノ四

ミ

みかさのやまに　七六ノ一
みきとないひそ　一四三ノ四
みさへながると　一〇〇ノ三
みずばこひしと　一三ノ三
みだれてあれど　九六ノ三
みだれてのみや　九八ノ二
みだれてはなの　五ノ四
みだれむとおもふ　二八ノ二
みちふみわけて　五一ノ四
みちもさりあへず　二ノ一
みちゆきぶりに　六ノ一
みつともいふな　一二六ノ四
みづなきそらに　一六ノ六
みづのあきなば　五三ノ五
みづのはるとは　八八ノ四
みづまさりなば　一四六ノ一
みづまさるとや　七四ノ二
みてしひとこそ　九三ノ二
みてもこころの　一三一ノ五
みなとやあきの　五五ノ四
みれにもなにも　九ノ五
みれのこずゑも　四五ノ三
みのまどふだに　九七ノ五
みはてぬゆめの　一〇八ノ六
みまくのほしき　一六四ノ三
みまくほしさに　二一ノ二
みむろのやまに　五一ノ一
みやこしまべの　二〇五ノ二
みやこぞはるの　一〇ノ五
みやこのつとに　二〇二ノ五
みやこはのべの　四ノ五
みやまがくれの　二ノ四
みるかげさへに　六二ノ五
みるめにひとを　一三ノ三
みるめのうらに　一八ノ四
みるものからや　一三ノ五
みるわれさへに　一五ノ三
みれどもあかぬ　一三ノ四
みればなみだの　一五ノ二
みをしるあめは　一三五ノ三
みをつくしとぞ　一〇三ノ五
みをはやながら　一八三ノ三

ム

むかしのひとの　二六ノ二
むかしはまたも　一八ノ三
むかしもいまも　一二ノ六
むかしをこふる　一七〇ノ四
むしのれきけば　三三ノ六
むなしきからの　一〇三ノ九
むれのあたりは　一〇三ノ一
むれはしりびに　一九三ノ三
むべやまかぜを　四四ノ一

メ

めざしぬらすな　二〇三ノ二
めづらしげなく　一三一ノ四
めにこそみえれ　一三八ノ六
めにはみえずて　三八ノ一
めにはみえれど　四〇ノ五
めにみぬひとも　九二ノ三

モ

もえてもはるを　一四〇ノ二
もしほたれつつ　一七三ノ三
もとのこころは（わすられ）　一六〇ノ二
もとのこころは（わすれ）　三八ノ三
もとのこころを　一六〇ノ三
ものうかるれに　四ノ一
ものおもふごとに　一三一ノ四
ものおもふことの　三四ノ一
ものおもふときの　九六ノ五
ものおもふやどの　三八ノ五
ものおもふわれに　二七ノ一
ものはながめて　八三ノ二
ものわびしらに　八七ノ二
もみぢすればや　三四ノ六
もみぢのにしき　八ノ二
もみぢはよるの　五三ノ五

ヤ

やどかすひとも　八一ノ一
やどりさだめぬ　八三ノ五
やどるつきさへ　一三五ノ三
やへむぐらして　一七六ノ五
やまかぜにこそ　五ノ一
やましたかぜに　六六ノ三
やましたとよみ　三七ノ六
やまたちばなの　一六〇ノ三
やまにもはるは　二一九ノ一
やまのあなたも　二三ノ三
やまのかすみを　一五八ノ四
やまのかひある　一五三ノ一
やまのかひなく　九六ノ五
やまのかひより　一九八ノ四

やまのこのはの 四六ノ一
やまのこのはも 六六ノ一
やまのたきつせ 五八ノ一
やまのにしきの 五一ノ八
やまのはならで 一五九ノ二
やまのはにげて 一六〇ノ一
やまのやまびこ 二〇四ノ二
やまはいかでか 四六ノ三
やまほととぎす(いつか) 二五ノ一
やまほととぎす(今ぞ) 二六ノ三
やまよりつきの 一二三ノ三
やまわけごろも 一六六ノ六
やみにこゆれど 七ノ三

ユ

ゆきかとのみぞ 二ノ三
ゆきかふひとの 四六ノ五
ゆきぞふりつつ 一四ノ一
ゆきとのみこそ 二〇ノ二
ゆきとまるをぞ 一七九ノ二
ゆきのまにまに 七三ノ一
ゆきふみわけて 一七五ノ二
ゆきみるべくも 七一ノ二
ゆきめぐりても 七五ノ七
ゆきもわがみも 六一ノ二
ゆくかたのなき 八九ノ一
ゆくへさだめぬ 五一ノ三
ゆくへしられば 一七九ノ三
ゆくへもしらず 一七九ノ四
ゆくへもしらぬ 八一ノ二
ゆたのたゆたに 九六ノ二
ゆふつけどりは 一二三ノ四
ゆふてもたゆく 九六ノ一
ゆめうつつとは 一六六ノ一
ゆめかうつつか 二五ノ五
ゆめぢにさへや 三五ノ三
ゆめぢをさへに 一七六ノ二
ゆめてふものは 一七九ノ二
ゆめといふものぞ 一七九ノ四
ゆめとしりせば 一七〇ノ六
ゆめともしらず 一六六ノ二
ゆめにいくらも 一七〇ノ六
ゆめのうちにも 二一ノ三
ゆめのかよひぢ 一〇一ノ四
ゆめのただぢは 一〇一ノ三
ゆめもさだかに 九七ノ九

ヨ

よきもさかりは 一六〇ノ四
よこなりふせる 二〇三ノ五
よしののかはの(瀧つ瀬) 一二九ノ六
よしののかはの(よしや) 一四五ノ五
よしののさとに 六〇ノ一
よしののやまに(みゆき) 五七ノ四
よしののやまに(雪は) 一ノ三
よしみむひとは 三八ノ六
よせてかへらぬ 一六五ノ三
よそのもみぢを 六六ノ二
よなよななかむ 八四ノ一
よのうきことの 一七一ノ八
よのうきときの(かくれが) 一七一ノ六
よのうきときの(涙) 一六六ノ三
よのうきよりは 一七〇ノ八

よはにやきみが 一八〇ノ三
よはにはるなれや 一六八ノ二
よひよひごとに 一三ノ二
よふかからでは 一九五ノ七
よぶかくこしを 一五ノ二
よぶかくなきて 二七ノ九
よやふけぬらむ 六八ノ一
よるこそまされ 一〇八ノ七
よるさへみよと 五〇ノ三
よるのころもを 一〇〇ノ三
よるのたもとは 一〇六ノ八
よるはこえじと 七三ノ二
よるはすがらに 九七ノ八
よるはほたるの 九九ノ一
よろづよかけて 一六三ノ四
よろづよふとも 二〇四ノ一
よをいまさらに 五五ノ一
よをうぢやまと 一七八ノ四
よをうみべだに 一九ノ二
よをばなしとや 八五ノ五
よをへておつる 一六七ノ四
よをへてみれど 一六六ノ五

ワ

わがおもかげに 一三二ノ一
わがおもふひとに 一三四ノ八
わがおもふひとの 一九四ノ八
わがおもふひとは 七八ノ二
わがこころから 一〇八ノ五
わがこころとや 一六七ノ二
わがごとものや 三五ノ三
わがころもでぞ 一〇二ノ一
わがころもでに 四ノ七
わがころもでの 二七ノ五
わがしたひもの 二九ノ一
わがすむやどに 四〇ノ七
わがたまくらの 一三五ノ四
わがたましひの 一八〇ノ一
わがつらきにや 八四ノ三
わがなげきをば 一〇八ノ三
わがれぬごとや 三五ノ四
わがみひとつの(秋) 三四ノ五
わがみひとつの(ため) 一七一ノ四
わがみひとつは 一三三ノ一
わがみふれば 一三〇ノ一
わがみむなしく 一四四ノ八
わがみもくさに 一五四ノ二
わがみもともに 二〇ノ三
わがみよにふる 二〇ノ四
わがもとゆひに 一三三ノ六
わがものおもひの 九九ノ八
わがやどをしも 二七ノ一〇
わかるとひとに 七〇ノ二
わかれむことを 八三ノ四
わかれをとむる 一七七ノ五
わがゐるやまの 一三九ノ一
わすられがたき 四一ノ四
わすられぬらむ 一三五ノ一
わするることの 一四四ノ四
わするるときも 一三三ノ二
わすれぬものの 一三七ノ二
わたらでやまむ 一二ノ五
わたらぬさきに 三三ノ二

わたらばにしき　五〇ノ五
わたりはてれば　三ノ五
わたるとなしに　一三四ノ二
われうぐひすに　一九ノ四
われうちつけに　二九ノ二
われおちにきと　三九ノ三
われおとらめや　一〇四ノ五
われかとゆきて　三六ノ一
われかひとかと　一七三ノ四
われさへともに　二一ノ三
われてものおもふ　一九七ノ四
われにはひとの　一九五ノ五
われにをしへよ　一四ノ二
われはせきあへず　一〇一ノ二
われやいをれぬ　一三六ノ四
われやはなに　一九ノ三
われやわするる　七〇ノ一
われよのなかに　二七ノ八
われをふるせる　一四五ノ一
われをまつらむ　一三三ノ二

ヲ

をとこやまにし　三九ノ四
をとめのすがた　一五七ノ二
をのへにたてる　一六三ノ五
をのへのしかは　三八ノ二
をばすてやまに　一五八ノ五
をられぬみづに　八ノ二
をりてかざさむ　六ノ八

古今和歌集索引 終

後撰和歌集索引

（上句の頭五言及び下句の頭七言を採り歴史的假名遣により五十音順に排列す）

上句五言

ア

あかからば　二六八ノ一
あかずして　四一三ノ六
あかつきと　三〇〇ノ二
あかつきの　三七三ノ四
あきかぜに（あひ）　二七六ノ二
あきかぜに（いとど）　二七三ノ五
あきかぜに（霧）　二七七ノ二
あきかぜに（草葉）　二五九ノ二
あきかぜに（さそはれ渡る）　二七六ノ五
あきかぜに（さそはれ渡る）　二七七ノ五
あきかぜに（散る）　二八四ノ七
あきかぜに（つら）　二八九ノ一
あきかぜに（波）　二七一ノ六
あきかぜの（うちふき）　二五四ノ一
あきかぜの（うち吹く）　二八一ノ五
あきかぜの（吹きくる）　二五九ノ六
あきかぜの（吹きしく）　二六〇ノ四
あきかぜの（吹く）　二七〇ノ三
あきかぜの（吹けば）　二五八ノ六
あきかぜの（やや）　二六〇ノ一
あきぎりの（立ちし）　二八二ノ二
あきぎりの（たちぬる）　二七八ノ五
あきぎりの（たち野）　二六二ノ一
あきぎりの（はるる）　二七三ノ一
あきくれば（思ふ）　二七一ノ七
あきくれば（川霧）　二五七ノ八
あきごとに　二七八ノ一
あきさむみ　二六〇ノ三
あきちかみ　二五〇ノ六
あきとてや　三六五ノ六
あきのいけ　二七〇ノ四
あきのうみに　二七〇ノ五
あきのたの（いれ）　三〇一ノ五
あきのたの（かりそめ）　二七〇ノ二
あきのたの（かりほの庵の）　二六七ノ一
あきのたの（かりほの庵の）　二六八ノ一
あきのつき（常に）　二七〇ノ七
あきのつき（光）　二八八ノ五
あきののに（いかなる）　二七九ノ三
あきののに（置く白露の）　二六九ノ四
あきののに（置く白露な）　二六九ノ一
あきののに（來宿る）　二五九ノ一〇
あきののに（よる）　二七三ノ八
あきのの（草は）　二六八ノ六
あきのの（草も）　二六九ノ八
あきのの（つゆ）　二六三ノ一
あきのの（錦）　二七九ノ二
あきのよに（雨）　二八四ノ四

あきのよに(雁)　二七七ノ一
あきのよの(草)　三八二ノ五
あきのよの(心)　二五六ノ六
あきのよの(月に)　二七〇ノ三
あきのよの(月のかげ)　二七〇ノ一
あきのよの(月のひかり)　二七〇ノ六
あきのよの(ながき)　二五八ノ三
あきのよは　二七二ノ三
あきのよを(徒に)　二六五ノ六
あきのよを(まどろまず)　二六七ノ二
あきはぎの(色づく)　二六七ノ七
あきはぎの(えだ)　二六八ノ三
あきはぎを(色どる風の)　二五四ノ三
あきはぎを(色どる風は)　二五四ノ四
あきはてて(八時雨)　二九一ノ六
あきはてて(我が身)　二九二ノ一
あきふかく　四八四ノ三
あきふかみ　二八七ノ一
あきやまに　四九一ノ二
あけくらし　二六一ノ二
あけてだに　四二八ノ二
あさごとに(置く)　二六九ノ七
あさごとに(露は)　四一三ノ五
あさごとに(見し)　四六六ノ三
あさしてふ　三〇五ノ一
あさぢふの　三二二ノ六
あさとあけて　二五八ノ五
あさなけに　四四五ノ二
あさぼらけ　二三七ノ一
あさりする　二九一ノ四
あしがらの　四九九ノ五
あしたづの(雲井)　三五〇ノ三
あしたづの(澤邊)　三五〇ノ二
あしのうらの　四六八ノ四
あしびきの(山下しげく)　三八ノ一
あしびきの(山下しげく)　三九〇ノ三
あしびきの(山下とよみ)　四七五ノ六
あしびきの(山下水の)　二四四ノ一
あしびきの(山下水は)　三六二ノ三
あしびきの(山田)　四三ノ五
あしびきの(山に生ひ)　三六六ノ三
あしびきの(山に生ふ)　二八四ノ八
あしびきの(山の紅葉)　四七二ノ二
あしびきの(山のやどり)　二八一ノ一
あしびきの(山のやまもり)　三三ノ四
あしびきの(やまひ)　二四七ノ二
あしびきの(山ほととぎす)　四〇七ノ三
あすかがは(こころ)　三五〇ノ一
あすかがは(せきてとどむ)　四一八ノ一
あすかがは(せきてとどむ)　四六七ノ四
あすかがは(淵瀬)　四六〇ノ四
あすかがは(わが身)　二八一ノ七
あだなりと　三〇六ノ五
あだにこそ　四七七ノ二
あだびとの　四五二ノ二
あだびとも　二三一ノ二
あたらよの　三五一ノ三
あぢきなく　二八〇ノ三
あづさゆみ　三四五ノ五
あづまぢに　三三ノ一
あづまぢの(佐野)　三〇〇ノ一
あづまぢの(さや)　三三四ノ三
あとみれば

あなこひし　三四七ノ四
あはざりし　三一〇ノ七
あはでのみ　三八四ノ二
あはぬまは　四四二ノ四
あはれてふ(ことこそ)　四四六ノ三
あはれてふ(事にしろし)　四七〇ノ三
あはれてふ(ことに慰む)　四四九ノ六
あはれとも　四四九ノ五
あひおもはで　三三一ノ四
あひにあひて　四七〇ノ二
あひみしも　二四二ノ一
あひみては　三五九ノ一
あひみても(つつむ)　三五八ノ二
あひみても(別る)　三四五ノ一
あひもみず　三一三ノ四
あぶくまの　三一八ノ三
あふことの(かた糸)　三〇八ノ四
あふことの(かたふたがり)　三六四ノ三
あふことの(かたみ)　四六九ノ六
あふことの(今宵)　二五七ノ一
あふことの(年ざり)　四五二ノ一
あふことの(ひた野)　三六八ノ四
あふことの(よよ)　三三一ノ五
あふことは(いとど)　三〇五ノ四
あふことは(棚機女に)　二五五ノ一
あふことは(遠山)　三三三ノ一
あふことを(いざ)　三四四ノ五
あふことを(よどに)　四〇三ノ一
あふごなき　四一三ノ四
あふさかの(木の)　三四四ノ一
あふさかの(せき)　三七三ノ一
あふさかの(ゆふつげ)　二四四ノ二
あふとだに　三六五ノ四
あふどみし　二四五ノ一
あふばかり　四〇八ノ三
あふみぢを　三五七ノ一
あふみてふ　三七二ノ四
あまぐもに　三三四ノ六
あまぐもの(うき)　四三八ノ二
あまぐもの(はるる)　三六四ノ二
あまのがは(岩)　二五七ノ四
あまのがは(かり)　二七八ノ四
あまのがは(こひ)　三六八ノ一
あまのがは(しがらみ)　二七一ノ五
あまのがは(せぜの)　二五七ノ七
あまのがは(とほき)　二五七ノ三
あまのがは(流れて戀ひば)　二五六ノ四
あまのがは(流れて戀ふる)　二五七ノ六
あまのがは(冬)　二九七ノ八
あまのがは(水)　二五〇ノ八
あまのがは(わたらむ)　二五五ノ二
あまのすむ　四二四ノ一
あまのとを　三二一ノ三
あまりさへ　二三七ノ六
あめふりて　一五五ノ三
あめふれど　三九八ノ三
あめやまぬ　三二二ノ七
あやしくも　三八八ノ四
あらかりし　三四八ノ四
あらたまの(とし越え)　五〇〇ノ五
あらたまの(年の)　三九八ノ一
あらたまの(年は)　四一九ノ四
あらたまの(年も)　三五六ノ四

あらたまの(年を)　二九七ノ二
あられふる　二九四ノ八
ありしだに　三九四ノ一
ありときく　四六八ノ三
ありとだに　四〇〇ノ一
ありとのみ　二四二ノ二
あをやぎの(いとつれ)　二三三ノ一
あをやぎの(いとより)　二三一ノ三

イ

いかでかく　三〇九ノ四
いかでかの　四三〇ノ一
いかでなほ(笠取山)　四八二ノ一
いかでなほ(人に)　二四三ノ二
いかなりし　四四二ノ五
いかにして(かく)　三九五ノ五
いかにして(こと)　四〇九ノ一
いかにせむ　二四九ノ一
いくきとも　二八一ノ四
いくたびか　三〇五ノ二
いくちばた　二八三ノ六
いくよへて　二六九ノ九
いけみづの　三八〇ノ一
いさやまだ　三九六ノ三
いさりびの　三三三ノ三
いせのあまと　三八四ノ五
いせのうみに(遊ぶ)　三八一ノ一
いせのうみに(しほ)　三四八ノ一
いせのうみに(年へて)　四七二ノ一
いせのうみに(はへて)　三二三ノ一
いせのうみの(網)　三八六ノ三
いせのうみの(千尋)　三八八ノ四
いせのうみの(つり)　四三三ノ二
いせわたる　四六七ノ二
いそのかみ(ふる野の)　二七九ノ一
いそのかみ(ふるの山邊)　二九八ノ三
いたづらに(今日)　四九八ノ四
いたづらに(立ち)　三七八ノ四
いたづらに(度々)　三九九ノ四
いたづらに(露)　三九九ノ五
いづかたに(言傳)　四八〇ノ二
いづかたに(立ち)　三四九ノ一
いづかたに(夜は)　二九〇ノ三
いづくとて　四六六ノ二
いづこにも　二二三ノ五
いづこにも　四五九ノ四
いつしかと(まつち)　四六七ノ一
いつしかと(山の)　二九八ノ六
いつしかの(我が)　三〇三ノ四
いつしかの　三七六ノ二
いつとても　二七一ノ一
いつのまに(霞)　二二三ノ一
いつのまに(戀し)　三四五ノ二
いつのまに(散り)　二三七ノ三
いつのまに(降り)　四六一ノ三
いつまでの　三八二ノ三
いづれをか(雨と)　四三六ノ三
いづれをか(わきて)　二七九ノ四
いでしより　三三六ノ二
いとかくて　三七八ノ四
いとせめて　四八〇ノ二
いとどしく(過ぎ行く)　四八七ノ三
いとどしく(物思ふ)　三五三ノ四
いとはるる　四二九ノ四
いとはれて　四一七ノ五
いなせとも　三九〇ノ五
いにしへの(心)　四〇五ノ二
いにしへの(野中)　三六四ノ一
いにしへも(今も)　四〇五ノ三
いにしへも(契り)　四三〇ノ四
いのりける　三二三ノ八
いはせやま　三二〇ノ一
いはでおもふ　三三五ノ一
いはねども　三七四ノ二
いはのうへに　四五一ノ一
いはふこと　四九六ノ一
いひさして　四〇八ノ一
いひそめし　二四二ノ四
いふからに　三八三ノ一
いふことの　四五四ノ二
いまこむと　四六八ノ一
いまさらに(思ひ)　三五七ノ四
いまさらに(我は)　四六二ノ一
いまぞしる　三二一ノ一
いまのみと　三〇五ノ六
いまはてふ　三三三ノ一
いまはとて(あき)　四七六ノ一
いまはとて(うつり)　三七一ノ五
いまはとて(楢に)　三六一ノ五
いまはとて(立ち)　四七九ノ三
いまはとて(行き)　三五五ノ三
いまははや(うちとけ)　二六四ノ四
いまははや(みやま)　三九五ノ五
いままでに　三二一ノ一
いままでも　三八七ノ五
いまよりは　三三三ノ一
いもがいへの　二七九ノ九
いもがひも　二四七ノ四
いろかへぬ　二四九ノ七
いろといへば　三三三ノ三
いろならば　三三三ノ二
いろにいでて　三二四ノ一
いろふかく(染めし)　三六二ノ二
いろふかく(匂ひし)　三〇五ノ六

ウ

うきことの　四一五ノ二
うきことを　四六九ノ五
うきしづみ　四一〇ノ三
うきながら　四七二ノ五
うきものと　二四一ノ二
うきよとは　四〇三ノ三
うぐひすに　二三〇ノ四
うぐひすの(糸)　二三七ノ二
うぐひすの(雲井)　三三〇ノ一
うぐひすの(鳴きつる)　二二五ノ八
うぐひすの(鳴くなる)　二二六ノ一
うけれども　四五三ノ三
うたたねの(床)　四七三ノ一
うたたねの(夢)　三八二ノ四
うだのの　四二三ノ一
うぢがはの　四三七ノ二
うちかへし(君ぞ)　三〇一ノ四
うちかへし(見まく)　三六〇ノ二
うちすてて　四七八ノ四

うちつけに　二五三ノ二
うちはへて(かげと)　二七九ノ七
うちはへて(音を)　二四八ノ四
うちはへて(春は)　二三八ノ四
うちむれて　二八四ノ二
うちやまの　二九〇ノ一
うちよする　四九三ノ四
うちわたし　三一ノ四
うちわびて　三九七ノ四
うつせみの(聲)　二四八ノ七
うつせみの(むなし)　三八二ノ二
うつつにぞ　三三五ノ四
うつつにて　三四一ノ二
うつつには　三八八ノ二
うつつにも(あらぬ)　三七七ノ四
うつつにも(はかなき)　三三五ノ六
うつつにも(はかなき)　三三八ノ四
うつろはぬ(心の)　四四一ノ三
うつろはぬ(名)　四七一ノ一
うとまるる　二四五ノ二
うのはなの　二四〇ノ二
うばたまの　四三一ノ四
うへにのみ　四〇二ノ一
うみとのみ　四三六ノ二
うめがえに　二九八ノ五
うめのはな(いまは)　二六六ノ三
うめのはな(香を)　二二五ノ四
うめのはな(散る)　二二六ノ五
うめのはな(外ながら)　二二四ノ八
うめのはな(なれば)　二二五ノ一
うらちかく　二六二ノ三
うらみても　三三九ノ一
うらむとも(かけて)　四〇四ノ二
うらむとも(懸ふ)　四〇四ノ一
うらむれど　二四一ノ一
うらめしき　三〇九ノ二
うらわかず　四九二ノ二
うれしきも　四四九ノ二
うれしげに　三一〇ノ二
うゑおきし　五〇一ノ五
うゑしとき(契り)　四六二ノ四
うゑしとき(花)　二九ノ一
うゑたてて　二六三ノ六
うゑてみる　三〇九ノ一

エ

えだもなく　三七〇ノ一
えだもはも　二六八ノ三

オ

おきあかす　二六四ノ三
おきてゆく　三七三ノ五
おきどころ　四一五ノ四
おきなさび　四三〇ノ二
おくからに　二六九ノ二
おくしもの　二八六ノ一
おくつゆの　三三七ノ三
おくれずぞ　四八六ノ一
おさへつつ　四八六ノ四
おしなべて(峰)　四六四ノ三
おしなべて(雪)　二九七ノ九
おそくとく　二八〇ノ五
おとにきく　四二五ノ一
おとにのみ(聞きこし)　三三一ノ六
おとにのみ(聞きて)　四四三ノ二
おとにのみ(聲を)　三六五ノ五
おともせず　四一三ノ一
おなじくば　三七二ノ一
おほあらきの　四四六ノ二
おほかたに　二六六ノ一
おほかたの　二八六ノ四
おほかたは(瀬と)　三九五ノ一
おほかたは(なぞや)　三三四ノ一
おほかたも　二六三ノ四
おほしまに　三六六ノ五
おほぞらに(おほふ)　三三三ノ四
おほぞらに(ゆき)　四五七ノ四
おほぞらに(我が)　二六九ノ六
おほはらや　四九三ノ三
おぼろけの　三八一ノ二
おほゐがは　四六〇ノ三
おもかげを　四五四ノ三
おもはむと(頼めし事)　三九ノ三
おもはむと(頼めし人)　三三〇ノ二
おもはむと(頼めし人)　三三九ノ三
おもはむと(われを)　三八七ノ四
おもひいづる　四四九ノ四
おもひいでて(おとづれ)　三七七ノ二
おもひいでて(きつる)　四七六ノ二
おもひいでて(とふ言の葉)　四四〇ノ三
おもひいでて(とふに)　二八九ノ五
おもひがは　三〇二ノ三
おもひきや(逢ひ)　三〇二ノ五
おもひきや(君が)　四三〇ノ三
おもひだに　三〇二ノ五
おもひつつ(業なくに)　二九七ノ一
おもひつつ(經にける)　四〇九ノ二
おもひつつ(まだ)　四〇七ノ二
おもひでの　四九九ノ二
おもひには(きゆる)　四三六ノ四
おもひには(我こそ)　三五六ノ三
おもひれの(夢)　三七六ノ一
おもひれの(よなよな)　三五三ノ一
おもひやる(方も)　四七三ノ三
おもひやる(心に)　三三二ノ五
おもひやる(心ばかり)　四七七ノ三
おもひやる(心はつれに)　三〇二ノ三
おもひわび　三九四ノ二
おもふてふ(ことこそ)　三八七ノ三
おもふてふ(言の葉)　三八七ノ二
おもふてふ(事を)　三四七ノ三
おもふとは　三〇八ノ五
おもふひと(ありて)　四九〇ノ四
おもふひと(おもはぬ)　三二ノ五
おもへども　三二ノ五

カ

かがみやま(あけて)　三六九ノ四
かがみやま(やま)　二八二ノ三
かかりける　三一九ノ四
かがりびに　三七五ノ一
かきくらし(霰)　二九四ノ四
かきくらし(雪)　二二五ノ六
かきごしに　二二七ノ二
かぎりなき(おもひ)　四二三ノ三
かぎりなき(名に)　二三六ノ一

かぎりなく(思ひ)　三七七ノ五
かぎりなく(思ふ)　四四〇ノ二
かくこふる　三二三ノ三
かくてのみ　四三六ノ一
かくながら　三三九ノ二
かくばかり(常なき)　三三〇ノ二
かくばかり(深き)　三九六ノ二
かくばかり(もみづる)　二八〇ノ六
かくばかり(わかれ)　四六九ノ三
かくれぬに(しのび)　三八ノ二
かくれぬに(すむ)　三五四ノ四
かくれぬて　四四〇ノ五
かげだにも　三〇四ノ四
かけていへば　四三九ノ三
かけてだに　五〇四ノ三
かげにだに　三六二ノ二
かげみれば(いとど)　三八五ノ二
かげみれば(おく〳〵)　四一二ノ四
かげろふに　三三八ノ一
かげろふの　三七三ノ二
かささぎの　三五〇ノ五
かたときも　三三三ノ四
かつきえて　二九四ノ六
かづきてし　四四〇ノ一
かつらぎや(久米路に)　四〇〇ノ五
かつらぎや(くめぢの)　三五四ノ三
かなしきも　四五三ノ四
かなしさの　五〇四ノ二
かれてより　四八六ノ三
かはとのみ　四〇二ノ二
かばとみて　三三四ノ五
かひもなき　四七三ノ二
かへりくる　四五七ノ三
かへりけむ　三三二ノ三
かへりては　四四八ノ一
かへるかり　三一ノ五
かへるべき　三七九ノ四
かみさびて　二三四ノ一
かみなづき(かぎり)　二九三ノ二
かみなづき(しぐるる)　二九四ノ五
かみなづき(しぐれと)　二九二ノ三
かみなづき(時雨ばかりは)　三九二ノ二
かみなづき(時雨ばかりな)　二九二ノ五
かみなづき(時雨ふる)　二九四ノ一
かみなづき(ふりみ)　二九一ノ三
かもがはの　二五一ノ五
からころも(かけて)　三四八ノ三
からころも(きて)　三〇四ノ三
からころも(そで)　二六九ノ五
からころも(龍田の山)　二八〇ノ七
からころも(龍田の山)　二八一ノ三
からころも(たつ日)　四八〇ノ三
からころも(たつを)　三四三ノ一
からにしき(たつた)　二八一ノ二
からにしき(をしき)　三三四ノ二
かりがねの(雲井)　三五五ノ二
かりがねの(鳴き)　二七七ノ四
かりなきて　二八〇ノ一
かりびとの　四〇六ノ三
かれずとも　三三七ノ四
かれはつる　三〇六ノ四

キ

きえかへり　二七三ノ一
きえずのみ　四〇一ノ五
きえはてて　三〇三ノ四
きくにだに　五〇一ノ四
きくのうへに　二八二ノ六
きくのはな(うつる)　三七一ノ四
きくのはな(なが月)　二八三ノ一
きくひとも　四九八ノ三
きしもなく　三五一ノ四
きてかへる　三九三ノ三
きてみべき　二二四ノ四
きのくにの　四五八ノ一
きのふまで　五〇〇ノ四
きのふみし　二三六ノ四
きのもとに　二八四ノ六
きみがあたり　三八七ノ一
きみがいにし　五〇三ノ一
きみがため(祝ふ)　四九四ノ三
きみがため(うつし)　四九五ノ三
きみがため(松の)　四九三ノ五
きみがため(山田)　二二六ノ二
きみがてを　四七九ノ二
きみがなの　三七八ノ一
きみがれに　三七四ノ三
きみがゆく　四八二ノ三
きみがよは　四八五ノ六
きみこずて　二三八ノ二
きみこふと　三一〇ノ六
きみこふる　二八七ノ三
きみとわれ　二八〇ノ四
きみにだに　二三八ノ四
きみにより　三一〇ノ一〇
きみのみや　二一〇ノ四
きみまさで　五〇二ノ一
きみみずて　三七〇ノ四
きみみよと　二三三ノ六
きみをおもふ(心ながさ)　二六九ノ三
きみをもふ(心を)　三四四ノ二
きみをおもふ(深さ)　三〇九ノ三
きみをのみ(いつはた)　四八四ノ二

かぎすとも　四五七ノ二
かぎせども　三三九ノ三
かさとりの　四八二ノ二
かすがのに　二二二ノ一
かすがのの　三三九ノ四
かすしらず　二八二ノ四
かずしらぬ　四一五ノ三
かずならぬ(身に)　四四四ノ一
かずならぬ(身の)　四六八ノ二
かずならぬ(身は浮草)　三九九ノ二
かずならぬ(身は山)　三九七ノ一
かずならぬ(みやま)　三〇八ノ三
かずならぬ(身な)　四四三ノ四
かずならぬ(わが)　二四六ノ一
かすみたつ　二一ノ一
かぜしもに　四六〇ノ一
かぜにしも　三三ノ二
かぜのおとの　二六ノ二
かぜふけば　四七五ノ三
かぜをいたみ　三七四ノ一
かぜをだに　三七ノ五

きみをのみ(しのぶ)　四八三ノ一
きよけれど　三四四ノ四

ク

くさのいとに　二六一ノ四
くさまくら(このたび)　三三六ノ一
くさまくら(旅と)　四八九ノ二
くさまくら(紅葉)　四九〇ノ三
くさまくら(ゆふ手)　四九一ノ一
くもぢをも　四七一ノ五
くもわくる　四九二ノ二
くもゐぢの　四三八ノ一
くもゐにて　三二二ノ五
くやくやと　三〇一ノ二
くやしくぞ　四二七ノ二
くることは　四〇四ノ五
くれてまた　二三九ノ四
くれなゐに(色なば)　二二七ノ四
くれなゐに(袖を)　三六三ノ三
くれなゐに(涙うつる)　三六三ノ四
くれなゐに(涙し)　三六三ノ五

くれぬとて　三三ノ四
くれはてば　二六六ノ四
くれはとり　三四一ノ三
くろかみと　二九五ノ四
くろかみの(色)　二九五ノ三
くろかみの(白く)　二九四ノ七

ケ

けさのあらし　三三ノ一
けふさくら　四九八ノ二
けふすぎば　二九七ノ七
けふそくを　二九九ノ五
けふそへに　三四三ノ五
けふよりは(夏)　三六四ノ五
けふよりは(萩)　三九一ノ一
けふよりや　四三ノ一

コ

こえぬてふ　四九ノ三
こがくれて(さ月)　二四二ノ三
こがくれて(たぎつ)　三七三ノ三

こがらしの　三二ノ一
こころよを　四九八ノ二
こころあてに　二九七ノ七
こころありて　二九九ノ五
こころから　三五五ノ四
こころして　四三七ノ四
こころなき(身は草木)　四七一ノ三
こころなき(身は草葉)　二六五ノ二
こころみに　三二九ノ三
こころもて(おふる)　二六一ノ三
こころもて(をるかは)　二二五ノ二
こささまざる　三六四ノ五
こずやあらむ　三九一ノ一
ことしげし　四三二ノ一
ことしより　四九二ノ三
ことならば　二二四ノ五
ことのねも　四九三ノ一
ことのはの　四二六ノ一
ことのはは　三六六ノ三
ことのはも(なくて)　四六三ノ二
ことのはも(みな)　三六七ノ六

こぬひとを　三七一ノ三
このごろは　二四三ノ二
このたびも　四七八ノ三
このつきの　二九八ノ二
このはちる　二八五ノ五
このみゆき　四二四ノ三
このめはる　三〇七ノ二
こひこひて　二五六ノ二
こひしきに　三四三ノ三
こひしきも　三四三ノ五
こひしくば(かげを)　三八五ノ一
こひしくば(ことづて)　四八〇ノ四
こひしさは　三三一ノ三
こひしとは　三三八ノ二
こひてぬる　三七四ノ四
こひてへむ　二六五ノ二
こひのごと　三二三ノ五
こひわびて　四二二ノ三
こひをのみ　三二〇ノ九
こふるまに　五〇五ノ一
こふれども　四一七ノ二

こほりこそ　二六六ノ四
こまにこそ　三九九ノ四
こむといひし(月日)　三〇六ノ六
こむといひし(程)　二五九ノ八
こむといひて　四八五ノ二
こよひかく　二五一ノ四
こりずまの　三六一ノ二
これはかく　三三〇ノ四
これやこの　四三五ノ四
これをみよ　二六三ノ五
ころもでは　二四三ノ五
ころをへて　二四八ノ二
こゑたてて　四八五ノ三
こゑにたてて　二三六ノ三

サ

さがのやま　四一六ノ三
さきさかず　二六八ノ五
さくらいろに　四一六ノ二
さくらばな(色は)　二六七ノ三
さくらばな(けふ)　四六一ノ一

さくらばな(匂ふ)　二三〇ノ六
さくらばな(ぬしを)　三三一ノ二
ささがにの　四七五ノ二
ささらなみ　二八八ノ三
さしてこと　三二五ノ四
さだめなく　四一〇ノ五
さてもなほ　三三〇ノ三
さとごとに　三〇八ノ二
さみだれに(ながめ)　二四六ノ四
さみだれに(ぬれにし)　二六三ノ三
さみだれに(春の)　二四三ノ五
さみだれの　二四八ノ二
さらばよと　四八五ノ三
さをさせど　二三六ノ三
さをしかの(壁)　四一六ノ三
さをしかの(たち)　二六八ノ五
さをしかの(つま)　四一六ノ二

シ

しぐれふり　二六七ノ三
したにのみ　四六一ノ一

したひもの　三三八ノ三
しづくもて　二八八ノ四
しづはたに(思ひ)　三八三ノ三
しづはたに(へつる)　四〇四ノ三
しでのやま　四四三ノ三
しなのなる　四七八ノ二
しぬしぬと　三四〇ノ一
しののめに　三四三ノ四
しのびかれ　二三五ノ二
しひてゆく　三九一ノ二
しほといへば　四二五ノ三
しほのまに　三五一ノ二
しほみたぬ　三〇四ノ二
しまがくれ　四五五ノ一
しもおかぬ　三八六ノ二
しもがれの　二九六ノ三
しらがしの　四五四ノ一
しらかはの(瀧のいとなみ)　四三ノ四
しらかはの(瀧のいと見ま)　四三ノ三
しらくもと　二三四ノ四
しらくもの(うへしる)　二二〇ノ一
しらくもの(おりゐる)　二九七ノ四
しらくもの(きやどる)　四六三ノ四
しらくもの(みな)　四〇一ノ二
しらくもの(行く)　四一七ノ七
しらざりし　四一二ノ五
しらたまの　二六九ノ三
しらたまを　二四ノ一
しらつゆに　二六八ノ七
しらつゆの(うへは)　二六五ノ一
しらつゆの(おかまく)　二六七ノ六
しらつゆの(おきて)　三六六ノ二
しらつゆの(おくに)　二六六ノ三
しらつゆの(かはる)　二六三ノ五
しらなみの(うち)　三六六ノ四
しらなみの(たち)　四四三ノ一
しらなみの(よする)　三三一ノ二
しらなみの(よるよる)　三六ノ一
しらやまに　二九五ノ一
しらゆきの(けさ)　四一八ノ四
しらゆきの(つもる)　四一九ノ一
しらゆきの(ふり)　二九六ノ七
しられじな　四〇八ノ二
しろしなき(思と)　四〇七ノ五
しろしなき(思や)　三三六ノ二
しろたへに　二四一ノ四
しろたへの　二七三ノ五

ス

すがはらや(伏見の暮に)　四六三ノ一
すがはらや(伏見の里)　四〇九ノ四
すぎにける　五〇二ノ二
すずかやま　三四三ノ一
すずむしに　四七三ノ四
すみぞめの(くらま)　三六七ノ二
すみぞめの(こき)　五〇〇ノ三
すみのえの(なみ)　三三五ノ一
すみのえの(まつ)　三三九ノ二
すみのえの(めに)　三六五ノ一
すみよしの(きじとも)　四二五ノ四
すみよしの(岸に)　三六四ノ六
すみよしの(岸の)　三一〇ノ五
すみよしの(わが身)　三一五ノ五
すみわびぬ　四三三ノ四

セ

せきこえて　三六一ノ三
せきこゆる　二九九ノ一
せきもあへず(涙)　四一六ノ四
せきもあへず(淵)　三九三ノ一
せきもりの　四〇〇ノ二
せきやまの　三七七ノ一
せなはやみ　四一七ノ一

ソ

そでかわく　五〇二ノ三
そでにうつる　二七〇ノ二
そでぬれて　四八二ノ四
そへてやる　四八二ノ六
そむかれぬ　四八一ノ一
そらしらぬ　三四二ノ三
そらとほみ　二七一ノ三

タ

たえたりし　四〇五ノ四
たえぬとも　三九三ノ四
たえぬると　三七八ノ二
たえはつる　三二一ノ三
たかさごの(まつと)　三七三ノ六
たかさごの(まつを)　三六七ノ四
たかさごの(みれの)　三二七ノ三
たがために　三九二ノ四
たきつせに　四六一ノ二
たきつせの(うづまき)　四六二ノ二
たきつせの(早からぬ)　四五六ノ三
たぐひなき　二五六ノ三
たけちかく　二九ノ二
ただちとも　四四二ノ三
たちかへり　四八二ノ四
たちさわぐ　三〇五ノ三
たちよらば　四三九ノ五
たつたがは(秋に)　三三三ノ四
たつたがは(秋は)　二八五ノ一
たつたがは(色)　二八五ノ三
たつたがは(たちなば)　二八四ノ一〇
たちよらぬ　四二一ノ四
たちよりて　四〇五ノ四
たちわたる　三九三ノ四
たとへくる　三七八ノ二
たなばたに　三二一ノ三
たなばたの(あま)　三七三ノ六
たなばたの(歸る)　三六七ノ四
たなばたの(年)　三二七ノ三
たなばたは　三九二ノ四
たなばたも　四六一ノ二
たにさむみ　四六二ノ二
たればあれど　四五六ノ三
たれもなき　二五六ノ三
たのまれぬ　二九ノ二
たのむきも　四四二ノ三
たのめこし　四三ノ二
たのめつつ　三〇五ノ三
たびれして　四三九ノ五
たまえこぐ　三三三ノ四
たまかづら(葛城山)　二八五ノ一
たまかづら(たえぬ)　二八五ノ三

たまかづら(頼め)　四〇五ノ一
たまくしげ(明け)　二四五ノ六
たまくしげ(二年)　四三三ノ二
たまだれの　四四一ノ四
たまつしま　三五五ノ三
たまのをの　三三六ノ三
たまもかる　三六〇ノ四
たむけせぬ　三三九ノ一
たよりにも　三三四ノ四
たらちめは　四六二ノ三
たれきけと(聲)　二七九ノ六
たれきけと(鳴く)　二七七ノ六
たれとなく(おぼろに)　三四六ノ四
たれとなく(かかる)　三四六ノ三

チ

ちかけれど　三六一ノ四
ちかはれし　四三五ノ三
ちかひても　三七九ノ二
ちぎりけむ　二五六ノ七
ちはやぶる(神垣山)　二九三ノ三
ちはやぶる(神無月)　二九四ノ九
ちはやぶる(神にもあらぬ)　四一〇ノ一
ちはやぶる(神にも何か)　四一〇ノ二
ちはやぶる(神ひきかけて)　三五六ノ二
ちはやぶる(神も耳こそ)　三三八ノ六
ちよふべき　三三六ノ三
ちよへむと　三五八ノ四
ちりにたつ　四六九ノ四
ちりぬべき　三三七ノ一
ちることの　三三七ノ四
ちるとみて　四六二ノ三

ツ

つきかげは　二七九ノ六
つきかへて　二七七ノ六
つきにだに　三四六ノ四
つきひをも　三四六ノ三
つきもせず　二四八ノ五
つくしなる　三八五ノ五
つくばねの　三八ノ一
つつめども　二四七ノ六
つれもなき　三八ノ六
つれよりも(おきう)　三五ノ四
つれよりも(のどけ)　三三ノ三
つれよりも(春)　三九八ノ五
つれよりも(惑ふ)　三五五ノ四
つのくにの　三三七ノ二
つまにおふる　三五四ノ二
つゆかけし　二八二ノ五
つゆだにも　二六六ノ二
つゆならぬ　四〇六ノ二
つゆのいのち　三九八ノ四
つゆばかり　三四六ノ一
つらからぬ　三一四ノ六
つらからば　三四九ノ二
つらきをも　三三三ノ三
つらくとも　三〇八ノ一
つらしとも(いかが)　三八ノ三
つらしとも(おもひ)　三八一ノ三
つらしとや　二四七ノ三
つれづれと　三五七ノ三
つれなきを　二九六ノ一
つれもなき　二九五ノ二
つれよりも(おきう)　二九八ノ七
つれよりも(のどけ)　二九六ノ二
つれよりも(春)　四五七ノ一
つれよりも(惑ふ)　四八三ノ二
つのくにの　三九一ノ三
つまにおふる　四三八ノ五
つゆかけし　三三五ノ二
つゆだにも　二八七ノ二
つゆならぬ　四一四ノ五
つゆのいのち　四〇六ノ一
つゆばかり　三八八ノ五
つらからぬ　三〇九ノ五
つらからば　三八一ノ二
つらきをも　二三八ノ三
つらくとも　四四二ノ二
つらしとも(いかが)　二九〇ノ二
つらしとも(おもひ)　三七〇ノ五
つらしとや　三七一ノ六
つれづれと　二八八ノ三
つれなきを　四〇一ノ一
つれもなき　三四五ノ六

テ

てるつきの(秋しも)　二八七ノ四
てるつきの(流るる)　四九〇ノ二
てるつきを　四三三ノ二

ト

ときしもあれ　三三三ノ四
ときのまの　三五五ノ二
ときのまも　五〇四ノ一
ときはなる　三四六ノ二
ときはにと　三六四ノ四
ときわかず(月)　二四一ノ五
ときわかず(ふれる)　二四一ノ三
ときわかぬ　三六七ノ五
とこなつに(思ひ)　二四九ノ六
とこなつに(なきても)　二四六ノ二
とこなつの　二四九ノ五
としくれつ　二九八ノ八
としごとに(雲路)　二七八ノ三
としごとに(しらが)　二九六ノ一
としのかず　四九五ノ二
としふかく　二九八ノ七
としふれば　二九六ノ二
としをへて(あひみる)　四五七ノ一
としをへて(生ける)　四八三ノ二
としをへて(頼む)　四三八ノ三
としをへて(濁り)　三三五ノ二
としをへて(花)　二八七ノ二
とふことの　四一四ノ五
とふことを　四〇六ノ一
とふやとて　三八八ノ五
ともかくも　三〇九ノ五
ともすれば　四八一ノ二
ともどもに　二三八ノ三
ともにこそ　四四二ノ二
とりもあへず

ナ

なかたえて　四〇一ノ一
ながつきの　二九〇ノ二
なかなかに　三七〇ノ五
ながめして　三七一ノ六
ながめつつ　三九二ノ一
ながらへて　三二六ノ二
ながらへば(人の心も)　三八一ノ四
ながらへば(人の心も)　四六四ノ一
ながれいづる　三九八ノ二
ながれてと　三三八ノ四
ながれての　四三一ノ三
ながれては　三三五ノ五
ながれゆく　二九七ノ五
ながれよる　三六八ノ三
なきたむる　三二二ノ三
なきながす　三五二ノ三
なき名ぞと　三四四ノ三
なきひとの(かげ)　五〇〇ノ一
なきひとの(共に)　五〇四ノ五
なきわびぬ　二四一ノ六
なくこゑに　五〇四ノ四
なぐさむる　四一ノ二

なくなみだ　四九八ノ五
なげきさへ　二三二ノ五
なげけども　三七一ノ二
なつごろも　四〇八ノ四
なつのよに　二四七ノ六
なつのよの　二五〇ノ四
なつのよは　二四四ノ二
なつむしの（しろしろ）　三九七ノ三
なつむしの（身な）　二五一ノ三
なでしこの　二五〇ノ二
なでしこは　二五〇ノ一
などさらに　二八一ノ六
などわがみ　二八七ノ五
なにごとな　三二八ノ五
なにしおはば（あだ）　四八七ノ二
なにしおはば（逢坂山）　三三八ノ一
なにしおへば（しひて）　二七三ノ六
なにしおへば（長月）　二八三ノ二
なにせむに　四二六ノ三
なにたてて　四七五ノ四
なににかは　三七九ノ一
なににきく　二八三ノ四
なにはがた（かりつむ）　三三三ノ一
なにはがた（なにに）　四二八ノ一
なにはがた（みぎは）、　四四四ノ二
なにはづな　四六三ノ三
なにはめに　三七九ノ三
なのみして　三五四ノ二
なびくかた　三八四ノ三
なほききに　四四一ノ二
なほざりに（秋の）　二八三ノ七
なほざりに（折り）　二二三ノ二
なみかずに　四五四ノ五
なみだがは（いかなる）　三七九ノ五
なみだがは（ながす）　三五三ノ六
なみだがは（身なく）　二九八ノ二
なみださへ　二九三ノ五
なみたてる　四九五ノ五
なみだにも　三三六ノ一
なみだのみ　四七〇ノ一
なみにのみ　四五八ノ二
なみのうへに　三六八ノ二
なみわけて　二八五ノ四
ならのはの　四四七ノ三
なるとより　三三七ノ二

ニ

にくからぬ　三九四ノ五
にごりゆく　四〇九ノ三
にはかにも　二五三ノ一
にほひこき　二二三ノ三
にほひつつ　二四三ノ四

ヌ

ぬきとむる　二七二ノ四
ぬきとめぬ　四五四ノ四
ぬれつつも　三九九ノ一

ネ

ねにたてて　五〇一ノ一
ねになけば　三八四ノ四
ねぬゆめに　四九九ノ一

ねられぬを　二二四ノ五

ハ

はかなかる　三七五ノ三
はかなくて（同じ）　三二五ノ二
はかなくて（絶え）　四三七ノ五
はかなくて（世に）　四九七ノ一
はちすばの（うへ）　三八三ノ四
はちすばの（はひ）　四二三ノ一
はつかりの　四八〇ノ一
はつしぐれ（降る程）　二九一ノ二
はつしぐれ（降れば山邊ぞ）　二七九ノ八
はつしぐれ（降れば山邊ぞ）　二九一ノ一
はつせがは　四八七ノ一
はなざかり　四一四ノ四
はなさきて　四八九ノ四
はなしあらば　二三九ノ三
はなすすき（そよとも）　二七六ノ三
はなすすき（ほに出づる）　二六五ノ四
はなすすき（ほに出づる）　三三九ノ一
はなすすき（ほに出て）　二七六ノ四
はなだにも　二二六ノ一
はなとりの　二五一ノ二
はなのいろは（ちらぬ）　二二七ノ三
はなのいろは（昔ながら）　二三二ノ一
はなみにと　二六二ノ二
はなもちり　二五一ノ一
はばそやま　四七四ノ一
はまちどり（かひ）　四二四ノ二
はまちどり（たのむ）　三三六ノ四
はるがすみ（立ちて）　二二四ノ四
はるがすみ（立ちながら）　二三〇ノ二
はるがすみ（たなびき）　二二三ノ四
はるがすみ（はかなく立ち）　三八九ノ二
はるがすみ（はかなく立ち）　四八五ノ四
はるかぜに　二六ノ四
はるくれば（木がくれ）　二二三ノ二
はるくれば（咲くてふ）　二三〇ノ一
はるくれば（花見む）　二二三ノ三
はるごとに（咲き）　二八ノ一
はるごとに（行き）　四三〇ノ二
はるさめの（花の）　二二三ノ一
はるさめの（ふらば）　二二五ノ五
はるさめの（よにふり）　二二四ノ三
はるたちて　二二四ノ二
はるたつと　二〇九ノ二
はるちかく　二九八ノ九
はるのいけの　二二四ノ一
はるののに　二二一ノ二
はるのひの（かげ）　二二九ノ一
はるのひの（ながき）　二二七ノ三
はるのよの　四九六ノ三
はるばるの　四二一ノ二
はるびさす　一三〇ノ三
はるふかき　二二三ノ二
はるやこし　四四五ノ三
はるをだに　三四六ノ五
はるわかみ　三七ノ四

ヒ

ひかりまつ　三〇四ノ一
ひきうゑし　四二九ノ二
ひきまゆの　三七六ノ三

ひぐらしの(聲きくから)　二五九ノ四
ひぐらしの(聲きく山の)　二五九ノ三
ひぐらしの(聲も)　二八六ノ一
ひぐらしの(聲を)　四三五ノ二
ひぐらしの(山路)　四八九ノ一
ひこぼしの　二五六ノ一
ひさしかれ　二三六ノ二
ひさしくも　三三一ノ四
ひたすらに　三六三ノ一
ひたぶるに　三六六ノ六
ひとごころ(あらし)　四七二ノ四
ひとごころ(いさや)　四四一ノ一
ひとごころ(うさ)　二二五ノ三
ひとごころ(たとへ)　四六九ノ一
ひとごとに　四九〇ノ一
ひとごとの(うき)　三八五ノ三
ひとごとの(頼み)　三九二ノ二
ひとごとは　三〇三ノ五
ひとごふる(心)　三〇二ノ一
ひとこふる(涙)　三〇七ノ四
ひとしれず(思ふ)　三二五ノ一
ひとしれず(君に)　四四八ノ二
ひとしれず(まつ)　四六七ノ三
ひとしれず(物思ふ)　二三六ノ五
ひとしれず(我が)　三八二ノ一
ひとしれぬ(身は)　二九一ノ五
ひとしれぬ(我が)　三三四ノ一
ひとすまず　三一七ノ二
ひたすらに　三三五ノ二
ひとづてに　四三二ノ三
ひとづまに　五〇〇ノ二
ひととせに(かさなる)　二四五ノ五
ひととせに(ふたたび)　四三二ノ一
ひとなみに　三九〇ノ二
ひとにつぐ　三一七ノ一
ひとのうへの　四二七ノ一
ひとのおやの　三六七ノ三
ひとのよの　三九四ノ三
ひとはいさ(ことぞ)　四七一ノ二
ひとはいさ(みやま)　三九〇ノ一
ひとはいさ(我は)
ひとはかる
ひとふしに　二九四ノ三
ひとめだに　四二一ノ三
ひとよのみ　三八三ノ二
ひとりぬる(時は)　二四九ノ三
ひとりぬる(人の)　三四五ノ四
ひとりれの　三五二ノ一
ひとりのみ(思へば)　二九三ノ四
ひとりのみ(戀ふれば)　二七八ノ二
ひとりのみ(ながめて)　三三四ノ三
ひとりゆく　三三四ノ五
ひとりゐて　二二九ノ四
ひとわたす　二三二ノ五
ひとなのみ　四一七ノ六
ひとなみて　四四八ノ三
ひろなれや　三二四ノ五
ひをへても　四二七ノ三
　フ
ふえたけの　四九八ノ六
ふかきおもひ　二六五ノ三
ふかくおもひ　三三四ノ二

ふかくのみ　三九二ノ三
ふかみどり(そめけむ)　三九五ノ二
ふかみどり(ときはの)　三九三ノ二
ふきいづる　二七六ノ一
ふくかぜに(ちらす)　三三四八ノ三
ふくかぜに(ふかき)　四八六ノ二
ふくかぜに(まかす)　二九一ノ四
ふくかぜの(さそふ)　四一八ノ三
ふくかぜの(下の)　二九八ノ一〇
ふくかぜは　二九三ノ六
ふくかぜや　二九七ノ一〇
ふくかぜを　二九五ノ二
ふしてぬる　三三三ノ三
ふしなくて　三三五ノ四
ふじのれの　三三二ノ二
ふじのれを　三三五ノ三
ふすからに　四〇七ノ四
ふたごやま　二四六ノ三
ふたこゑと　四七八ノ一
ふたばより　二四四ノ五
ふちぜとも(いさや)　二四七ノ一
ふちぜとも(こころ)　三〇五ノ八
ふちとても　二九七ノ五
ふちながら　二八三ノ三
ふちばかま　二九八ノ三
ふちはぜに　二〇九ノ一
ふれなくば　二一七ノ五
ふゆくれば　二九八ノ一
ふゆなれど　四三二ノ二
ふゆのいけに
ふゆのいけの(鴨の)
ふゆのいけの(水に)
ふりそめて　四三三ノ一
ふりとげぬ　四〇四ノ四
ふりぬとて(痛く)
ふりぬとて(思ひ)
ふりやめば　三〇三ノ七
ふるさとに　三〇三ノ一
ふるさとの(佐保)　二四九ノ二
ふるさとの(奈良)　二四五ノ四
ふるさとの(野邊)　二四〇ノ三
ふるさとの(三笠)　二四〇ノ四
ふるさとの(ゆきは)　三八五ノ四
ふるさとな　二四八ノ一
ふるゆきに
ふるゆきの
ふるゆきは(かつも)
ふるゆきは(きえで)
ふるるみは
　ヘ
へだてつる　二九七ノ五
へつるより　二八三ノ三
　ホ
ほかのせは　二九八ノ一
ほしがてに　二二七ノ五
ほととぎす(曉)　二九八ノ一
ほととぎす(聞けば)　四三二ノ二
ほととぎす(きゐる)
ほととぎす(聲まつ)
ほととぎす(なつき)
ほととぎす(はつか)

ほととぎす(一聲)　二四八ノ三
ほどもなく　五〇三ノ四
ほにはいでぬ　二六一ノ一
ほのみても　三七二ノ三

マ

まこもかる　二九七ノ三
まだきから　四七一ノ六
まだしらぬ　四九六ノ二
またざりし　三六九ノ二
またもこむ　二三九ノ五
まちかくて　四一四ノ一
まちくらす　三七五ノ二
まちわびて　四八五ノ一
まつにくる　二一〇ノ三
まつのねに　二六〇ノ五
まつのはに　二九七ノ二
まつひとは(きぬ)　四七六ノ四
まつひとは(たれ)　二四三ノ三
まつむしの　二五八ノ六
まつもひき　二一〇ノ二
まつやまの　三八五ノ五
まつやまに(つらき)　三五〇ノ四
まつやまに(波高き)　四一〇ノ四
まどろまぬ(かべ)　三〇一ノ一
まどろまぬ(物)　三七七ノ三
まめなれど　四三二ノ四

ミ

みえもせぬ　四七一ノ六
みこしなか　四三六ノ二
みじかよの　二四三ノ六
みしゆめの　二四四ノ一
みそめずて　三六六ノ一
みちしらで　三〇六ノ三
みちしらぬ　三七七ノ二
みちなれる　四三三ノ五
みちのくの　四四五ノ三
みづのおもに　二四四ノ二
みづとりの　四〇三ノ二
みづのもり　四八八ノ三
みづひきの　二三五ノ四
みづまさり　四〇三ノ三
みづもせに　四八九ノ三
みどりなる　四五九ノ一
みなかみに　三一三ノ七
みなぐとも　四四二ノ六
みなぞこの　二三五ノ四
みなひとに(折られ)　二八九ノ二
みなひとに(ふみ)　四五六ノ四
みにさむく　四六三ノ五
みぬひとの　二三〇ノ三
みぬほどに　三三五ノ二
みれたかみ　四七六ノ三
みのうさを　四七一ノ四
みのならむ　三九五ノ三
みははやく(なき)　四五五ノ二
みははやく(奈良)　三一〇ノ四
みひとつに　四八一ノ四
みみなしの　四二二ノ二
みやこにて　四八八ノ二
みやこびと　二二一ノ三
みやこまで　四八七ノ四
みやのたき　四六一ノ四
みやびとと　四五二ノ五
みやまより　四三五ノ一
みよしのの　二三四ノ二
みるごとに　二八〇ノ二
みるときは　三二四ノ二
みるめかる(かた)　三五四ノ一
みるめかる(渚)　三二七ノ一
みるもなく　三六一ノ一
みをうしと　四四五ノ一
みをつめば　四一八ノ二
みをわくる　四七九ノ四
みをわけて(あら)　三二二ノ四
みをわけて(霜)　二九四ノ二

ム

むかしせし　三四一ノ一
むかしより　四三七ノ六
むさしのは　四四六ノ一
むすびおきし(かたみ)　四四九ノ一
むすびおきし(種)　四九八ノ一
むすびおきし(我が)　三〇三ノ六
むつましき　四五五ノ三
むばたまの　二九八ノ一

メ

めづらしや　四三七ノ一
めにみえぬ(風に心を)　三九九ノ三
めにみえぬ(風に心を)　四八五ノ五
めもみえず　三九四ノ四

モ

もえいづる　四二二ノ二
もえわたる　三二二ノ六
もがみがは　三六八ノ四
もしもやと　三六五ノ三
もちづきの　四三九ノ一
ものおもふと(過ぐる)　二九九ノ二
ものおもふと(月日)　二七七ノ三
ものおもふと(行きて)　四五〇ノ一
もみぢばに　二六六ノ三
もみぢばの(散りくる)　二八三ノ五
もみぢばの(流るる)　二八五ノ二
もみぢばの(ふりしく)　二八四ノ九
もみぢばは(ちる)　二八九ノ四
もみぢばは(なしき)　二九二ノ六
もみぢばも　二九三ノ一
もみぢばを(ぬさ)　四八四ノ四
もみぢばを(分け)　二八四ノ一
ももしきは　三四二ノ五
ももとせと　四九三ノ二
ももとせに　四九四ノ一
もるひとの　四〇〇ノ四
もるめのみ　四一一ノ一
もろともに(いざといはず)　三九六ノ一
もろともに(いざとは)　四六四ノ二
もろともに(おきぬ)　五〇一ノ二
もろともに(なる)　三四二ノ四

ヤ

やどかへて　三三九ノ二
やどちかく　二二三ノ三

やどみれば　四九六ノ四
やどもせに　二六五ノ五
やへむぐら(心)　二三八ノ五
やへむぐら(さして)　四一六ノ一
やへむぐら(しげき)　二四八ノ六
やまがくれ　四一九ノ三
やまかぜの(花の)　三三四ノ二
やまかぜの(吹き)　二八四ノ三
やまがはの　四七四ノ三
やまざくら　二三四ノ三
やまざとに　三三ノ二
やまざとの(草葉)　四八ノ一
やまざとの(まきの)　三一四ノ三
やまざとの(もの)　二六〇ノ六
やましなの　四九七ノ二
やまたかみ　三三八ノ二
やまちかみ　二九七ノ一
やまのはに　三五二ノ二
やまびこの(聲に)　三六〇ノ三
やまびこの(聲の)　三九七ノ五
やまびとの　四九五ノ一
やまふかみ　四六〇ノ二
やまもりは　三三〇ノ一
やればをし　四三八ノ三

ユ

ゆきかへり(きても)　四〇〇ノ三
ゆきかへり(ここも)　二七七ノ七
ゆきかへり(折りて)　二六七ノ四
ゆきかへる　二四三ノ五
ゆきくれば　二六〇ノ二
ゆきやらぬ　三三〇ノ三
ゆくかたも　三一四ノ四
ゆくさきに　三二九ノ二
ゆくさきを(知らぬ)　四八三ノ三
ゆくさきを(をしみ)　三二九ノ一
ゆくほたる　二五九ノ一
ゆくみづの　三三七ノ一
ゆふぐれの　四七四ノ五
ゆふぐれは(音になく)　四九九ノ二
ゆふぐれは(まつにも)　三〇一ノ三
ゆふされば(思ぞ)　四一七ノ四
ゆふされば(我が身)　三四七ノ一
ゆふだすき　二四三ノ一
ゆふやみは　三九九ノ三
ゆめかとも　三四二ノ二
ゆめぢにも　三五三ノ三
ゆめにだに(嬉し)　四五〇ノ二
ゆめにだに(まだ)　三四七ノ二
ゆめにだに(見る)　三〇六ノ二
ゆめのごと　三五二ノ四
ゆめよりも　二四四ノ三

ヨ

よしのやま　四四三ノ五
よそながら(思ひし)　二四四ノ四
よそながら(やまむ)　三〇五ノ五
よそなれど　四〇一ノ三
よそにても　二二七ノ四
よそにのみ　三三七ノ四
よそにふる　三一一ノ二
よそになる　五〇三ノ三
よとともに(あぶくま)　三〇三ノ二
よとともに(歎き)　三五一ノ五
よとともに(峰へ)　四二一ノ三
よとともに(我)　四五三ノ二
よのつねの(音)　三三一ノ一
よのつねの(人)　三六七ノ一
よのなかと　四六九ノ二
よのなかに(忍ぶ)　三三〇ノ八
よのなかに(しられぬ)　四四三ノ一
よのなかに(猶)　四一七ノ八
よのなかの(憂は)　四一七ノ三
よのなかの(かなしき)　五〇一ノ三
よのなかは(いかに)　四七四ノ四
よのなかは(いさとも)　四七四ノ五
よのなかは(うき物)　四四五ノ四
よのなかを(厭ひがてら)　四六〇ノ五
よのなかを(厭ひて)　四七四ノ二
よのなかを(しらず)　四五三ノ一
よひながら　二五〇ノ三
よひのまに　三五〇ノ五
よもすがら　三三一ノ四
よろしほの　三九六ノ四
よろならば　二九八ノ四
よろづよと　四三九ノ二
よろづよに　二六四ノ二
よろづよの　四九二ノ一
よをうみの　三三〇ノ四
よをさむみ　二九六ノ五
よをそむく　四五一ノ二

ワ

わがかどの　三三〇ノ三
わがきたる　二三三ノ四
わがこころ　三一七ノ三
わがごとく(あひ)　三〇三ノ三
わがごとく(物思ひ)　二八六ノ五
わがごとく(物や)　二五九ノ七
わがごとや　三三三ノ二
わがこひし　四一九ノ二
わがこひの(敷に)　三三五ノ六
わがこひの(かずを)　三六〇ノ一
わがこひの(消ゆる)　四〇一ノ四
わがこひを　三三一ノ二
わがせこに　二一四ノ三
わがそでに　二六八ノ二
わがそでは　三三三ノ五
わがたちて　四一五ノ五
わがために(おき)　四五六ノ一
わがために(おもはぬ)　二三三ノ五
わがために(且は)　四一三ノ
わがためは(いとど)　三五六ノ
わがためは(見る)　三五八ノ一
わがのりし　四三五ノ四
わがみにも　四五二ノ四
わがやどと　三六三ノ二
わがやどに(あひ)　四六五ノ一
わがやどに(すみれ)　三三八ノ一
わがやどの(うめ)　二二四ノ七
わがやどの(垣根)　二四九ノ四
わがやどの(かげ)　三三五ノ一
わがやどの(櫻)　三三五ノ一
わがやどの(なげき)　三三八ノ五
わがやどの(庭)　二六七ノ五
わがやどの(はな)　三三五ノ三

わがやどの(尾花)　二六八ノ四
わがやどな　四四七ノ二
わかるれど　四八一ノ三
わかれぢは　四八二ノ五
わかれつる　三四五ノ三
わかれては　四八〇ノ五
わかれにし　四九七ノ三
わかれゆく　四八一ノ五
わかれなば　三六二ノ一
わすらるる　三一六ノ一
わすられて(思ふ)　三三〇ノ一
わすられて(としふる)　四四〇ノ五
わするとは　四四四ノ三
わするなと　四八三ノ四
わすれぐさ　四一五ノ一
わすれじと　四八六ノ五
わすれなむと(いひし)　三八八ノ一
わすれなむと(思ふ心の)　三五六ノ一
わすれなむと(思ふ心の)　四四〇ノ四
わすれれと　三八九ノ一
わたつみと(あれにし)　三五一ノ一
わたつみと(頼めし)　三二〇ノ五
わたつみに　三二三ノ六
わたつみの(神に)　二八五ノ六
わたつみの(そこ)、　三三八ノ二
わたのそこ　三四八ノ二
わたりては　四一四ノ三
わびしさを　三二五ノ三
わびぬれば　三九五ノ四
わびはつる　三九〇ノ四
わびびとの(そぼつ)　三一九ノ一
わびびとの(たもと)　五〇三ノ二
わびわたる　三三六ノ六
わりなしと　三三三ノ一
われならぬ(草葉)　四七二ノ三
われならぬ(人)　四〇九ノ二
われのみは　四二五ノ二
われのみや　三二六ノ四
われもおもふ　四七五ノ五
われをこそ　二三三ノ四
われをのみ　四八四ノ一

エ

ゑにかける　三四〇ノ二

ヲ

をしからで　四四九ノ三
をしとおもふ　四七九ノ一
をしへおく　四九四ノ四
をしめども　二三八ノ六
をちこちの　四四四ノ四
をのののえの　四九五ノ四
をみなへし(色)　二七四ノ一
をみなへし(かれ)　四九九ノ三
をみなへし(草むら)　二七三ノ二
をみなへし(匂ふ)　二七四ノ二
をみなへし(匂へる)　二七二ノ六
をみなへし(花の心)　二六三ノ二
をみなへし(花の盛)　二七三ノ四
をみなへし(花の名)　二七四ノ三
をみなへし(ひる見て)　二七三ノ三
をみなへし(折りけむ)　二七四ノ四

をみなへし(折りも)　二七五ノ一
をやまだの(おどろ)　四二九ノ三
をやまだの(なはしろ)　三五八ノ三
をやまだの(水)　四〇六ノ四
をやみせず　三〇六ノ一
をりつれば　三三五ノ三
をりてみる　二六四ノ一
をりはへて　二四五ノ三
をりをりに　四七七ノ一
をるからに　二六二ノ四

下句七言

ア

あかずながるる　二七一ノ五
あかずわかるる　四二三ノ二
あがたのゐどの　二三一ノ三
あかつきがたの　二四四ノ三
あかつきがたや　二四八ノ三
あかぬもみぢの　二八五ノ三
あかぬわかれに　二四五ノ二
あかぬわかれの　二五八ノ五
あかぬわかれや　三四三ノ二
あきかぜふくと　二五九ノ一
あきくるかぜに(疑はる)　二六五ノ二
あきくるかぜに(疑はる)　四七一ノ三
あきたつひとは　二五三ノ一
あきとつげつる　二五三ノ四
あきとともにや　四八四ノ四
あきにあきそふ　四七四ノ五
あきにのみこそ　二六三ノ二
あきのくさばに　三八三ノ二
あきのこころを　二七二ノ二
あきのなぬかの　二五七ノ四
あきのはじめを　二五三ノ二
あきのはやしに　二八四ノ五
あきのむすべる　二六一ノ四
あきのもみぢと　二八七ノ三
あきのよすがら　三八二ノ四
あきゆふぐれに　二八六ノ一
あきよりほかに　二七三ノ七
あくるはつらき　四〇三ノ三
あくるもしらず　三八二ノ五
あくれどあけぬ　三一三ノ三
あくればきゆる　四三三ノ二
あけながらやは　四三一ノ四
あけなばきみを　二九〇ノ三
あけぬかぎりは　三〇四ノ四
あさきよりまた　二五〇ノ四
あしたのまをぞ　二二四ノ一
あしのいとなき　三九二ノ二
あしのうらばの　四一七ノ六
あしのれのみぞ　四〇九ノ四
あしまよふえを　三四九ノ四
あすかがはをも　四九八ノ五
あたらしきにも　二八〇ノ三
あたるごとにや　三三六ノ四
あとうちけつな　四八五ノ一
あとなきみづの　三六六ノ四
あとやたづぬる

あとをもみぬは　三三三ノ四
あはでのみこそ　四〇六ノ三
あはでふるよの　四一八ノ四
あはぬなげきの　三〇三ノ五
あはぬなげきや　四〇一ノ四
あはれとおもふ　二五六ノ四
あはれとおもふを　三〇四ノ三
あひてののちに　三一〇ノ八
あひみてのちぞ　三〇〇ノ一
あひみむまでは　四八六ノ五
あふことなみに　三九六ノ四
あふことまれに　三九九ノ五
あふさかのせき　三〇三ノ三
あふさかまでは　四七七ノ二
あふさかやまに　三二一ノ四
あふさかやまを　四一九ノ四
あふにはなにを　三三九ノ四
あふひてふなは　二四三ノ一
あふみちもなき　三九八ノ五
あふみてぶらむ　三七三ノ一
あふみはなほぞ　三七七ノ一
あふよしもなど　三七五ノ二
あへるこよひは　二五六ノ六
あまたかぞへて　二六七ノ七
あまつそらなき　三一〇ノ三
あまのとまやは　四五〇ノ一
あまのとわたる　二五五ノ四
あまのよそめに　三一〇ノ五
あまりてなどか　三二二ノ六
あめもひとめも　三九四ノ二
あめもよにこじと　四〇七ノ一
あめやめてとは　二六六ノ四
あやしくあはぬ　三三一ノ三
あやしやいくよ　三三二ノ四
あやなくきみや　四四二ノ二
あやなくなにに　四三二ノ一
あやふきまでも　三三四ノ五
あやふきものは　二八四ノ八
あらしのさきに　二四八ノ一
あらぬもそれと　二八三ノ五
ありあけのつきの　二六三ノ五
ありてののちも　三三三ノ三
ありへばこひの　四四九ノ五
あるかなきかに　四六九ノ二
あるかなきかの　四六〇ノ一
あるじにたる　四五九ノ三
あるとみるにぞ　四六六ノ一
あれこそまされ　四三二ノ三
あれたるさまを　四三九ノ四
あれたるなみの　四三〇ノ一
あわともぼやく　四四〇ノ五
あわにきえぬる　四三一ノ三

イ

いかでかひとり　四六四ノ二
いかなるいろに　四八一ノ二
いかなるかぜの　四三八ノ一
いかなるすぢに　二三三ノ一
いかにあへたる　四三五ノ三
いかにしてかは　三八八ノ四
いかにせよとか　三三四ノ二
いかにちぎりし　三四一ノ一

いくたのうらの　三〇五ノ一
いけのこほりを　二二一ノ四
いざおなじくば　二六二ノ四
いざくみみてむ　四四三ノ二
いざもろともに　二一一ノ三
いしまにたぎつ　二九七ノ八
いそにやいでて　四二四ノ五
いそのたまもや　三四四ノ二
いたづらいれを　三七〇ノ二
いつかあきかぜ（吹きて）　三九〇ノ一
いつかあきかぜ（ふきて）　四七一ノ二
いつかくもまの　三七一ノ六
いづかたへとか　三九二ノ一
いつかたまもを　三五四ノ二
いつかはきみが　三八六ノ二
いつかはこえむ　三四五ノ五
いづこにそふる　三九四ノ一
いづこばかりに　二八八ノ一
いづこをしのぶ　三九〇ノ四
いづこをはかと　三三五ノ三
いつしかさくら　二一〇ノ二
いつにならへる　三四七ノ二
いづらはつゆの　三二八ノ五
いづるみなとは　四九〇ノ二
いづれあだなる　三七四ノ三
いづれかはなの　二九七ノ四
いづれかわたる　二七六ノ二
いづれともなく（穂に）　三七九ノ七
いづれのかたか（まづ）　二七九ノ八
いづれのかたか（まづ）　二九一ノ一
いづれのかたに　三四七ノ一
いづれのそらの　五〇二ノ四
いづれのやまの　三二一ノ三
いづれのよにか　四七一ノ一
いづれまさると　三六九ノ三
いづれもものの　二五九ノ五
いとおほよそに　三七八ノ二
いとかくむれは　三三六ノ一
いとどあだなる　二三五ノ二
いとどこづけを　四九五ノ二
いとどしのぶの　四九八ノ一
いとどなみだぞ　四九八ノ三
いとどまぢかく　四一三ノ二
いとはたえでも　四〇四ノ四
いとひたぶるに　四二九ノ三
いとをたのめる　三一一ノ三
いねずきけとや　二四〇ノ二
いのちをいつの　三四〇ノ一
いのちとたのむ　二四八ノ五
いはせのもりの　四一一ノ四
いはではえこそ　四七〇ノ三
いはでものおもふ　三三四ノ五
いはぬをしるは　三六六ノ一
いはまほしくも　三二四ノ四
いひしことのは　三三〇ノ二
いへにかへると　二八四ノ一
いへぬせむとは　四四四ノ四
いまこそくもの　三〇五ノ五
いまぞこのぱは　二九三ノ四
いまぞもみぢの　二七九ノ九
いまはかぎりと　三八八ノ一
いまはかぎりの　三五五ノ二

いまはこしぢに 二九五ノ一
いまはこゑこそ 三四ノ三
いまはなにてふ 三八ノ四
いまはわたると 四〇五ノ四
いまもありてふ 三四七ノ四
いまもけぬべき 四一ノ二
いまやなくらむ 二七ノ一
いやはるばると 三三五ノ二
いらぬにまどふ 四一七ノ五
いりにしひとの 三四二ノ五
いろかはりぬる 二六〇ノ四
いろことにこそ 二七九ノ一
いろどるあきの 二七九ノ七
いろなきつゆは 二七九ノ二
いろのかぎりな 二八九ノ五
いろのかはれる 二八一ノ七
いろばかりこそ 二四二ノ七
いろはむかしに 四七六ノ二
いろはわがため 四五六ノ二
いろをときはに 三四六ノ三
いろをばひとも 三六六ノ三

ウ

うかべるふねに 四八六ノ三
うきたるこひも 三五五ノ三
うきてへぬらむ 三六八ノ二
うきてもひとを 三一三ノ七
うきなをすすぐ 四八三ノ四
うきれながらに 二九七ノ一〇
うきはかへりて 三三六ノ一
うきはものかは 四一四ノ一
うきみながらの 四六〇ノ五
うきめのみこそ 四七四ノ二
うきよそむかむ 四四九ノ三
うきふのなかに 四四三ノ三
うきよのなかを 二四九ノ二
うきをもしらで 四〇五ノ三
うぐひすはは 二九八ノ二
うぐもきてとふ 四一四ノ二
うくもつらくも 四〇八ノ四
うすきこころは 三九九ノ四
うすきそでにも 四四四ノ二
うらみてぞふる 四〇三ノ二
うらみもあへず 三三〇ノ四
うらむることぞ 四八七ノ三
うらやましくも 四六一ノ一
うれしきあめに 四九二ノ三
うれしきことを 三一九ノ三
うれしきせにも 四〇三ノ三
うれしきせをば 二一九ノ三
うゑけむときを 四一五ノ二
うゑてだにみし 二三三ノ三

エ

えだしげければや 四六三ノ四
えだにこもれる 二一ノ五

オ

おきつたまもを 四二六ノ三
おきてもれても 三三ノ二
おきてわびしき 三七三ノ四
おきどころなき 四一五ノ三
おきのもくづを 四三九ノ五
おくしらつゆぞ 五〇一ノ三
おくしらつゆを 二六八ノ六
おくにもとにも 三九六ノ三
おくべきやどの 三七七ノ五
おくらむつゆは 四三三ノ一
おくるあしたや 三六〇ノ五
おくれさきだつ 三五〇ノ一
おくれてさくは 二六八ノ五
おけるしらつゆ 三一九ノ四
おけるものとも 二七〇ノ一
おちばごろもと 二六八ノ五
おつるかげさへ 四六一ノ四
おつるしらあわの 四三六ノ三
おつるなみだも 二五八ノ六
おとはやまより 二五七ノ一
おとりやしなむ 三六三ノ二
おなじかざしを 四〇七ノ二
おなじこころに(しらせ) 三七三ノ四
おなじこころに(人を) 三四〇ノ二
おなじところを 二八七ノ五
おなじなげきの 三九四ノ三
おのがよよには 四一〇ノ二
おのれくもゐに 三五五ノ三
おひかぜにても 四一五ノ一
おふてふやどは 四一五ノ五
おほかたとのみ 二二三ノ六
おほかたにこそ 三九七ノ一
おほくのつきを 四九五ノ一
おほくのとしを 二六二ノ一
おぼつかなくぞ 二八二ノ二
おぼつかなくも(散り) 二三二ノ二
おぼつかなくも(花陰) 二四九ノ一
おぼつかなしと 三七八ノ一
おほよそびとに 二三七ノ三
おもかげにのみ(色を) 二八二ノ一
おもかげにのみ(見え) 三二ノ五
おもはざらなむ 三六六ノ三
おもはぬためは 三三ノ四
おもはぬやまに 三〇一ノ五
おもひいづるが 三四九ノ一
おもひぐまなく 二四一ノ一
うしとみつつも 三三〇ノ四
うしろめたくは 三三ノ二
うしろやすくも(おもほゆ) 四九二ノ一
うしろやすくも(かざし) 三〇二ノ二
うたかたびとに 三八七ノ一
うちこえゆかむ 四八九ノ三
うちのとのとも 二五六ノ一
うちはらへども 四七八ノ三
うちみむたびに 三七五ノ三
うつつにまくる 三七七ノ三
うつつにもあらぬ 四九九ノ一
うつつにものぞ 二七九ノ四
うつろはむとて 三〇六ノ五
うつろひにける 二七ノ二
うつろふはなを 四八八ノ二
うみよりいでて 二七ノ四
うめのはつはな 二二五ノ五
うめのはながさ 四二八ノ二
うらしまのこを 三九二ノ四
うらにやどりを 四七五ノ五
うらふくかぜの

おなじなげきの 二八七ノ五
おのがよよには 三九四ノ三
おのれくもゐに 四一〇ノ二
おひかぜにても 三五五ノ三
おふてふやどは 四一五ノ一
おほかたとのみ 四一五ノ五
おほかたにこそ 二二三ノ六
おほくのつきを 三九七ノ一
おほくのとしを 四九五ノ一
おぼつかなくを 二六二ノ一
おぼつかなくぞ 二八二ノ二
おぼつかなくも(散り) 二三二ノ二
おぼつかなくも(花陰) 二四九ノ一
おぼつかなしと 三七八ノ一
おほよそびとに 二三七ノ三
おもかげにのみ(色を) 二八二ノ一
おもかげにのみ(見え) 三二ノ五
おもはざらなむ 三六六ノ三
おもはぬためは 三三ノ四
おもはぬやまに 三〇一ノ五
おもひいづるが 三四九ノ一
おもひぐまなく

おもひつくばの 三三四ノ三
おもひにあへず 三九四ノ五
おもひにあへぬ 三六五ノ六
おもひにはなほ 三六七ノ五
おもひにもゆる 四〇七ノ四
おもひのほかに(あれば) 三一〇ノ六
おもひのほかに(鳴かば) 二四三ノ三
おもひみだれて 二四三ノ二
おもひもならぬ 三三六ノ四
おもひやみにし 三〇七ノ二
おもひやりつつ 三一七ノ三
おもひわたるを 三三一ノ一
おもふがごとは 三三五ノ二
おもふかたにも 四一七ノ七
おもふがためは 四九三ノ二
おもふこころの(たがふ) 三六四ノ三
おもふこころの(深さ) 三四八ノ二
おもふこころを(えやは) 三三三ノ三
おもふこころを(なかぞら) 三五四ノ三
おもふことこそ 三三三ノ四
おもへばむれの 四七一ノ四
おらぬにしきを 二八三ノ七
おりたちてこそ 三一九ノ一
おりやたつべき 三三三ノ二
おろかならずと 三三三ノ一

カ

かからむものと(思ひかけ) 五〇一ノ二
かからむものと(思ひやは) 四一六ノ四
かかるおもひに 三九八ノ三
かかるみるめは 四七二ノ一
かかるやひとを 四三四ノ三
かかるやまぶし 四三六ノ三
かかれるゆきを 二九六ノ二
かきなすことの 二七二ノ三
かきれのきくは 二八三ノ二
かきれのままに 二四一ノ五
かきれもたわに 二四一ノ三
かぎりあるよの 四八〇ノ五
かくこそあかせ 二六六ノ二
かくするほどに 三六五ノ三
かくてあふせは 四七一ノ一
かけてぞたのむ 二四二ノ五
かげばかりなぞ 四七九ノ四
かげはくちきと 四四五ノ三
かげみゆべくも 三三八ノ四
かごとばかりの 四〇七ノ五
かごめにさそふ 三二一ノ一
かざしにさせる 四八九ノ四
かされてものぞ 五〇〇ノ三
かされば うとし 四五一ノ二
かすみふきとけ 三二一ノ五
かずをもしらぬ 三〇七ノ一
かぜにみだるる(錦) 二八三ノ六
かぜにみだるる(紅葉) 二六四ノ四
かすみにまがふ 四六三ノ一
かぜよりほかに(誰か訪ふ) 三八九ノ二
かぜよりほかに(誰か訪ふ) 四八五ノ四
かぞことごとに 二一七ノ四
かぞふばかりに 三三〇ノ五
かたみにくめる 三一〇ノ二
かたみにみれば 三一〇ノ二
かたるがごとは 三三八ノ三

かぢとりあへぬ 三三一ノ二
かつがつものは 三四五ノ一
かづきていらむ 三三八ノ二
かつむつれつつ 三三三ノ五
かつらのえだに 二七〇ノ四
かなしくつゆや 二六九ノ六
かばかみみつつ 二五七ノ八
かはらぬいろと 三七三ノ六
かひありとこそ 三五一ノ二
かひなくあめの 四一〇ノ五
かひなくこひを 三六二ノ二
かへすばかりの 四八〇ノ三
かへすはつらき 三六二ノ一
かへらむひとを 二九三ノ一
かへりぬべくも 三七一ノ四
かへるあしたと 三〇一ノ二
かへるいろなば 三七一ノ五
かへるがへるも 三六一ノ一
かへるのやまは 四八四ノ一
かへるをりにや 三三九ノ二
かみなびやまに 二四七ノ五
かみもたすけぬ 三三八ノ五
かめにさせれど 三三六ノ二
かものやしろの 四三六ノ一
かよひしひとの 四〇九ノ五
かよふばかりの 三三八ノ一
からをみむとは 三六一ノ五
かりがねはまづ 四八〇ノ四
かりかりとのみ 二七八ノ三
かりこそなきて 二七七ノ三
かりにだにきて 四四六ノ二
かりにやわれを 二八七ノ二
かりのこころの 三三四ノ四
かれせぬものは 三三七ノ三
かれにしえだの 二二二ノ二
かわくたもとの 三〇三ノ一
かをとめてだに 二二五ノ二

キ

きえあへぬゆきの 二〇九ノ二
きえかへりつつ 三〇四ノ一
きえこそかへれ 三七一ノ三
きえせぬものは 四五五ノ二
きえてはかなき 三八四ノ一
きえてものおもふ 二九三ノ六
きえぬかぎりは 二九六ノ三
きえぬばかりぞ 四七八ノ四
きえとがめずぞ 四三四ノ二
ききにきこえて 二四二ノ二
ききわたりつつ 三三四ノ六
きくにもいまは 四七四ノ四
きしにとしふる 三三一ノ四
きしにもよらず 四五四ノ五
きするばかりの 二三〇ノ一
きていたづらに 三三九ノ一
きてたはやすく 二九四ノ八
きてはかひなき 三三三ノ一
きにしかたにも 二三九ノ一
きぬかへしつつ 三六六ノ二
きのすゑごとに 四八九ノ一
きのふのふちぞ 三〇三ノ七
きのふのゆめを 三八八ノ二
きみがおきつる 四七三ノ四